

熊谷蓮生一代記

L289
7



文化八年未年新板繪入



くまがへれんせんわらだいこ
熊谷蓮生一代記
 全部 七冊

蓮生法師俗姓武亮の國乃後人熊谷氏母氏直實とて源平の闘小
 徳と武亮の人の名が頗小道知と後上落と名水法然上人の御身
 子に於り出家して蓮生と名乗信公僧園下り本年又頼りく如來の御名と
 考りし和名樂入僧と蓮生といふ事また妻氏あり書也

熊谷蓮生一代記序



蓮生上人俗稱熊谷直實南生於
 又直實平安錦街之末後移於東

武崎玉那初十六果有都芳門之

我師至名ハ多と没去功雄偉世人

所口輝亦不替也子女支費以是口言授

熊谷蓮生一代記序

心易相傳方刻亦公子敷盡若
慨然頓悟無常運運之身義以遠
禮吉水禪房剝髮受戒其
信心堅固踐之乎難進亦唯此
向我場之常也今年一創一寺於
之之舊址曰慈谷山法然寺宗祖

大師西印可必記此始末書若干
是澤田氏在寺之為國字卷之加
以寫給盡為信書道其法通也
木文御一應澤田氏之定序
編塔之平圃

維時文化六年一葉次己巳四月

熊谷山法然寺五十九世

厭喫



熊谷蓮生一代記大意

德宗元郎丹治志實其姓ハ 桓武天皇十一代の後胤平治御運主貞

三男永治元年の誕生ありて二葉の母と共ニ武臣徳宗より久下橙

流方より成人十六葉ありて保元の乱より徳宗を養育せしむりて同葉

都方門の軍少勇士の名と尊治兼四年十一月源頼朝の臣の同年佐

竹冠者退討あり名一元曆元年一月少方の合戦に勢功一同年

四月揚兵一の名あり其後建久三年武成乃執事一日に平武

州とあり上流一宮吹上人の御弟ありけり源運生とあり日六年八月

十日徳宗系下向一杉の御前にて願懸標士の旨を傳へ又法干光の

故実と述傳けけ内史者徳宗の耳と教つ日七年又上京して西の二月法西

粟此れ光明され地は多きを結ぶ五年の後建仁二年又園東より久元

年又故よりして城郭を治の里より宮とト云ふも分りけり幸ありは後り又

武成より其後あり元後九月官位を坊行年七十五葉武成の時武成

若の底めてよふ文は生れまはしと違ふ終は編年記なるは其院ありつ
目う文世人秘事とい書の傍文のどく記を道小隠るは若れ事之軍門遊場の事
らふ不澄そく妻とも云ん傍家れ事介小其家うんれせん突つて其院の保り
ちんら終は為理小記する事か流の助りけ書と云ん人其書は師が終馬乃
奇特をあらて佛道と傍する事あり人又云佛は師せんもの所謂
と書を傍理と求めて養とあるを一取捨分別の養はる應を

文化七年仲秋日

陸東吉水齋

首原齋仲通



熊谷蓮生一代記總目録

卷之一

熊谷以郎丹治直實家系之事

并ニ弓矢丸池生奇理之事

直貞極樂を討取事

并ニ直貞家号と熊谷と改む事

直貞父子傳計と落入付事

并ニ久下權頭弓矢丸と若月事

卷之二

弓矢丸熊谷直實と改名初陣事

并ニ老母直實と養訓之事

熊谷守清川合戦を名く事

并ニ小浜野武家格柵と流る事

源九郎義経一谷へ負向之事

并ニ鷲尾三郎義久が事

熊谷父子一若魁之事

并ニ忠実者音楽と同感と僅と事

卷之三

熊谷父子勇と揮事

并ニ平山武者所を名く事

九郎義経一谷逆落之事

并ニ平家西海の浪を渡る事

熊谷忠実大又教書と討敵を起し事

并ニ教書遠言母夜の石を号し事

熊谷軍中子勝頼への事

并ニ義経忠実が忠義と幾ある事

卷之四

熊谷直實教書の御首と送る事

并ニ熊谷小次郎娘の切腹と存る事

熊谷権次と界田幸福と事

并ニ忠実ゆ家の頼をゆと事

頼朝と熊谷と暇をゆと事

并ニ忠実都志と事

熊谷上系箱根小一島と事

并ニ忠実吉水而出家一蓮生と改む事

卷之五

月輪禪定法慈上人と推法之事

并ニ蓮生坊昇殿と許さる事

法坐上人降松栴子おぼろす事

并ニ蓮生玉琴小教養の遣と送事

玉琴親子教養と養ふ事

并ニ蓮生教養と立石の碑事

玉琴親子教養心之事

并ニ漸教養立石の碑事

卷之六

南都大佛殿造之と事

并ニ蓮生直家法坐上人小福と事

蓮生古郷へ下向送馬之と事

并ニ同教養立石の碑事

蓮生武藏野と立石宮跡之部頼徳小福と事

并ニ頼徳教養心之状と事

蓮生古郷と老母と對面と事

并ニ蓮生信西栗生と因幡と事

頼朝公の尼御甚即蓮生と對面と事

并ニ蓮生教養立石の碑事

慈母の老母と對面と事

卷之七

蓮生武藏野と立石宮跡之部頼徳小福と事

并ニ系極通法然年靈場と事

蓮生古郷と老母と對面と事

并ニ上ノ蓮生教養立石の碑事

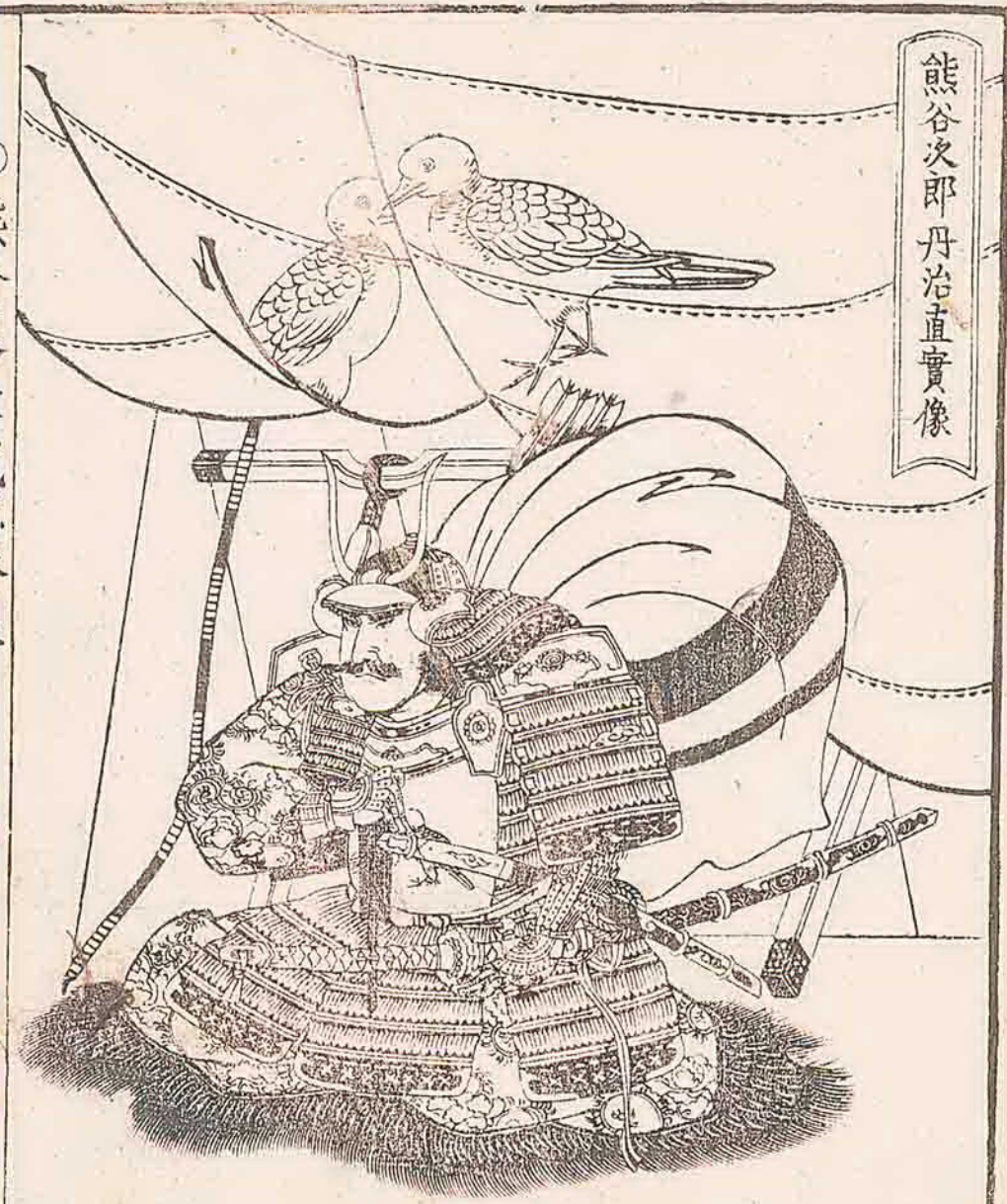
法然上人漸教養立石の碑事

并ニ上人蓮生小曼陀羅と福と事

空師信初の死を立門侶と試み奉り
 并ニ直生坊信の席より奉り
 熊谷直實又入道と右郷へ迎ふ事
 并ニは然上人直實が孝心を感み奉り
 直生村名の市より札と奉り奉り
 并ニは直實及一務へ遣書り奉り
 直生再び札と奉り奉り奉り奉り
 并ニ上品住生奇蹟を奉り

總目錄終

熊谷次郎丹治直實像





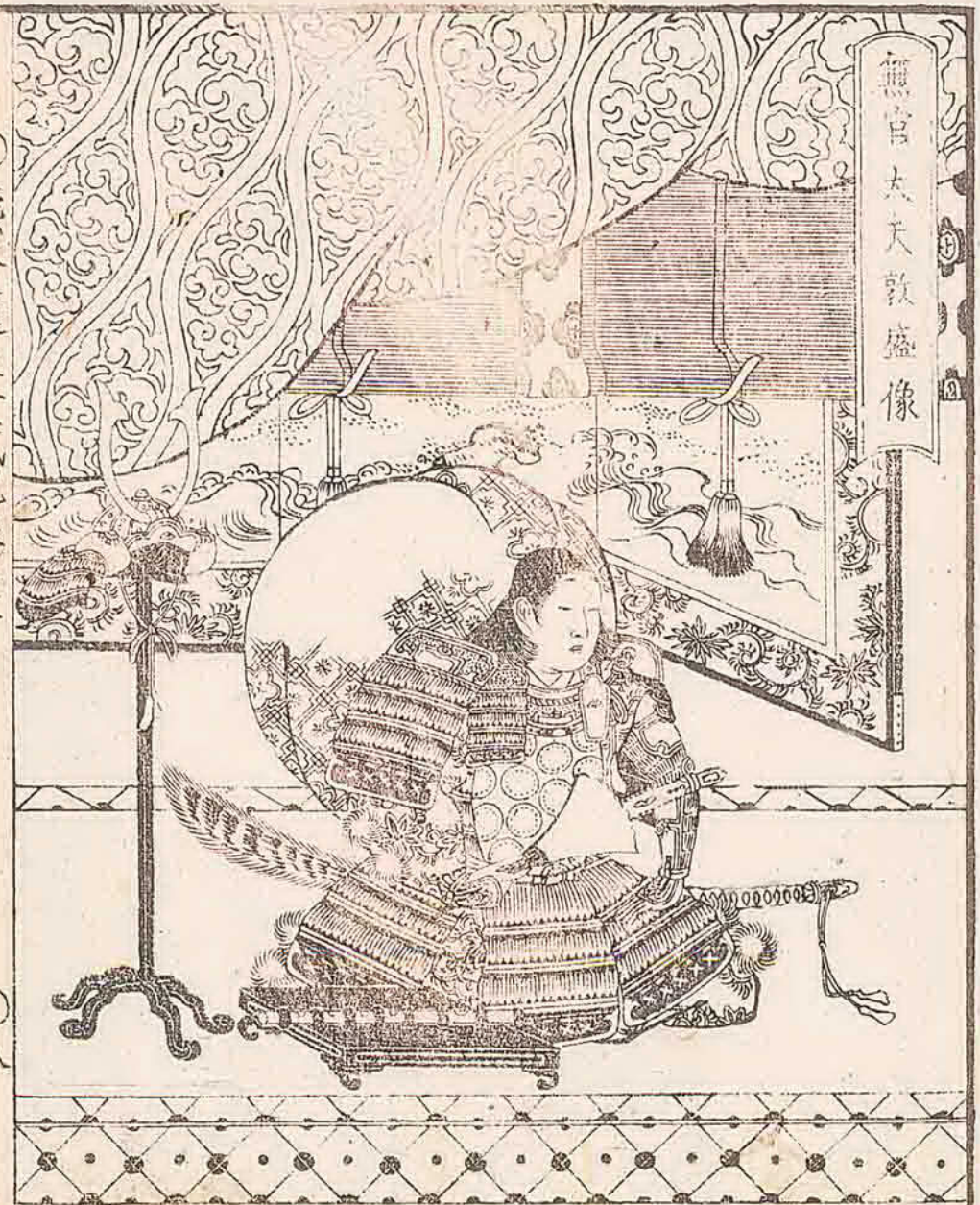
直美贊

一出轅門去功名亦不空
緇衣藏鉄戒梵客於英雄

鎌士吉



熊官大夫敦盛像



熊谷蓮生一代註卷之二



敦盛讚

城頭吹笛晚香骨沒花烟
淡波漫水千古義名傳

鎌田活齋



直實畧系譜

人皇五十一代
桓武天皇

一品式部卿
葛原親王

母夫多治比貞宗
參議長野女

正四位下
刑部卿
從四位下
右中將
平中
仲野親王
茂世王
好風
貞文

母藤河子贈太政大臣

上總從五位下
高見王
高岑王

始而賜平姓

中畧

熊谷蓮生一代註卷之二

七

鳥羽院北面

治郎大夫

直貞

姓改熊谷
為忠盛死

一男

直正

父同死

二男

直俊

父同死

三男

直實

熊谷治郎

小治郎

直家

遁世而後歸法力房蓮生

熊谷連生一代記卷之一

目錄

熊谷次郎丹次直實家系之事

并三弓矢丸誕生奇福之事

直貞極熊と討取事

并二直貞家跡と熊谷と改印事

直貞父子謀り入討り事

并二久下權頭弓矢丸と夜月事

熊谷蓮生一代記卷之一

熊谷直實家系之事

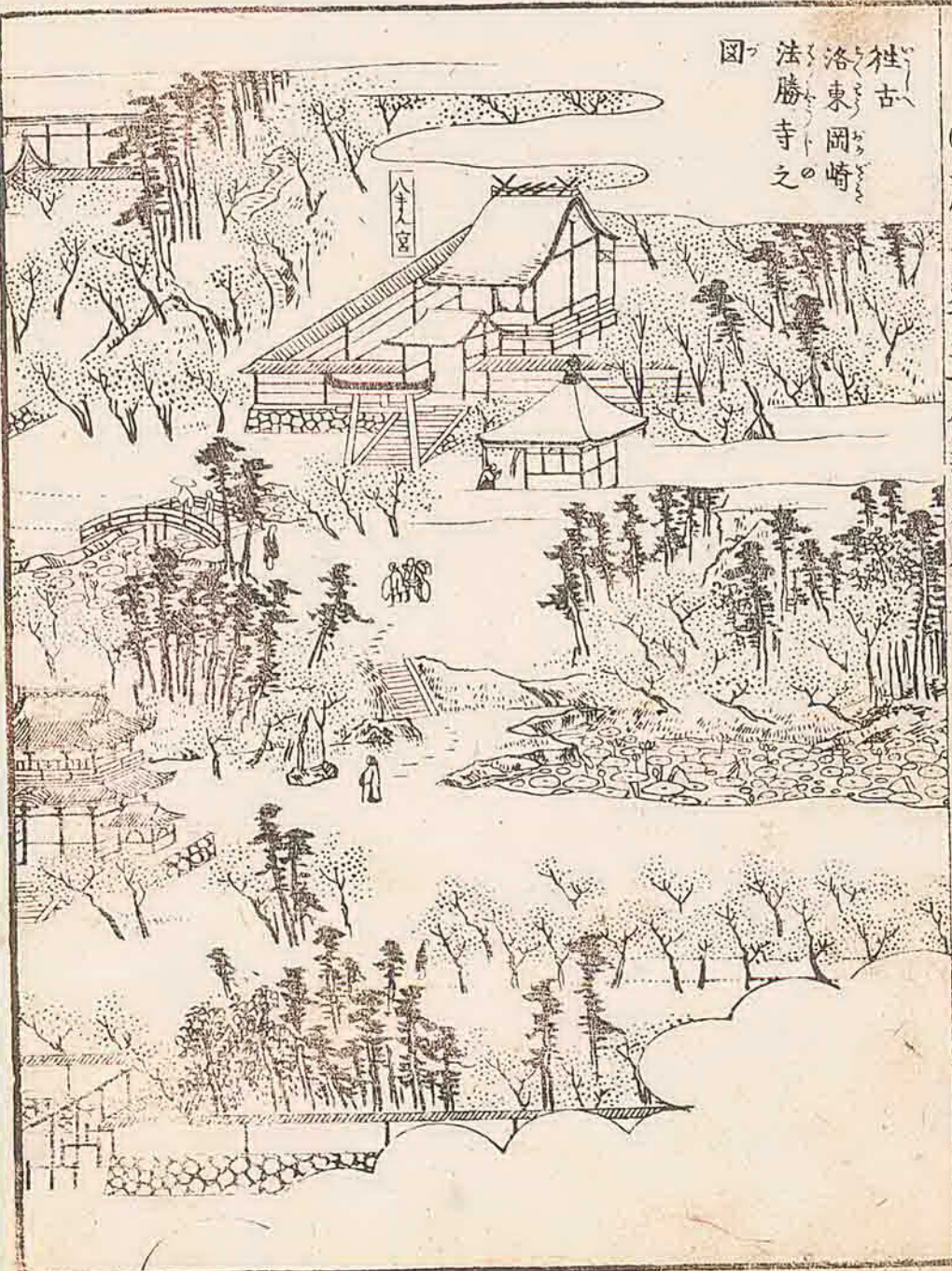
并弓矢丸証生奇瑞之事

經曰武は是菩薩の行也干戈を以終佛事を成んやや修まるる
 うの真ん歸て門を出でずて俗ぞう歸い恒い沙く此を諸しよ法ぽうを起起おこす大乘だいじやう至し極ごくの妙
 用もち方かたり流財りゆうざい産さん業ぎやう皆みな與い實じつ相さうも説説とくきたんバ士農のう工こう商しやう乃なり道みち
 とめぐちんれも武ぶ士しハ四民の長ちやうたと也一民にん二にん民を救すくふ其全ぜん也也
 然しかんも惟ただ弓きう箭せん刀とう杖じやうと幸幸しやうして殘害ざんがい殺ころ戮とくと事事ことを成成さす者者もの也也
 真まの武士ぶしハ非非ひず皆皆みな匹ひつ夫ふの常常じやうなれバ仁仁にん義ぎの武士ぶしハ非非ひずくして
 却かへて一世せれ回回かいふ事事を滅めつく名名なを穢穢けつのとを成成さす多多たく生生せい死し回かいの業
 火くわ身しんと燒燒や修しゆ羅ら圖と淨じやうれ此此こゝに沈沈しん淪りんす其其まが事事を成成す者者もの也也

熊谷蓮生一代記卷之一

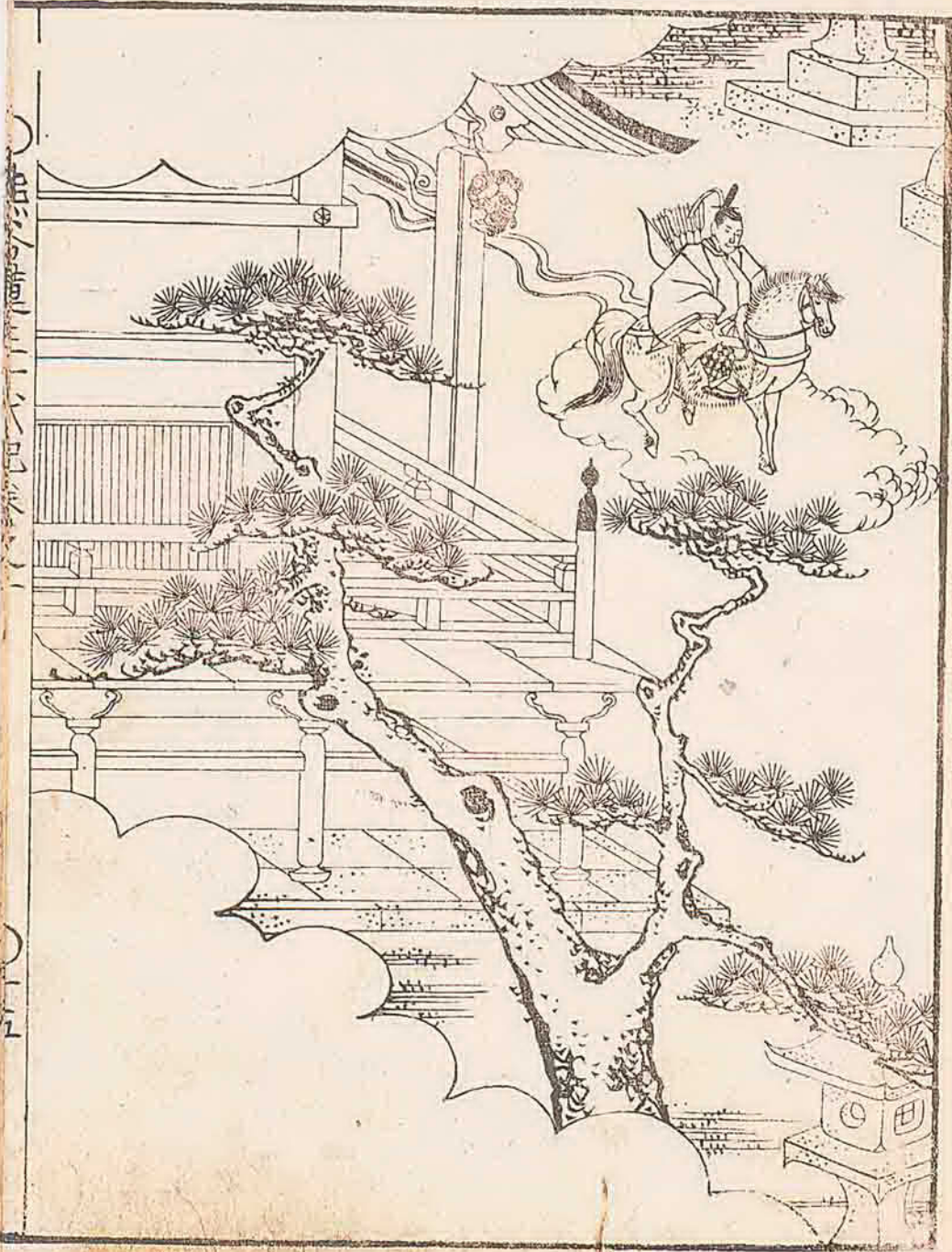
時玉郡熊谷莊の住人は藤堂に旗頭徳谷次郎丹治直実と
 つゝ武士あり。其先祖をひかふ人皇五十七代桓武天皇より十一代
 の後醍醐で鳥羽院の北面高力次郎左平直貞の三男母ハ
 成木左平久下権頭が姉あり其の母は姉は夫ありて
 聖武のありの御母也それハ直貞二
 人の男子ありしどもよかざり。何れも剛勇ハ一子と得てくるとひ
 長々うまふ。後弘治末足利の時法勝もり人皇七十二代白河院の
 兼曆元年に御建立す。金堂講堂常の堂。縁橋理
 藤総社八十六百に旦廊八は之北南大門ホ。義孝はく義
 美をそし。本より飾より黄金を飾りて極く。中より八
 角九重に塔婆女ハ。聖徳太子に八十にふりて。書く。人皇
 九會ハ。曼荼羅と安んじ。まよ。三國の大地也。始り

造り出さる。四月天竺の雲熱地震日の昆明池我朝の難
 の浦ハ其影を穿てて足少。寺内ハ橋とあま。柱く。ハ
 頃ハ庭一面の白ありて。其景危り。も。又。り。れ。ハ。ん。ん。
 人ともは。寺。不。通。で。死。を。極。り。て。和。歌。を。詠。ハ。ぬ。永。き。日。に。言。ふ。ま。る。る。
 疎。支。南。寺。ハ。八。幡。宮。ハ。聖。徳。わ。た。り。て。備。後。む。さ。か。ら。れ。ハ。
 寺。後。老。若。の。こ。ん。け。り。毎。日。た。ま。な。け。ま。た。車。貞。丈。婦。と。此。
 所。神。小。祈。籠。と。な。り。て。常。ふ。あり。と。い。ひ。ま。り。其。信。心。ハ。疑。り。や
 ある。根。丈。婦。の。名。ハ。八。幡。之。中。より。弓。矢。を。授。る。と。い。ふ。て。愛。い。え。ん
 たり。そ。を。ま。り。妻。女。た。り。ぬ。身。と。な。り。月。日。を。過。す。と。い。ふ。水
 治。元。年。ハ。是。二。月。十。五。日。の。早。天。よ。む。け。ま。り。ち。の。甲。子。子。出。た。り
 志。ひ。る。言。ふ。ハ。思。ひ。を。け。書。く。と。い。ふ。也。女。と。兒。世。業。を。そ。り。り



往古洛東岡崎
 法勝寺之圖

前谷通生
 評卷之
 三
 三



直
 八
 之
 靈
 之
 團
 夢
 八
 幡
 眞

熊谷蓮生
 州語卷之

七

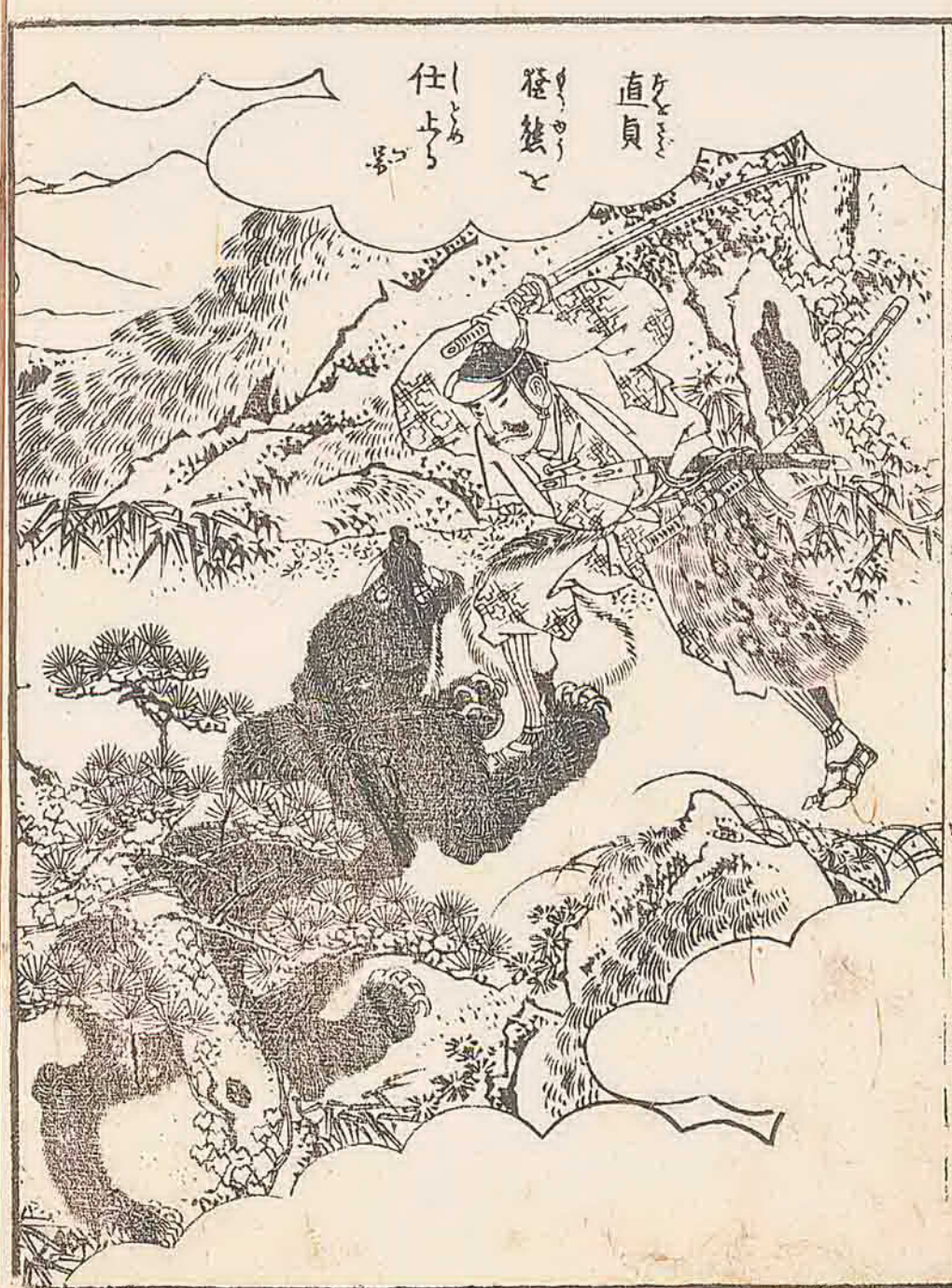
かねど。其狀いさしくやふりたる。それ直貞ハ其後忠孝盡きたる
 せんまじし。張率たる。昔の老翁と忠望をこめて直貞ハ然
 然く懇々おしよ事ハ准へて所へつらふより。直貞をびふ事
 正直後の二人の男子とも子に。武藏守崎玉那ハ配流せ
 らゆ。世阿弥丸二歳ふちりたる。乳母はくわくしつて
 久下権頭が方へて養ふ事ありける。

直貞極怒と討取事

并に直貞家辨と怒答と改む事

されむる刀直貞ハ。よき人への扱ふ意ナ。事ありど
 ちて。其刃ハ勿論二人の子息まで武州崎玉那へ配流せし
 毛。妻子秀房是と悲しむ。歎く。目下より討取ハ直貞ハ

かねバ事か。うらむと怒るの。あてを。歎く。直貞ハ
 目小眼をさう。おふりてハ山野ハ将言。是と怒る
 して月りを送らう。うらむ。世義怒りて田畠とあじ。その
 多くけ人と暮し。これハ農民を怖く。大に怒り。直貞ハ
 此れを。あて。あて。えより。勇力たす。此者か。ハ彼
 極怒と報して。人々。害を。除人と。争ふ。山を。たが
 ぬ。あて。あて。直貞ハ。勇気。ハ。わ。直貞ハ。怒る
 け。又。あて。あて。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る
 と。あて。あて。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る
 の人。怒ると。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る
 村。あて。あて。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る。直貞ハ。怒る



龍谷道生
一
訓
卷之

其

と力よ何せて養ひも盡きて思ひつゝ一程は希代の體態
 かりとゞり。急なととてふ折也。終は是とおてたご
 まうれだ。直貞盡生とてふゆへして大は怪び。却と直
 直貞荒然とてめとりと味りるやふ趣ちりけり。乃
 者退くよまう来り。以件とて直貞が剛勇の徳と責
 負し。且ハ諸人の害を除きたりと怪づり。限りなく。道
 色の方成りまで。直貞が武勇を名を感て地は領むれどく
 路ひるはより此候とて直貞を以て。又直貞が家跡れり
 力をわくこめて直貞とて名のりり。

直貞父子傳ふに流入討ぐ事

并ニ久下権次弓矢丸と直貞言する事

斯て此の故も強ましく甚感てしを以て。剛勇は直貞と
 以候は控おは後より我が家の害とまう人として。直貞とて
 ちくも。一旦我と害せん謀儀。一曲若其後お掛金ハ石と接て
 御よ入る。急と傳を以て。直貞とて討ぐ人とて。直貞とて
 左を防射とて。直貞とて。右の直貞とて。直貞とて。直貞とて。
 直井以命曰二郎の兄弟は若とて。直貞とて。直貞とて。直貞とて。
 直井小鳥將ふ出けり。直貞とて。直貞とて。直貞とて。直貞とて。
 直井より三人お連村路より十丁けり。直貞とて。直貞とて。直貞とて。
 直井にて直貞居る。直貞とて。直貞とて。直貞とて。直貞とて。
 直井に乃々れだ。直貞とて。直貞とて。直貞とて。直貞とて。

高七

熊谷蓮生一代記卷之一

雅き者の一命とをいそぐ。さすぐれ忠盡もあ人の詞。忍
がごとく雅者の命を助け。父が配所。慈者へ。過すをこ
申す。いそぎを。別。推頭と。名。雅者乃一命。我々も
うけ。ゆ。せ。し。を。傳。母。諸。子。同。連。く。り。て。悔。ま。く
お。育。つ。て。成。長。れ。後。ハ。お。家。と。な。す。親。の。ま。抱。と。吊
ら。せ。よ。と。い。は。れ。は。わ。り。け。る。ふ。權。頭。者。が。じ。と。い。は。れ。し。て
お。も。へ。傳。ひ。ゆ。れ。て。ま。月。々。さ。ら。は。後。よ。は。深。業。強。に。慈。者。に
即。丹。治。直。實。と。い。は。れ。此。雅。子。の。し。ま。ま。ち。り

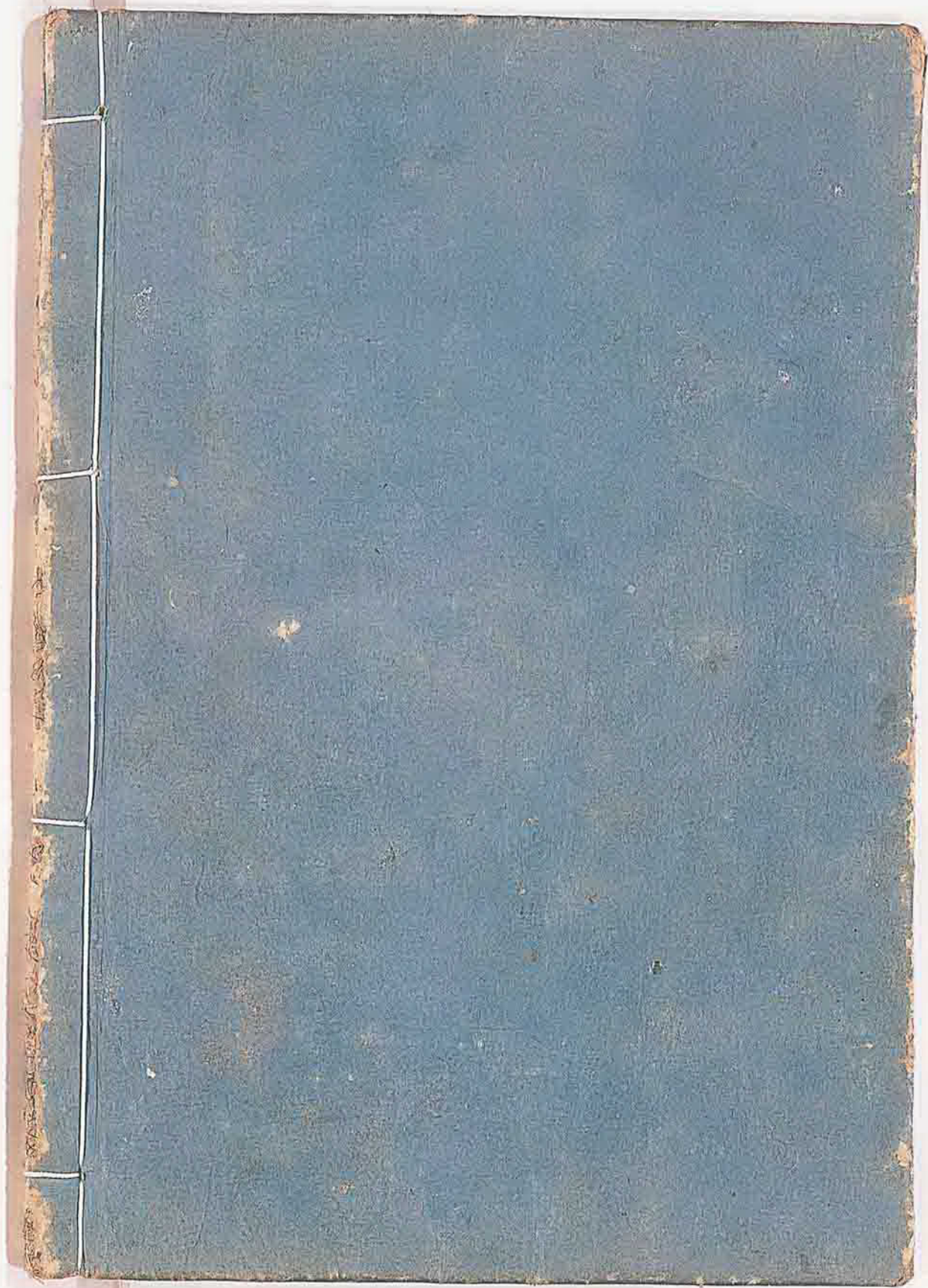
熊谷蓮生一代記卷之一終

慶應二年

寅十月永之

熊谷河岩川村

熊谷河岩



熊谷蓮生一代記

二

L289
7



徳吉達生一代記卷之二

目録

弓矢丸徳吉直實と改名初陣高名之事

并老母直實小者割之事

徳吉宇治川合戦高名之事

并小次郎直家橋桁と流之事

源九郎義経一若へ裏向之事

并警尾之郎義久が事

徳吉父子一若継之事

并直實音楽と同感と置之事



熊谷蓮生一代記卷之二

弓矢丸熊谷直實を改名初陣高き事
并に老母直實に教訓し事

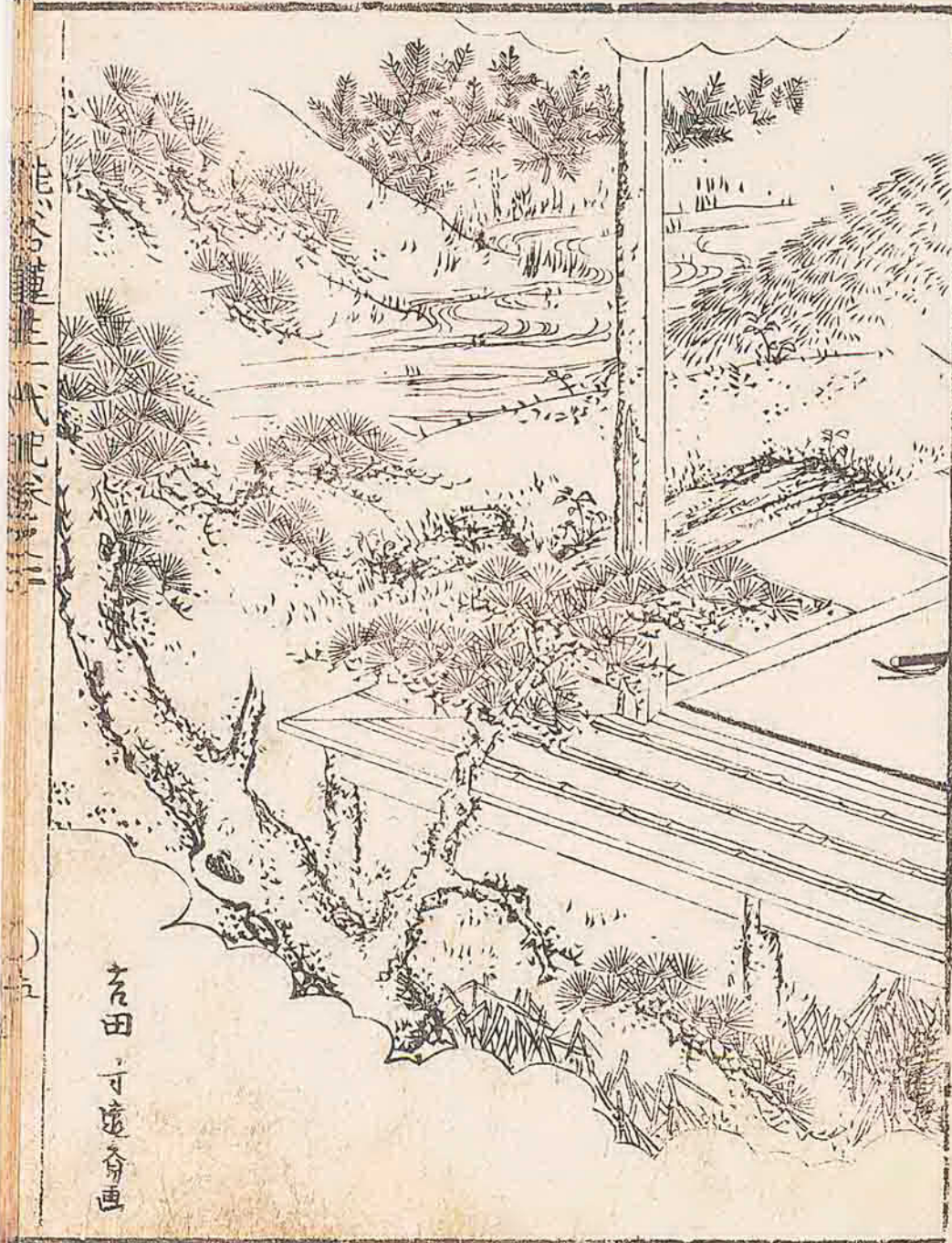
信隆再一併豊方とバ大魚を食ふ魚ハ其餅と食て終ふ
幸進人ハ其縁を食て是ハ服を食とくもこれをも弓矢丸ハ教
盛種家あ人の徳よりして一命を助り母法とも武家の國
にくらり叔父久下權頭が幸りて成長たり徳の徳神を
改め相換國の臣人依竹以所義繁が女と婚して又ハ所産
寄ふ獲る器を骨格武勇たきく。孫ハ仁仙傳く。今
表じま。此厚け。巴村の民百姓再々直貞が孫也。一と
く恨み致ひる。一と都ホのや。平治の亂。源氏ハ大将を

頭受初ふとぐい嫡子悪源を平に属して内裏の郁芳門を
守り直実十六孫の精兵陸一の勇将方れを電光疾雷れごとく
ちひ不念激して働さけしへ平家の大将小松内府重盛はも老
多あてふ死一生を免れまふ結ぶる義朝天運拈くして源氏悪
討負平家一統は徳威日に熾しく方とを直実も毒の慈母に
唄く聖び居くる内ふ父が石領を推頭小押領せり以後直實被
友のおとく方りて重光が代友もして京都の大番に勤仕とそ
時武藏守の傍者等も重光せしが重実不對してそれのあり
是に由て其傍うと晴ると新中納言知盛小属して都せり
まり一族親類の交りてせりして年月と送る結ぶ治養や乃
秋古へゆり道りて平家の侍士大庭三郎景親重光の英

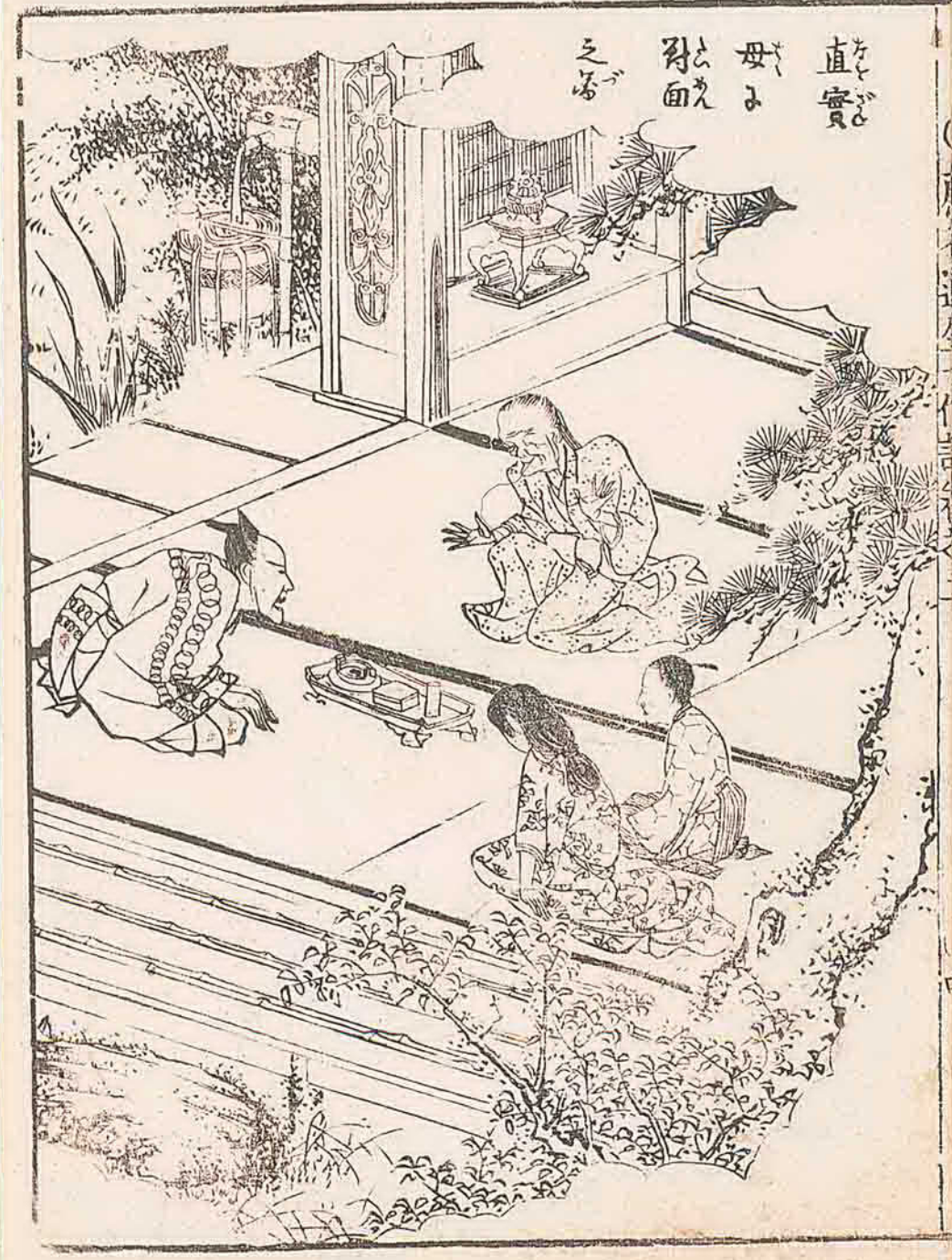
方りて重光平家北祇官三千餘騎の陣一と方りて重光
心方りて従ひ石橋山に合戦お振撃れ重光と取つ合戦終て
重光南吉郷ゆり途中少て我身れ上を幸とるに先祖の桓成
天皇は後殿少て代平氏の姓とつども父直貞は入左侍盛は親
忠盛のたふ小教言せり則へ兄直正直俊中を喜せり我身幼
少なるも先ふとる教盛は盛あはの情ふよつて助言せり
たより兼く母のわがう情あふ父がなれも没収せりあふ
押領せりて一お慈命れ地も方り初流れれがもして一生とる
えんと口折きび身方り又終く心平家はな姓方れども我
ふゆりて死忍故方り公羊傳ふ子もて父の仇と執せり子に
らびと記し亦父の仇も共ふと頂すつり此ふ今平家へ

属して仇の下に在する。亡父兄を恨み、その名をなくおもつらん
 是教ふすひれ。天理も遠くべし。先年、藤原を平らふ終ひ、八
 戰場の初陣にて、武勇と人よきせん。何の思ふもたず。謀叛
 に組せしめ、武運をひくる。理をもむくふは、友の合戦、おき清
 佐殿乃生死いまも志まじ。此大将命を合くして、あまびを
 わげむる。幕も属し、奉こと達せん。後、白河院の流宮を交
 えた。官軍少で、謀叛にあはれ。預り、又幸、武勇もい、父の
 母を救ふ。忠孝あはれ。子孫も、平頼朝の存亡、いんせ
 心を、金石のどくあり、いさめて。怨む、不帰宅、いんせ、老母
 妻子、等々、これ、對面、おはせ、その、後、方、り、ま、より、石、橋、山、の
 合戦、の、勢、を、た、と、あ、伊、の、傍、り、く、れ、た、老、母、洞、と、ち、か、り、て、ま、り、

都へ参る時、何れ、角、を、終、り、母、が、お、お、を、や、つ、と、げ、を、そ、今、う、ま、
 忘、服、の、事、を、い、武、士、の、ま、人、と、り、終、ん、老、れ、む、その、ま、と、探、心
 べ、と、方、り。又、三、身、志、て、や、お、を、得、る、と、い、ふ、も、道、志、ま、い、ら、る、も、あ、
 た、い、身、を、り、り、て、一、生、を、ま、す、と、つ、ご、も、ん、と、い、れ、道、あり、此
 旨、を、ま、す、と、い、い、合、あ、ら、る、と、傳、へ、母、が、得、り、方、り、と、老、後、お、り、ふ
 又、け、し、ば、直、突、け、ら、れ、基、廿、た、び、師、西、せ、し、母、上、の、い、め、を、
 や、と、く、せん、ご、あ、方、り。それ、は、却、て、い、つ、と、痛、か、ら、あ、孝、の、死、其、ま、
 しい、や、ら、方、る、教、方、り、も、い、つ、い、を、む、な、り、ぐ、ん、は、今、今、あ、あ、せ
 夢、ら、ま、し、と、奉、休、し、て、や、き、れ、ば、お、母、明、を、押、し、て、い、り、今、平
 家、八、運、の、似、し、時、源、氏、ハ、仇、と、報、た、ま、き、時、を、た、又、その、方、り、も
 仇、あ、ら、方、り、それ、は、仇、を、忘、れ、て、奉、お、へ、似、し、運、あり、



吉田 可遠奇画



直實 母子 之 面

前江守運生 山崎種徳

と考の用く。運を欲とする。其家けりげの又まをも。此
 暇小治郎と人。大初、細懂をかえり。原、大事と心ひたの
 者、小治郎、又たけり。と。侍く。あ、平家とて。して。保氏
 が。加り。親、又、此、仇、をも。執、その、方も。武運、を。し。つ。れ。と
 言、ま、と。て。し。け。ま。直、実、が。心、を。し。別、之、村、と。合、せ。母、は、嘗
 訓、感、入、り。玉、教、授、せ。あ、り。伏、候、と。て。居、たり。一、時、く
 小、治、を。ま、り。直、実、が。あ、ぬ。も。石、橋、の。う。ち。へ。ゆ、る。道、を。か
 ら。佐、の。方、を。と。事、して。今、も。朝、朝、暮、暮、紅、い、と。揚、た。ま。り。つ。か
 一、書、お、直、と。ん。看、刺、せん。と。心、と。合、意、ま。か。り。め。帰、免、仕、を。ま
 只、今、此、位、と。あ、り。と。母、の。侍、を。直、実、が。知、申、へ。天、の。通、り。あ、り
 か。又、八、丈、の。具、既、も。か。ん。中、へ。様、ら。せ。ま。り。肝、は。海、で。う。り。り。

おもひ。と。あ、げ。と。り。と。心、意、の。程、を。述、べ。た。母、は。心、を。あ、り。直
 三、一、直、実、は。九、竹、と。婦、洞、を。道、程、方、り。侍、ふ。女、房、も
 とも。に。う、り。と。傳、う。す。甚、後、頼、朝、毒、の。義、ま、と。あ、り。と。ま
 實、子、の。速、狂、付、様、下、に。屬、し。常、陸、必、佐、竹、對、秀、退、村、の。如、し。然
 若、平、山、と。忠、輝、と。あ、り。を。い、て。功名、大、よ。世、よ。者、ふ。そ。亦、我、場、ま
 於、て。身、命、と。願、と。若、若、亦、よ。り。も。執、く。し。大、敵、と。七、倍、く。し。た。
 後、倉、殿、此、所、然、ふ。あ、づ。り。保、元、の。親、ひ。より。二十、一、返、の。勢、状
 と。た。ま。り。の。代、に。い、ま、は。傳、承、し。る。と。う。や

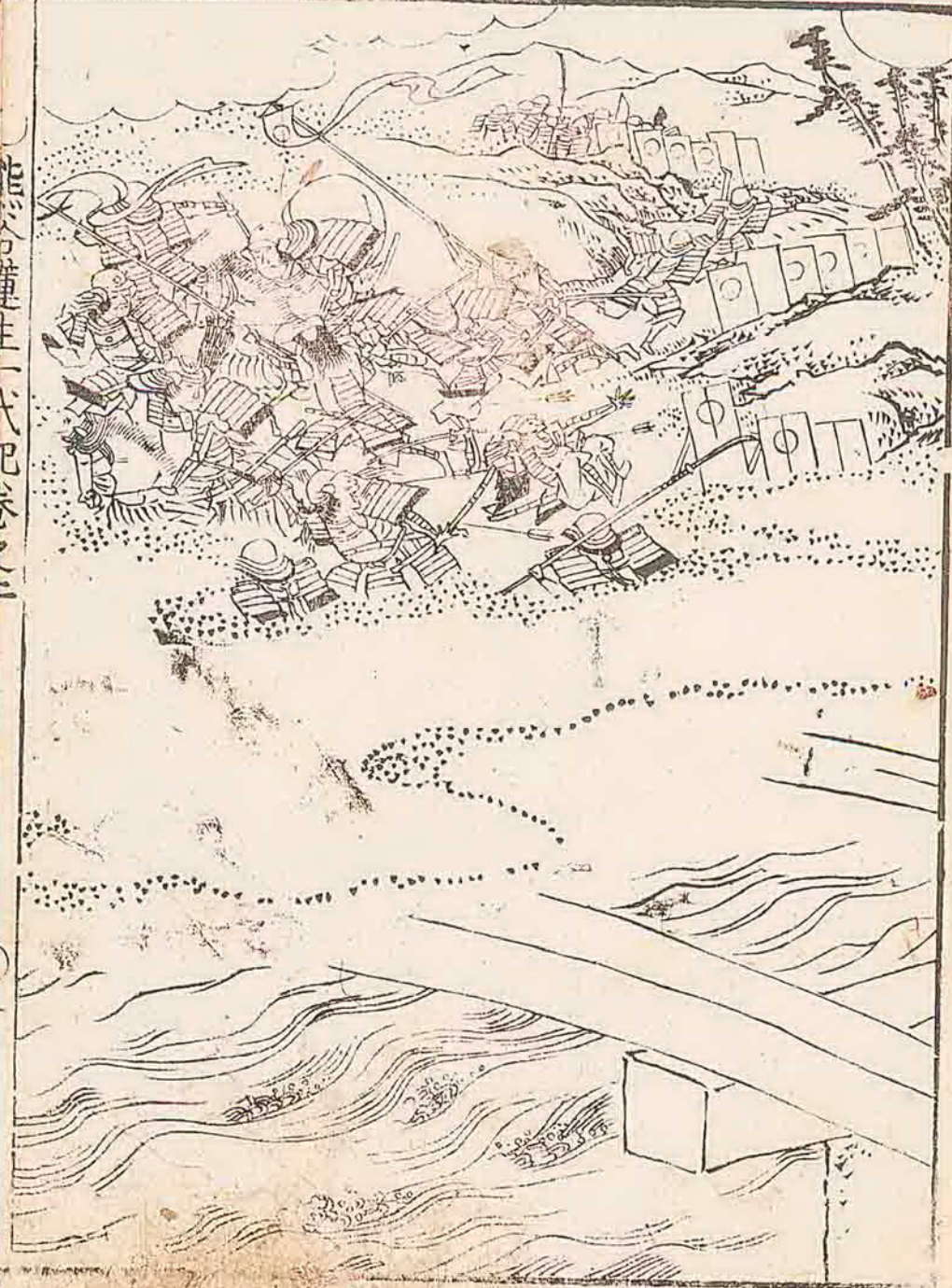
徳谷守治川合戦首名之表

並、小治郎、直家、格、柄、と、流、る、事、

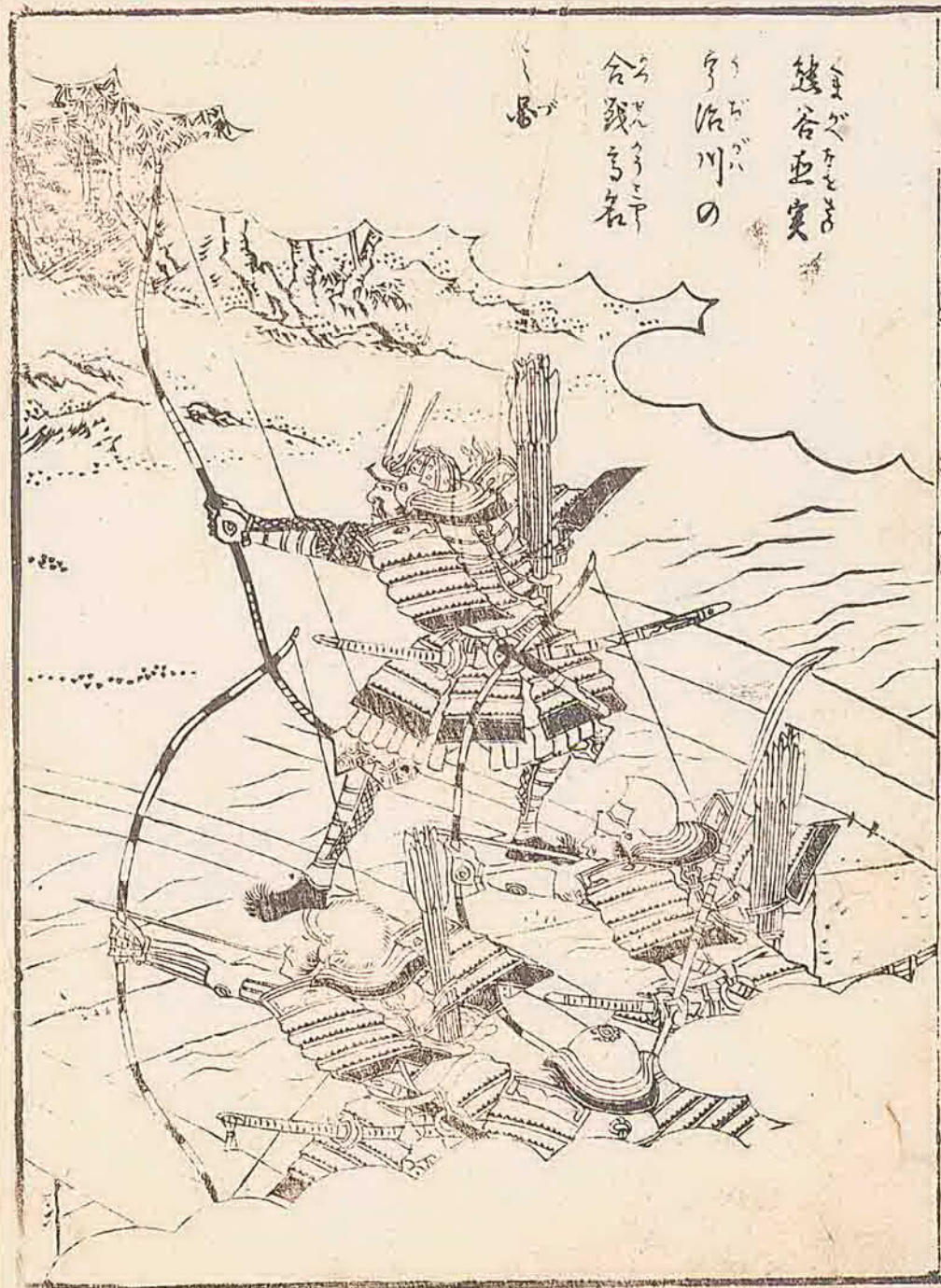
云、説、元、暦、元、年、正、月、廿、日、朝、日、將、軍、本、方、義、仲、朝、廷、と、性

かゝひよりの越より。不意に故城乃志申へ落すを。一こし
同五日二万余騎の勢と二子ありて。七千余騎と田代の冠
者信隆に土肥の所。夏平とつけて。三州ふ此西にありて
此平家の大将。新之位中將。知重。小和少將。有盛の陣は
お討とぞありける。知盛は陣より沖へして。軍八七りふ延
びせり。志むしく休ませしやこそ。澄おを脱すとも。新
を討とりける。此時源氏の猛勢。一とび狼烟とあげて。藤波
とつり。二と三と攻くまを。平家此陣より入り。はる不
意をうこそ。大よ仰入。一飲の糧をたぐひ。合つたき
る馬は。敵とて。周章する。若敷とあつて。源氏の勢は。此
とせん。是より。敵と退討し。おとす。敵とく。休て。うらり

軍勢都合百八十人。平家ハ遠く一の谷へ逃る。分母
わごま。かりし事。もたなり。おも九郎。神曹子。義経。こも日
乃。紫米ハ青地綿の直衣。ふる。東系威の。糧と着し。馬ハ坂東
に。名も。まゝ。青海波。といふ。強足。たり。今。な。見。彩。朝。り。う。た
ま。る。を。厚。総。う。けて。騎。り。ける。相。志。を。ふ。事。あり。ま。は。は。は。義
経。大。内。右。衛。門。尉。惟。義。は。右。三。郎。義。範。齋。院。波。夜。良。親。能
田。代。冠。者。信。隆。大。河。戸。左。郎。廣。行。土。肥。次。郎。實。平。三。浦。十。郎
義。連。糟。谷。右。衛。門。有。事。平。山。武。者。所。季。重。平。佐。子。左。郎。為。基
熊。谷。次。郎。直。實。同。小。次。郎。直。家。小。河。小。次。郎。祐。義。山。田。右。郎
重。澄。原。三。郎。清。益。猪。俣。平。六。已。上。二。万。餘。騎。搦。ま。う。る。と。い
ふ。ころ。頃。ハ。夜。更。七。日。傳。令。烈。く。お。も。り。け。し。小。實。刻。り



徳谷五実
多治川の
合戦の名



九龍義經。常陸に武士七十餘騎と擲んで一の居れ後の心
ひまらう越にかりり。決揚ヶ峯。降伏せらる。雅二の志
早。青月も入果て暗さくく。義經武藏坊とまひりて。
例の大後松のこのまを長りのれとて。若の民あさりり
ト。火とさるらる。何れを焦して。死も白目れ。じ
れ。雪うく。と。路をま。老をま。の。事。内。せ。諸將聲
とひそめて。ゆく。西。彌。師。の。あ。と。お。て。人。家。を。あ。り。
弁。ま。け。ま。あ。り。て。い。ま。ま。の。次。七。旬。余。と。い。へ。老。人。ま
婦。あり。武。藏。坊。は。二。人。ま。り。て。け。い。何。と。い。ふ。又。ま。婦。の。若
ま。子。ハ。ち。れ。う。と。あ。ひ。ら。ふ。老。翁。と。い。て。け。い。の。松。揚。の。境
なる。丹。生。山。田。と。い。ふ。事。あり。我。け。地。も。あ。て。年。を。い。ま

山。籠。ち。り。ま。り。の。子。を。り。り。て。い。ま。ま。の。次。七。旬。余。と。い。へ。老。人。ま
中。を。り。と。い。ふ。事。あり。我。け。地。も。あ。て。年。を。い。ま
ち。る。究。ま。れ。若。者。か。え。り。来。り。け。い。を。即。年。を。い。ま。と。い。い。
た。い。義。經。の。御。前。ま。り。大。將。ま。ご。存。候。ま。り。と。い。て。これ。後
利。の。前。表。ち。り。と。い。て。左。方。一。振。僅。一。頃。も。一。之。と。た。ま。り。
其。と。講。の。一。言。と。た。ま。り。て。朝。野。尾。三。郎。義。久。と。い。て。右。方。の
直。子。義。経。に。横。縁。候。う。と。い。て。義。經。奥。別。の。衣。川。ま。り。と。い。て。
遠。を。ん。伊。賀。村。先。志。け。ら。右。馬。ち。り。義。經。御。前。直。子。義。久。の。衣
更。六。日。れ。教。守。げ。り。一。子。小。次。郎。直。子。義。久。と。い。て。右。方。の
の。明日。の。軍。一。方。の。先。陣。と。い。て。源。平。兼。朝。自。身。を。意
さ。せ。源。義。朝。の。所。感。も。あ。げ。り。子。孫。の。ため。お。名。を。あ。げ

ぐやとねのちう。ちうれで今有對經の陣とけまをて。
 播磨の大崎ふかり。平家乃一口ことりたる。一の谷の城乃
 一番をよとせまやねのちう。平山が東の道乃安内のこととかせし
 花よぞんむらちう。平山が東の道乃安内のこととかせし
 こもも争くぞんすなり。又養子とて大將の人よ先陣
 かせとすふらんよあしむ。ちうれでいふもふつとすももね
 ちう朝いあふつむ。疾くつそがせまてかせとすももね
 て今らんも寅の刻なり。時をいふと。後將も人よ後三番
 してちうゆふれくれし。後將をいふと。一人よ一の谷
 本へてちうゆふれく。後將の目れおあまし。後乃む衣
 家の後將の一双後將を著し。東家城の後將の目れ

たる兎大仲兼計征矢よ重層のちをたぐえ紅の母家
 をかけ。橙をみめもとらふ名も小徳とせまていけり
 そとく。此馬を橙を帯毛しり。徳吾直家乃馬録。橙
 ちういふものあり。李緒が流をもつてます。伯耆が傳も文
 ぶれど。自然とま妙と傳へり。あつれ徳吾よ一の谷
 二の谷を橙をよあて。當時傳平れちういふ傳をもまじ
 山をも橙つぎさ名馬とまめい。いと命も權を著し
 奥州一の谷らあまふて。口才まのるを買取たり
 此馬か一軍々もまて。運しと徳吾しして穆王の
 八幡園將が赤兎馬頂羽が鳥雅もあさく。芳なり
 おりもまら。又小次郎がちまの練費も伝傳抄るま衣

に履繩目乃種を着し。毒薬の証文も重版のうらまのち
ておぼく紅乃母衣をわけ馬いさふ故とす。奥品柳家
の牧より出てきもはくぬ後足ちり。二騎相方一人
まゝありさむ。常しくこそ人あま

徳吉又子一の若舞の事

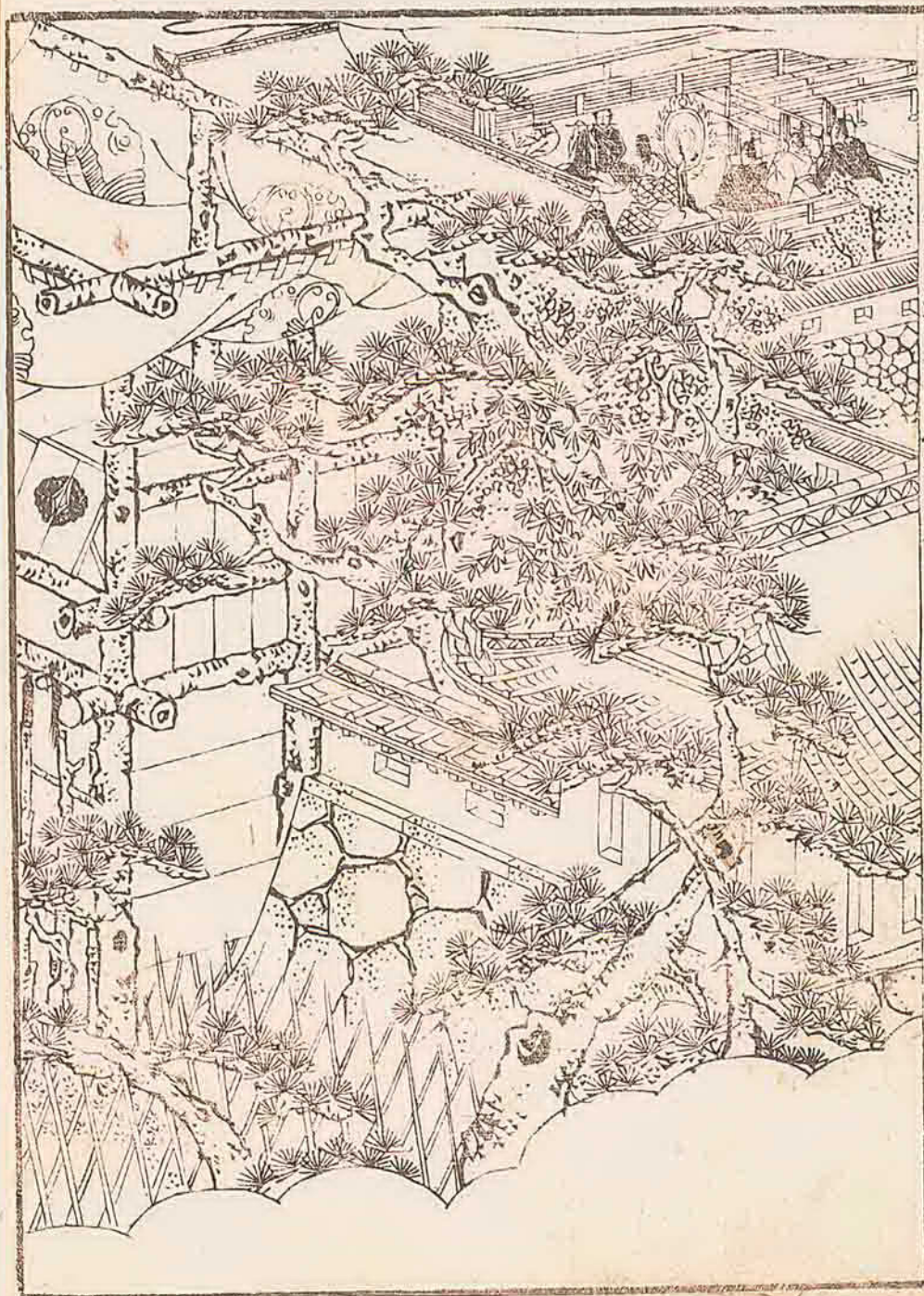
并ニ直實音楽と同感と僕も

まやふ徳吉直實の又子。九郎御曹子劉経の源伍を
うねる。浦乃舞大と目あてやして。源乃源遠成西へ
まをなふびくおらふ。一の若れ大あまを騎付さる。
女はより平山武者所。常事。おまも魁をくして一のあまを
いとねる。ひいひがむさうのま月後の妻衣ふ御威の種

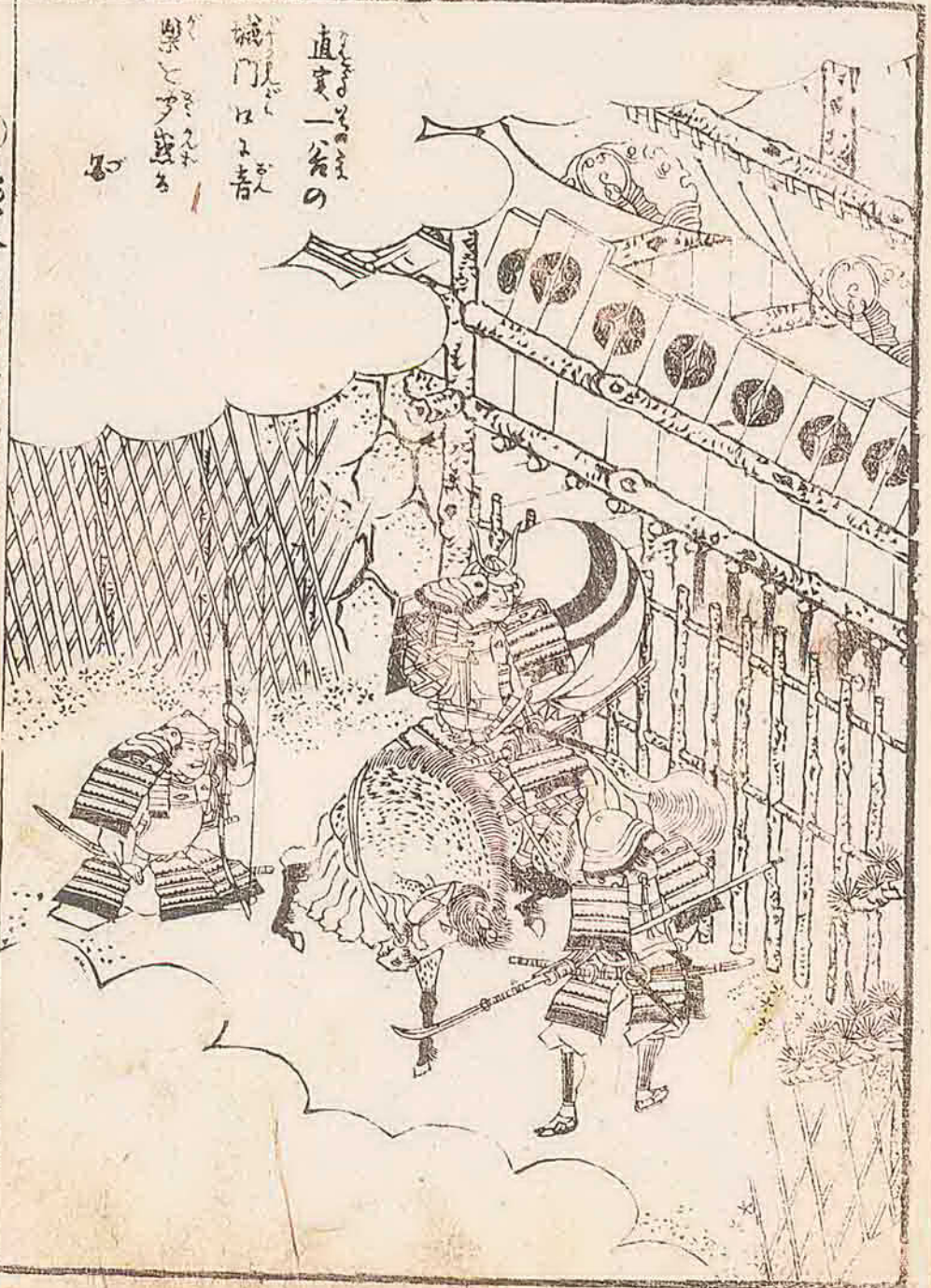
一。二ツ川龍の母衣と有。武藏必好塚をたてるたがた
の目ふサ。源家れありけは。目油毛と名ける。一物
乃名もあぞ騎たり。又常習のめあ。御名一人つれこ
馬をひく。終持ともふる。後三騎三平山乃関をより引
りし。須磨の浦一の若へを近しけ。かかま。ひいひらに
武者一騎。恐ようくけを誰ちうん。またぐね。くは。成田五郎
家正あり。平山がま。いさむ。ゆ。逸おち。おつ。ま。足陣の
かたう。ま。義。ひいひら。ひく。あて。サ。平。家。の。軍。勢。二。名。の
ふ。小。野。系。鉄。よ。ひ。う。て。あ。方。より。源。氏。と。中。の。あ。ま。あ。ま。
さ。ま。支。度。も。う。し。女。所。し。ま。あ。ま。ま。方。を。中。の。ま。
一大事。ま。う。ま。ま。先。陣。ま。ま。ま。誰。の。代。人。の。あ。ま。ま。

後陣の勢をまら合せてすまゝと申けしむ。平山は
 せむいちげく休ん歩らる。成田五郎平山と
 相せりと相ひ甲れ備を志し一打あて一人を
 せむゆく。重をさそいたるれゆらつ馬を
 あづと合せて馳ゆけた。成田あつてと
 減やあひが馬の弱ふしてゆ遠まつまぶら
 斬を言と申たり。武士の情も強うん馬一
 せむ一表存命たむ後れ人をもちて
 平山の取もかけを申さる。遠くゆきのびて
 けら。成田が馬ををくもあつた。懸きに
 せむつる。武士の情あつて懸きのあつと

邊のよま勢をて通りける。成田後より
 きて大よ相ひをなれに急をて近づく。重
 重の成田が追付ぬまふと藤原を踏
 足あつりふとくんを。馬を弱の蹄と踏
 あしだ。その懸をふをかけしとあひつ
 けしむ。ゆく。懸を父子の陣にす。一の
 まふあせて。成田の要をうかひつ。山林
 のを渡す。大岩を踏く。大木を伐せし
 一の首の檜とあげ。西國九丹の軍勢
 大瓦とそりて。其下よの送る。等
 等雜を懸を長刀あつて。懸をす



直実一公の
城門は春
景とす哉



兼とやうし。後乃九里山のりて笛とく。此曲よ白法と言御の情を
 智れ音の頃秋の末めで。征衣垢つき。杖を握やうかして。この事
 子と怒しくといふ。軍役して。糧乏しく。海をこぼり山曲をこぼ
 義小耐るるや。そか我もくと落して。聖母のみまを唐氏のこぼりしる
 横笛の音を傳せし由あり。又上吉の禮樂をひて天下を治め。十二律を
 之れて人を和し。情性をやまひ。人材を育し。律紙を奉る。大地を
 動かししむる事。そか聖賢れ嚴ち。罰あり

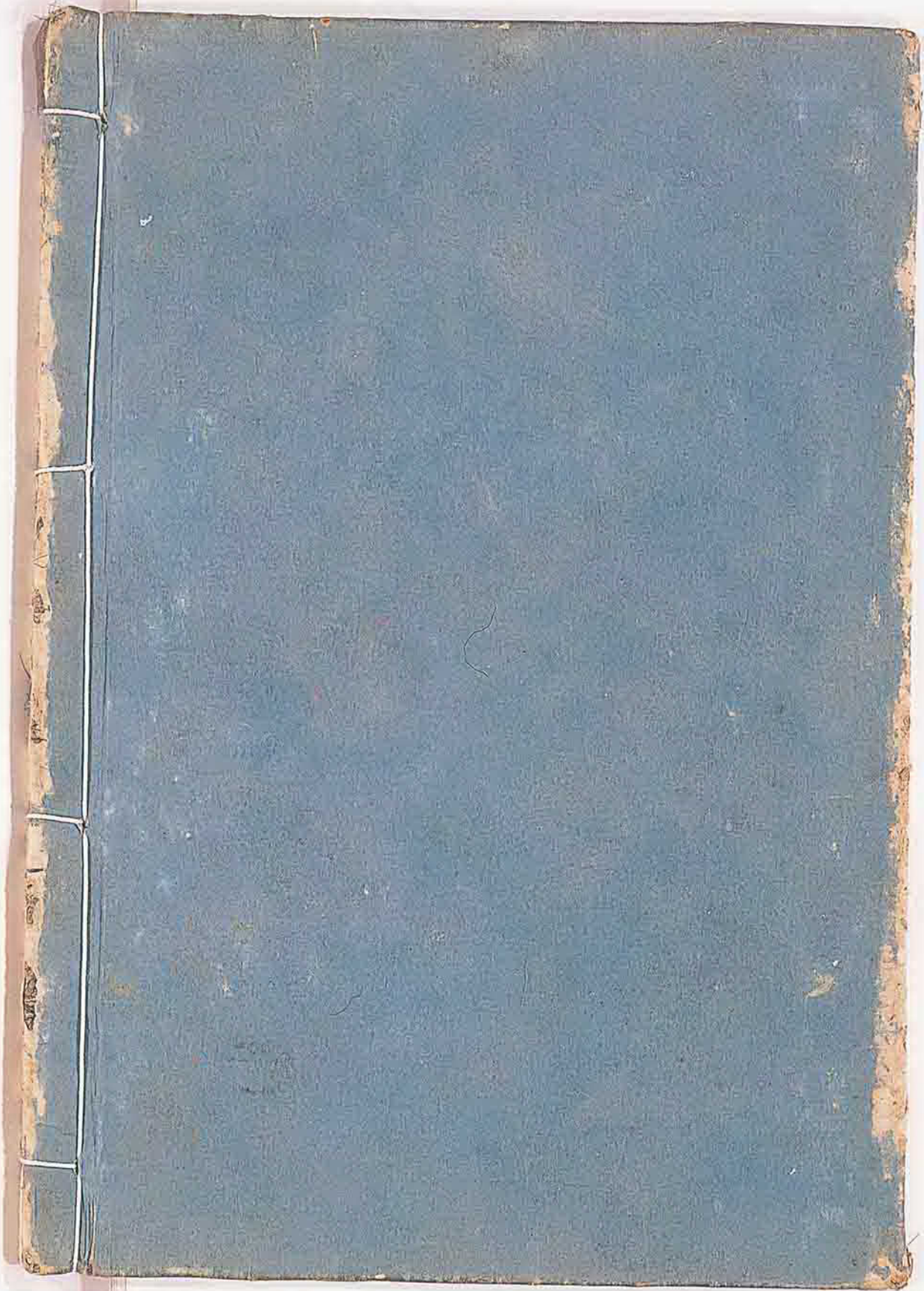
徳名蓮生一代記卷之二終

慶應二年

宣士月米之

権作端岩川村

箱谷行六



熊谷蓮生一代記

三

L289
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

慶應二年

宮十月米之

推作瑞岩川村

稻谷伴六



徳吉蓮生一代記卷之三

目錄

徳吉父子勇と擲事

并平山武者所高名事

九郎義経一谷逆落之事

并平家西海の浪に漂事

徳吉直実父交教蓋と討殺公起之事

并教盛遺言母夜の名跡事

徳吉軍中に勝預之事

并義経直実が忠義と義事

徳吉蓮生一代記卷之三

熊谷蓮生一代記卷之三

熊谷父子勇と揮事

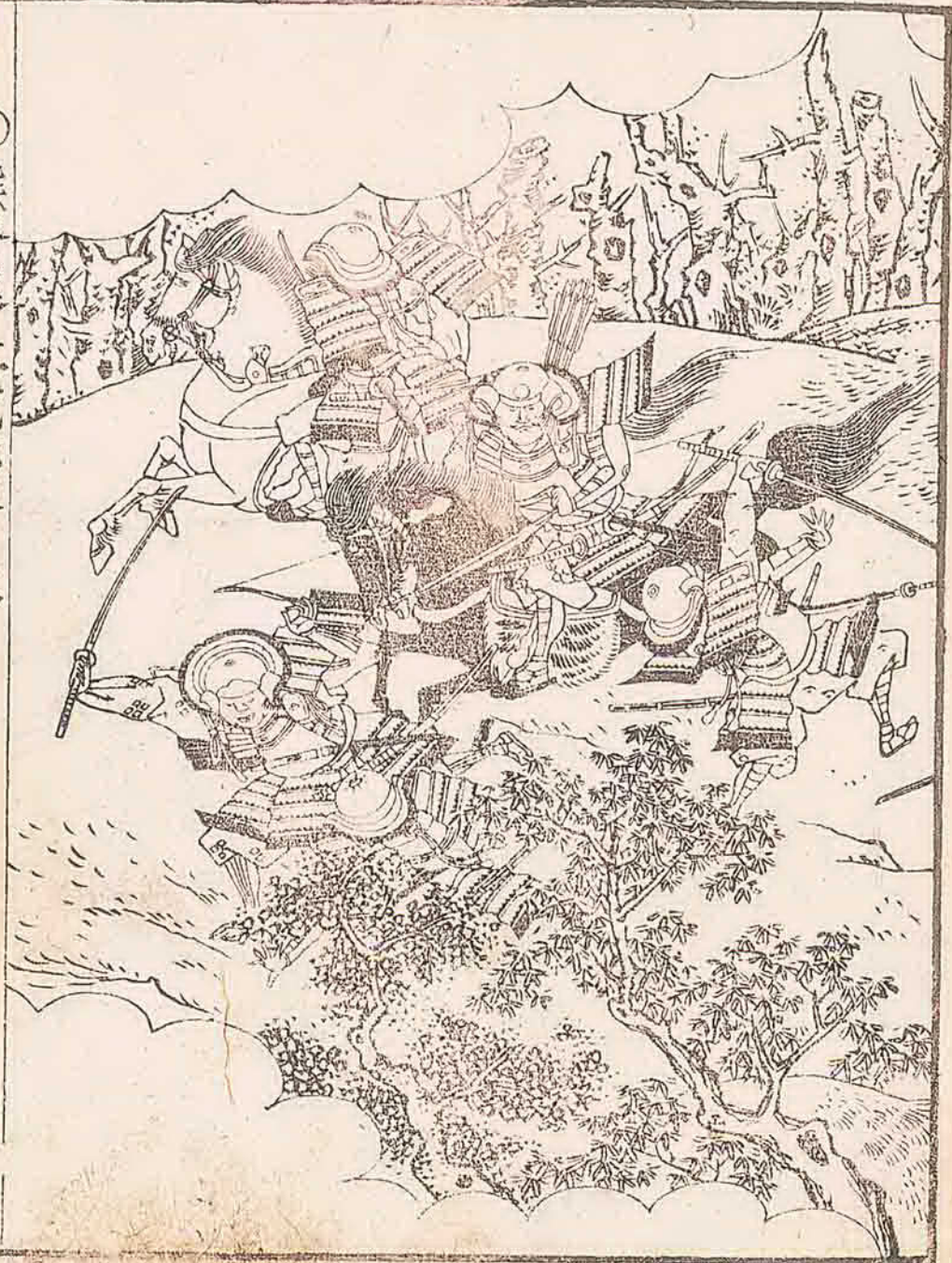
并平山武者所為名事

合會須臾も敬し。氣貴そく常なりと。華嚴經より
 凡人間の化ちるものと業ずるお生ある者ハ必死し帰し
 なる者ハ終ふ事此基也。平家世とて二十餘年唯
 一敵のあれど。流業れ春の花も壽永の秋乃荒ぶ流して
 散るこちる礫拵。西海の浪荒く。一葉の船れ波のこり漂ふ
 柳一の若れ城郭より平家母顧の去士南海九品乃英雄
 望まるとを待惣たり。おももほのくも明かけ。城中より
 平家とつるに唯武者二強よとごりたり。平家の去士朝

熊谷蓮生一代記卷之三

多の源氏此勢の二三子もあをさしとばひし。秋のうらうら
高野に名乗たる徳吉父子と尸も只二騎あり膚をさして
御大将家盛卿の所感より人いさや城門をむけけし
程こそあれ平家の御内ふ一騎高千とよらしたる越中次郎
を所盛嗣上徳五郎を所忠光を所平太郎景徳。後藤内
定綱。惣七を所景清と先りて程を二十三騎。徳吉父子と的
めして大木戸開きて切て出。その内と與て蒐まると。徳吉あり
徳守も色をく。親子先と争てをさる。秋ハ二十三騎あり
さらや膚とちりくきとあやつく又あるをさくはうら徳吉
一人は武者岡作人平山武者所。季重をさありと。大
吉を名乗るけ。城門へ近入をば平家の軍勢又これとさ

人とす。甚勝ふ徳吉城門へ近入を。高橋より是を
つて。敵ハ唯二騎あり。組や若もいと下知をし。徳吉
徳吉にもに先あの名をさる。徳吉は柳子れあり
たるや。唯電走のや中よえくは折し徳吉をさる
近まると。二十三騎れ兵も平山と圍む徳吉後より
退崩し。平山を二を三よ切て出る。又橋より是ととて平
山を組てこそ徳吉と膚をさる。聲くしとつりけはえ。
あ人疾雷れぐく大あよとよせつけど。平家の軍勢
組人と數百騎一夜ふ討てけし。徳吉平山をさる討
せんもをさる。城門のめくも徳吉は徳吉
よ。越中次郎を所盛次よと敬そつて組んと。細村

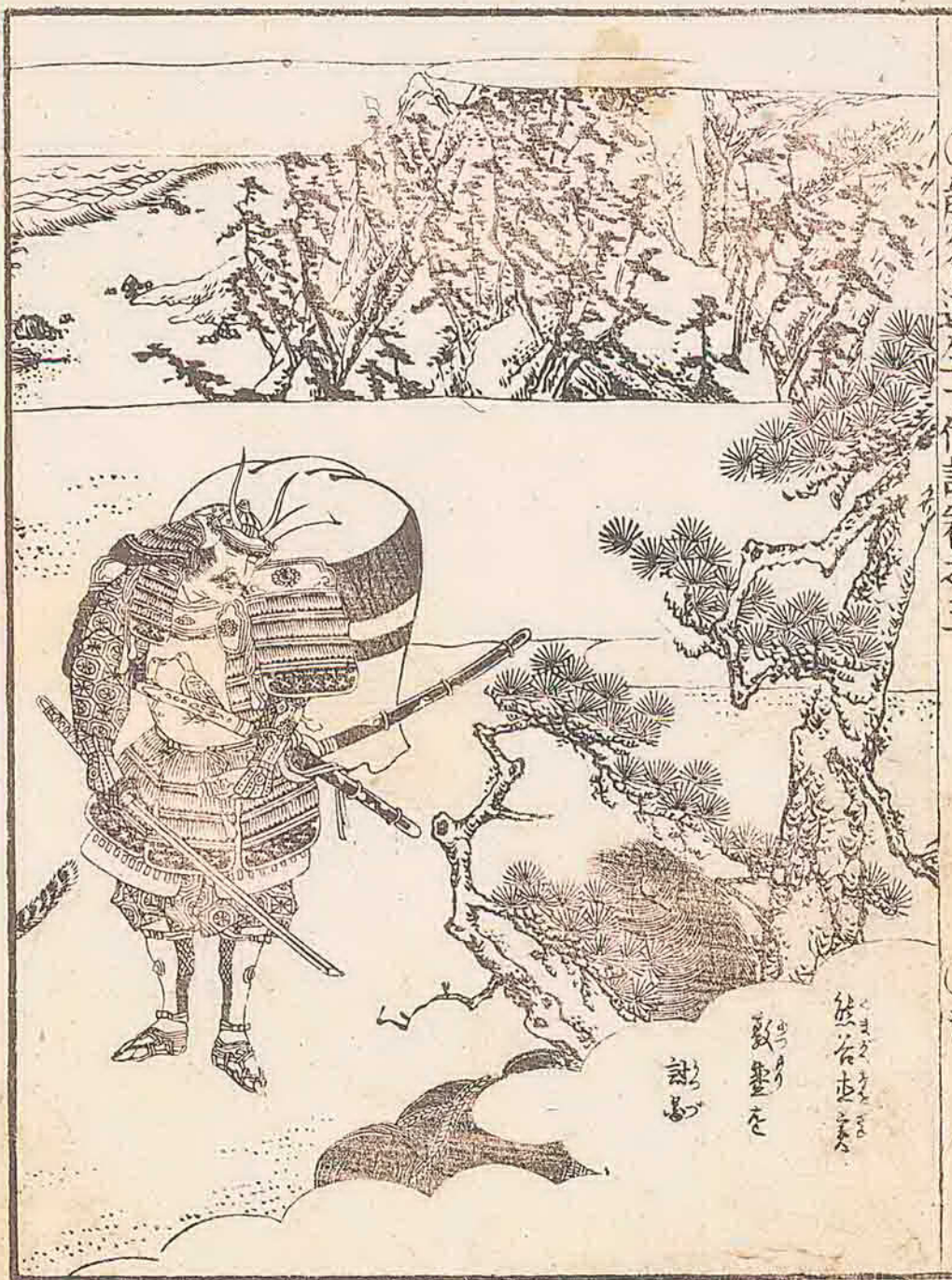
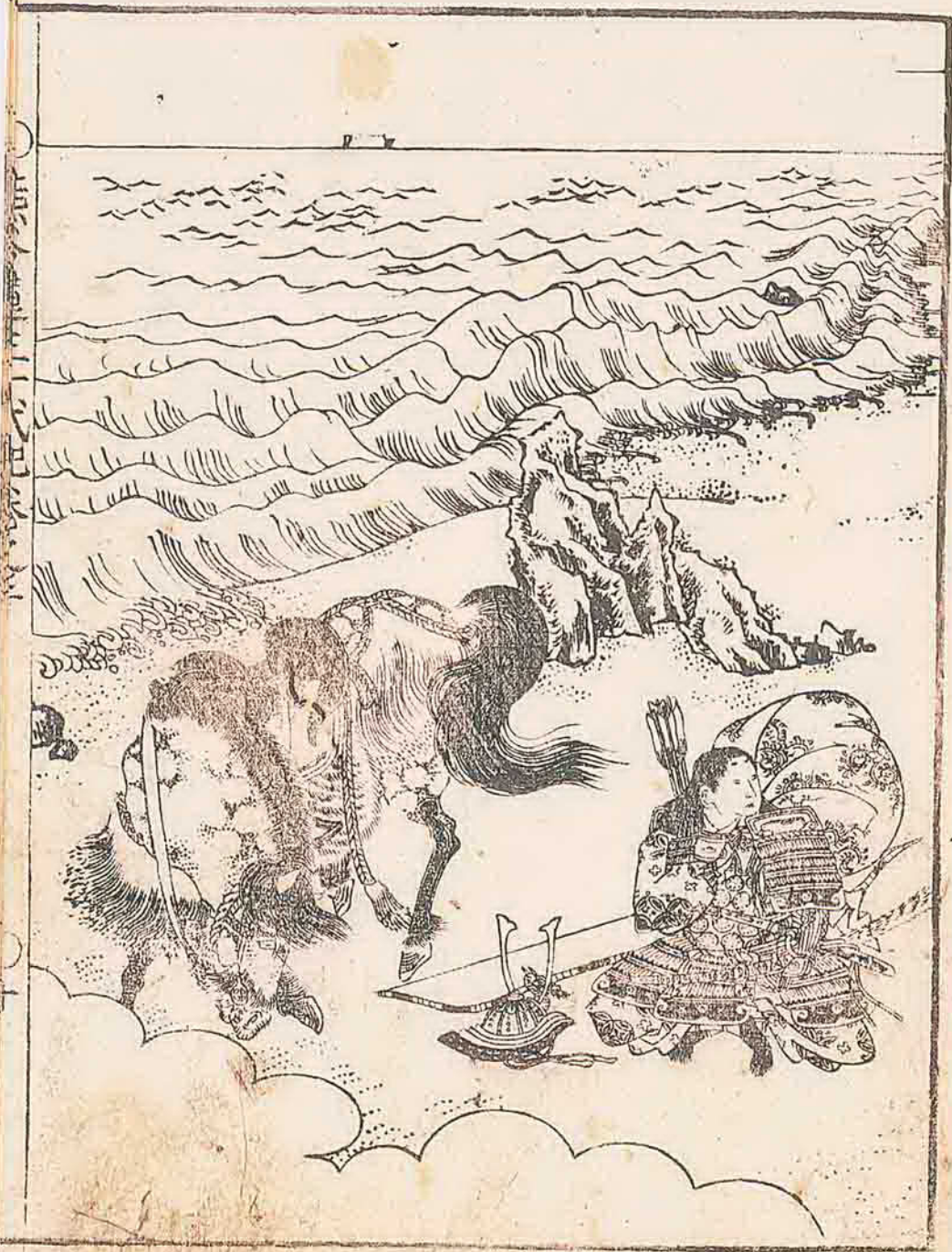


源平合戦

源平合戦

の





徳谷忠実
 数巻を
 記す

徳谷忠実
 一
 許鶴之三

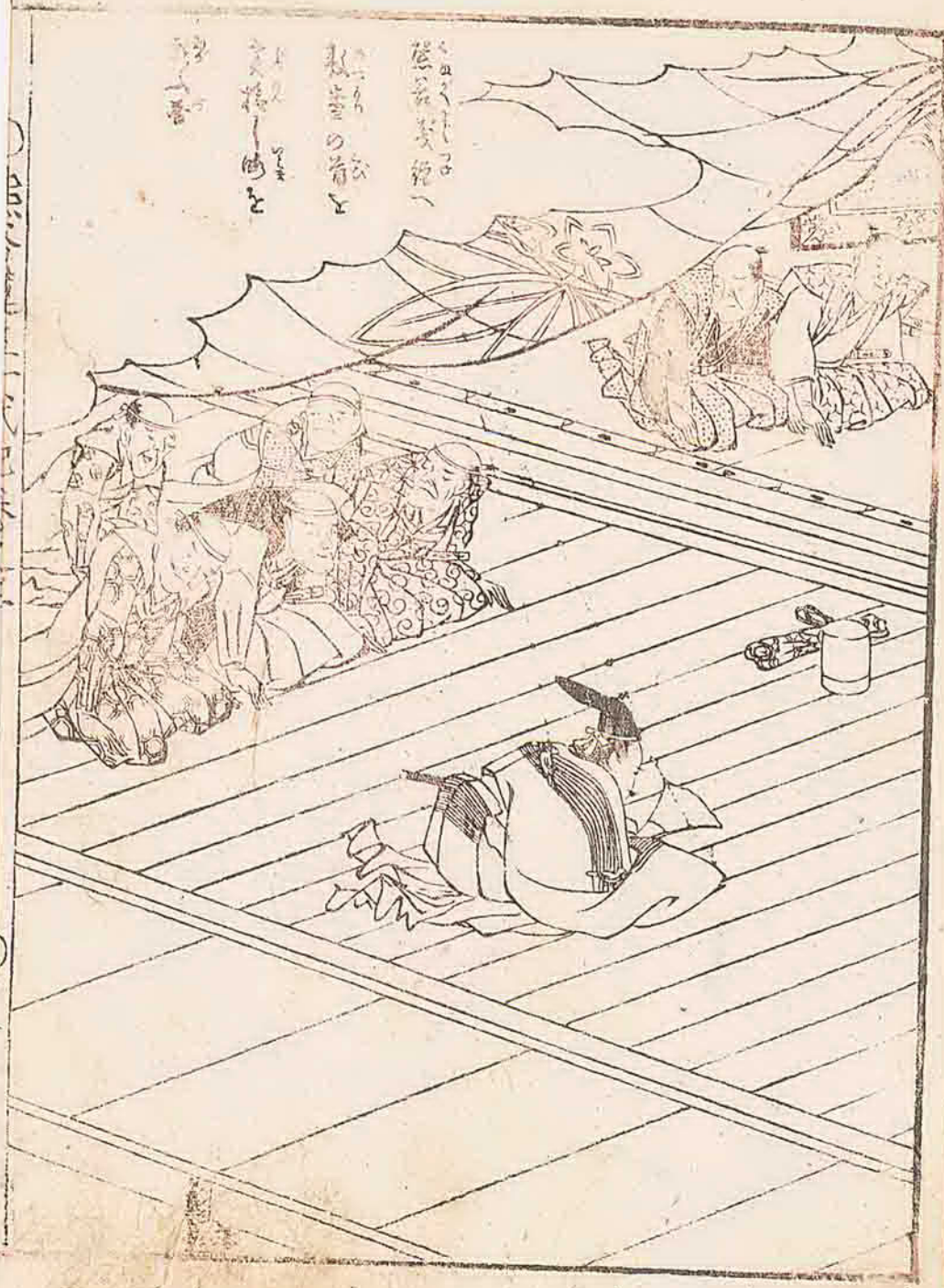
79

本は上臈を家におかすも子揃きばいふまで助けあふ
せ。直重小糸アんとおひ好ひまわり。字子と意度眺むを
爺後は備ふる生かじ軍勢。中より平山成田の三年に教
感つと討とんと甚だしい。若家はお助けあふすも定めて
名もるれ雑多のよに無うあつても至愁をま。徳吉をとも一日
徳吉たる故將を助けい。二心ありといふ人も至愁をさす
實は助くくおすも中後の通出打よ。源氏乃勢元
満や。中も道まあふべき所身かへぬたつたうく山首
とむらへし。直重弓矢ふくけし敵心し。所善徳を同系
せん。うらば系系乃法も中後よりし。徳吉を折てかき
くけた。いやし徳吉一旦敵よ組まう。竹面同よ持ま

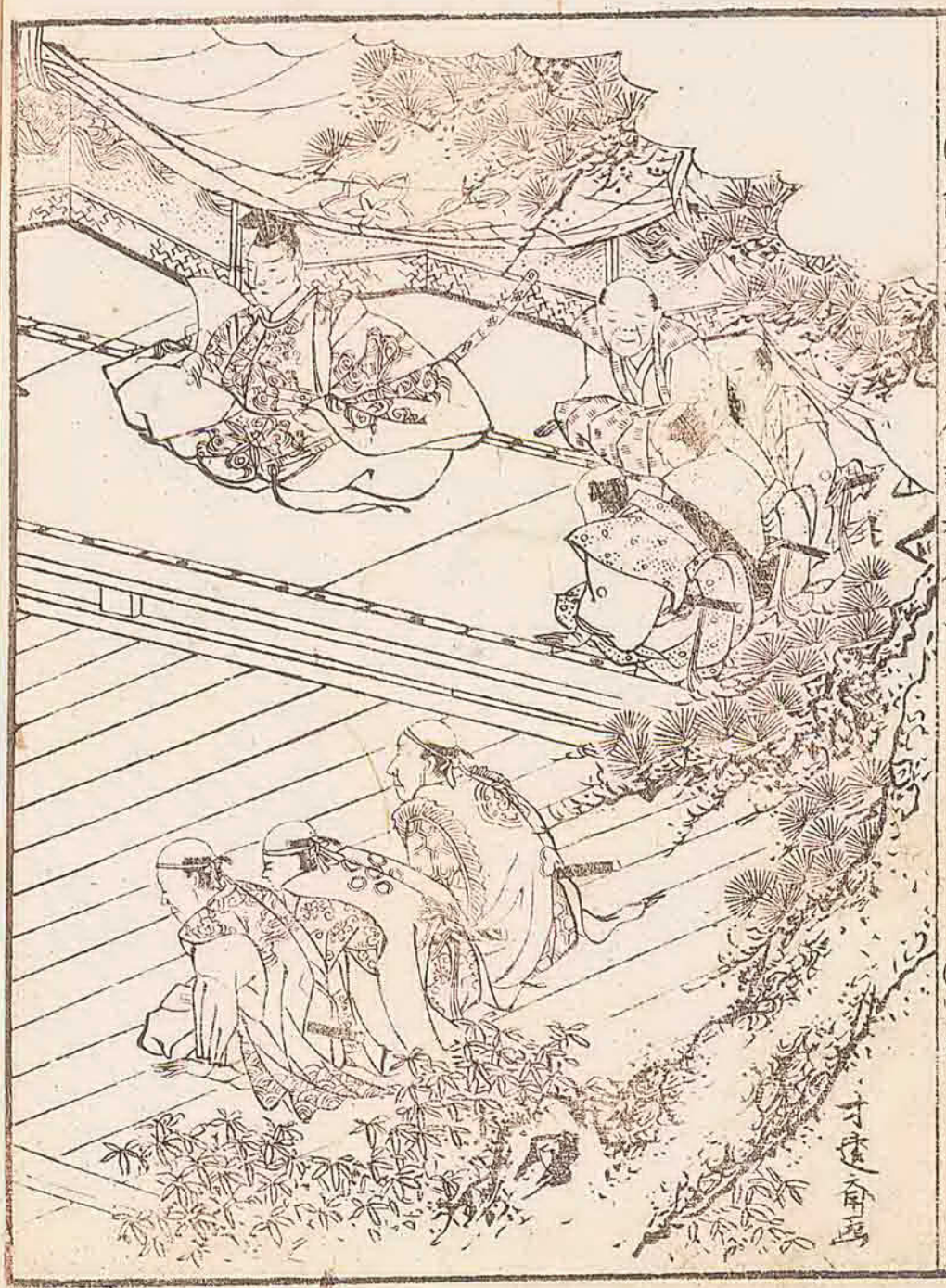
と様まう。うら子く討し。徳吉くふま。直重をさす力
て。堰くる徳とまゆ。には佛号を唱つ。終は山首討あたる
形て首と母衣小包んで。徳の直重とあて入る。徳の直重
よ入る。笛と接ふ。徳吉もあつてもあつてもあつても
しやな。女唄は城内と音楽と調む。つるはけん。とをた
り。うら。徳の公達やまて。又もや袖とぞ接り。所。所首
核笛も直重よつと。我母衣の中。小包は死骸と。徳の直重
暴とせし。とよせ。浪岡。押強し。く。接る。所。所首息小
次郎直家。父よ雜多を殺し。が。所。平家と。追ら。し。徳
遠ら。む。所。方と。見。ま。直。実。同。心。を。く。し。所。首。を。ま。ひ
掛け。ま。こ。も。ハ。參。後。徳。吉。殿。乃。所。子。の。ま。ま。敷。書。つ。徳。と

預あり。敦盛之の所存今日れ忠義より下されまて身は假りて
 有りて尚又是より沖城と降り歸必所免下されるる
 又將直家が妻ハ沖用ふまべき者なりぬども何れも
 所信は下つて下り下りて生れ世々の沖厚忠なりと頼
 ぐれだ。頼朝も下りせぬい敦盛の首ハ軍門に下りしと頼
 經がれのけしむいふ成ぐじ。頼朝も下りしと頼
 と何れも直家信を首と下り其子細ハ某幼女の時
 又直貞并見くまで忠義のあふませしれを色しし
 是付小害せしむべきと北脇敦盛敦盛れ又頼盛のあ
 けよ助命より頼朝大恩ありあつて今も下り小承りし
 て義経と下りし又忠義と仇して頼朝があつし。ちりて

助けて討とん人。不忠二心の疑いを傳んとを退し退き
 せしむ是非をくだれどくは是よ依て敦盛の首を
 又の徑をたぐ送るる也直家があつて入らんか
 謝意の場あり。左まは富教日新にもしも是
 実せしめせんせしむ沖頼めりごと。生害はより
 外ありと。あつて下りし。義経大に裁しあつて
 頼朝のけしむい後日小難ふなり。義経
 後信を首ハ勿論をあつて小汝があつて
 直家忠臣義士の道よあつて。それを扱
 下りし。あつて歸必の形も甚しき
 の会義味も小勝利ありと。軍ハつて。半なり。



徳川幕府
 御用金
 御用金
 御用金



徳川幕府
 御用金
 御用金
 御用金

徳川幕府

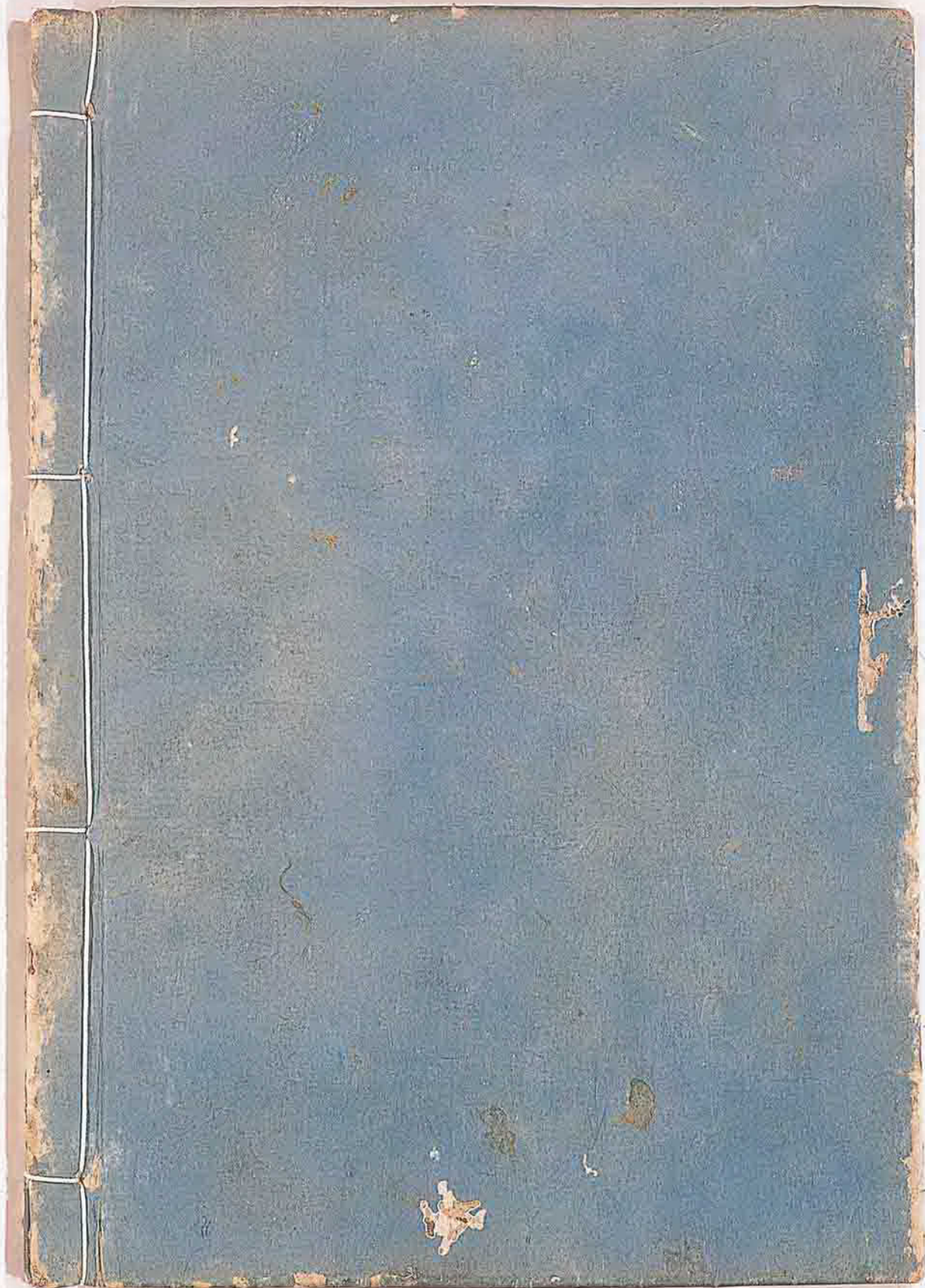
才達南馬

滅よ威人のほは道も張舎敵の所用もなつてと恙なき
 かり妻細ハ耳しく頼朝卿へ申す人ト。其家も痛子係事
 のころ。父子同死してゆふ結士人ト。涉崎とありりけき
 直實も満軍れよ方面同ありて死して内事と云ふなり
 評曰劉子直實と張舎の事也。忠臣義士のありも叶ふとある。自
 然と通れもかきよる事なり。其志一滅れども教養を付るを思
 ふも義も死けども死を考ふ却て道よめりて。初め命令とほと
 かんし心をそせしハ。執事と云ふ也。助けても教養も人よかり
 直實もいつらと持事代も執事と云ふ人。又あつたり一人助けても
 平家の一門の事を死する日。たゞ一人死して助けらるる。一人の
 恨びも執事ハ後りあり。そゝ助け教養れ等事して古ハハ

平家ありびだんを源氏への有るなり。死を付て源氏へ忠臣具ハあり
 聖父も直実が事なりと感むれを付るが程情なく。経養の
 然心せしとハ。教養死して直実が事なり。此等事と云ふなり
 尤執事ともいふなり。いのらふ事であつたり。此等事と云ふなり。けり
 事ハハ。忠臣義士の道よめり。情も味なく。

熊谷蓮生一代記卷之三終

熊谷蓮生一代記卷之三終



熊谷蓮生一代記

四

L289
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

慶應二年

寅十一月水之

梅作弭岩川村

箱谷作六



徳吉達生一代記卷之四

目録

并ニ 徳吉直實教養の所首と送る事

并ニ 徳吉玉琴の娘のゆ糸と尋る事

并ニ 徳吉権頭と界目争論之事

并ニ 忠実出家の預と出す事

頼朝公徳吉小嶋玉の事

并ニ 忠実都又志を奉る事

并ニ 徳吉上系箱根小一島之事

并ニ 忠実吉水而出家一連生と改むる事

熊谷蓮生一代記卷之四

熊谷直實敦盛此御首を送事

并熊谷玉琴娘の行湯と御事

景行録曰大丈夫善とる事明也故は名節大山ありも

重と公用あり剛也故は死生鵝毛よりも控を。相も熊谷直

實ハ敦盛と討て感状因書とも預り。た。惣傷胸中。致

閉て一分善提門より人と思惟。ち。け。ぞ。殊。務。を。し。其。口。も

く。川。ゆ。き。登。八。日。熊。谷。一。紙。の。消。息。と。認。り。敦。盛。の。首。并。小。書。簡

乗の笛其外馬鞍曹兎に。も。ま。を。く。く。相。搦。敦。盛。の

父修理方又徑盛の八鳴の陣へ送り。其。状。の。文。曰

直實謹て言上も。不。致。小。此。若。に。逢。な。り。兵。王。句。踐。山。逢

熊谷蓮生一代記卷之四

秦王の燕丹小ありし喜ひ直を以て猪頭と交せしむ
いまも柔弱して殊に容貌麗しく勿ら死歎の思ひ
忘る武勇れ英氣を喪ひ刻へ字後と如くするこころ
前後小源氏の太勢發する間被ハ多勢出ハ勢發
養由ガ術も空しく直実生を子孫の家も棄て武勇と
奉朝小暉し名を天下無雙小得たり此君を人助け
事すすこも源平武運の可哀小奇人や早落もしく勤
事すも一旦敵は組きて何面目小存命こそ御心金
石のぶく其時味方軍兵四邊小元満せり家の面
目家本意は非ずくつえども落後と止めて謀るにも
御頭と賜る程の袖を見せしに青葉の名は由りこの

曉は爰弦一むすけ表もろんとそ孫増ふ悲く傷ハハハ
直実と係を怨世不結ハ今もあて悲歎ハ言とらん
け運縁と競ハ生死の仇のと一蓮の交とをらんや
付ハ國君の地よし悲し沙善掙と弟ハ事入し直実ヲ
志約定て後岡小源はけ競と以所披落幸希也悲惶後
元暦元年二月十三日 徳若部丹治忠實

進上平内左衛門尉殿

其内修治と事ハ終業ハ遠抱をんこまひこ
送る分りておとそ是を流決も公邊のそ中お
父母ハ憐もあしく又娘も世
軍兵を後ハ故くハ

久人海も伏久人若法道ていつくささまい久人其力つて
 あつたて個し共子佛神と祈る。生死とある人とおつて
 久人も七月といふよ。改められた女をてんこまひてつてとつてハ
 ける。婦人首と擽よつてき。捨極く後世といふやく敷書
 よ。茶の花の散るとかく散まれば花の果と又母まをせけるや
 是まであつた風ふえあてさけり。初る女ハ生の世ふいうあつた
 積ぞや。死出之途の末まても。親子の縁もこれねども。神も
 うくげり。後世とて是世あふれ信ふあり合ふ女房くら武ま
 んの武士まをさう現の心也して一度ふると後件理もさうま
 了。良あひて終書て。其る個を例止むい。そ返奉と信ん
 てもちくく。奉さうせらる。其積書よ曰

敷書の前系。遺物等。悉く後世に。此頃死後と出
 たり。西海の浪も湧く。かひて思ふ所たり。今又驚くべし
 ありと。我場ふ。此者誰り。毎ハ帰のつらひをささんや。
 蓋ちり者ハかす。此妻へ。生ある者ハ必ず死す。おひ老
 不常ハ世のちひかり。此もも親と有りまらり。蘇の
 世の聲り。後くつて。孔子も鯉魚をさして。白居易も一子の
 別と懸。も。枕よのさる業と極む。賢とく。初りあり。
 況や凡家よ。於てとや。さう七日我場とあさし。よりくふ
 ありま。其伴いま。身と改まれば。来世のや。懸。帰の
 廻ひか。其の懸あは。昔もの返。生死存亡ま。ま
 久人天よ。仰き。地ハ附て。ことと祈り。心と碎き。肝と懸て

こまをいのる佛陀の冥表林羽の細文は依て七りれ申よ
 今こみ貌をいなる事。哀傷骨陰は緻し。或は袖は細く
 して再來は若らば。蘊生をまひていなる事。相問はまらば乃
 一門に於て。況や悲歎乃人とも。和得も玉の儀と訪ひ
 古今教代の法を顧るもよ。いも其例をまらす。この衆は
 厚ちる事。須弥殿は低く。雲海却て高く。もんで破人
 事。自らさきまきく。也近て執る事。未承承いあり。
 乃多きしとて。筆紙はそくかご。漢言

二月十日

大侍門尉平公朝

徳若八郎殿

と仰れり。直實此返書と得て。いも後をまらぬ。あきら

おろへ一向佛門は志しと基らる。此は狀哉別。徳若
 乃徳若父子ハ都へのけり。敦基のおひ人。玉琴。娘の
 けしを其所けはとわらむ。時代はまたまてあつ人。はし
 孫又平象の人ハ多く名を更身をかくし人。もてん
 なる振方。是をたつ子達。ふだに使もちけむ。ばせんうさく
 遊てまらく。尋ぬべし。いもまら。かむへ一向せん。と父子同
 遊し。と帰む。まらけり。

徳若権頭と界目幸満の事

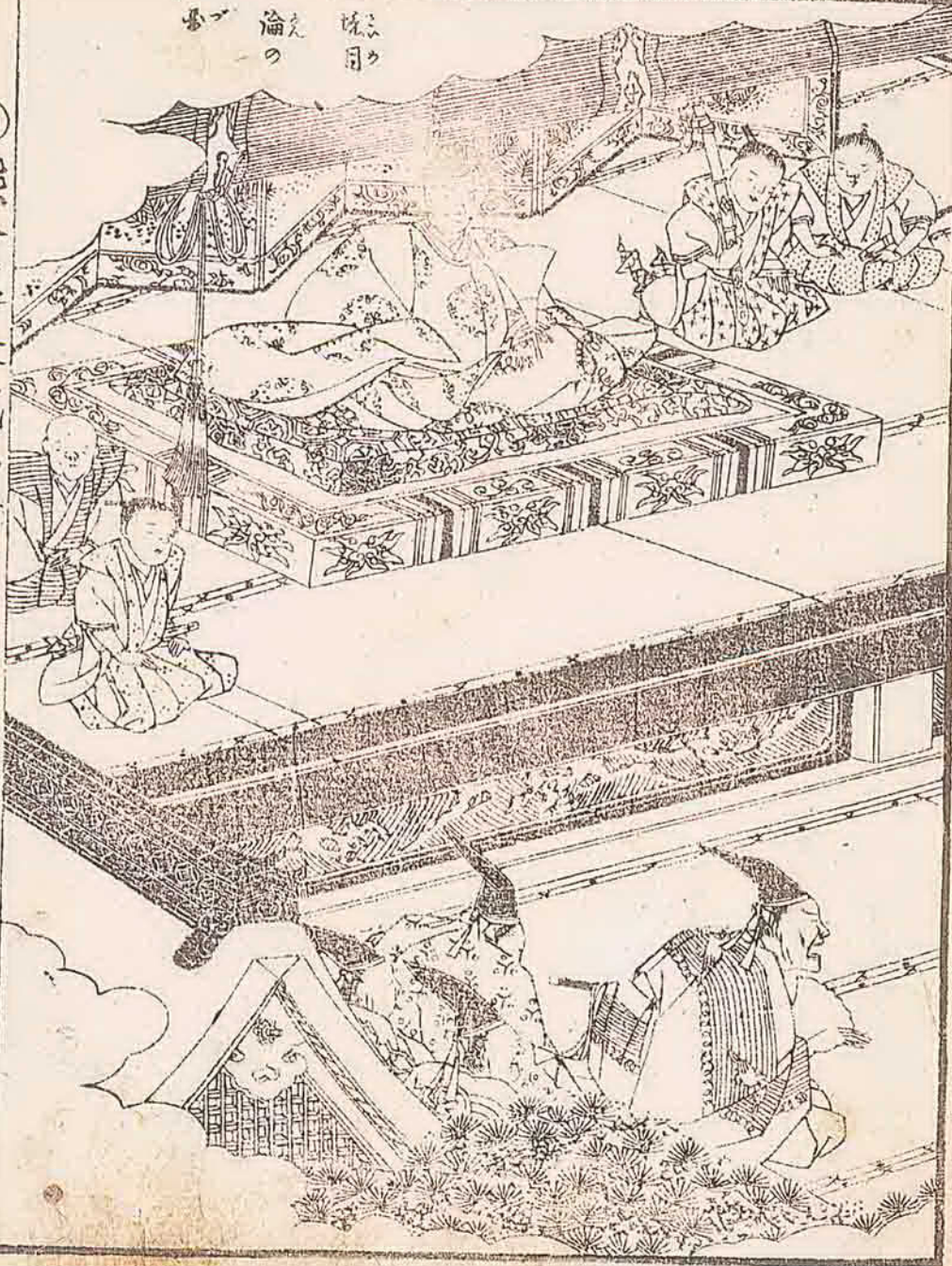
并直實出家の預を出し事

鳥鷲の卵も毀れし。後かす。鳳凰あつする。排漆の罪
 も滅せざむ。後よめ。良言をまら。故は。若子ハ。文こと

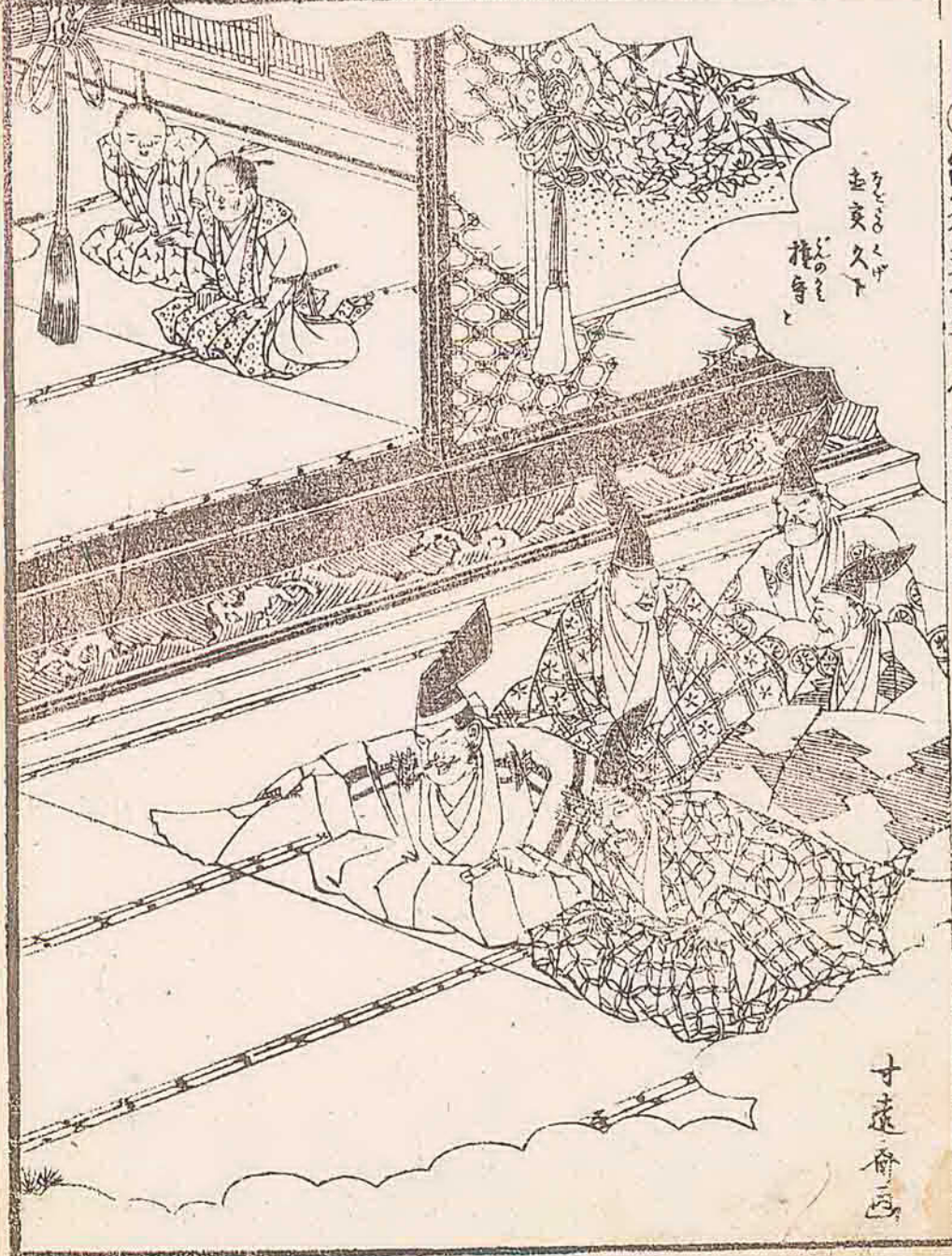
絶も悪巧をなさず。忠臣ハ其國を去るも罪ナシト
る。ふんを無名に即直實ハ有為者と入て發心
く。是も流石可蘇の家とわらひ。子孫の榮ふらひ
凝一。日くも延引く。九九年此日星霜と云うる
家久下權頭直光と界目の事編ふりて。あねあり
し。直光何ぞ我理分とたそ人と。思案とす。是年
頼朝義兵と起一。あふ時。熊谷退討の軍勢は僅として
大庭と断つ。被官とあり。幸とて彼是恐ぶぬふあり。
梶原平と景時小納言とをて退後一。うふより。梶原
權頭小肝膽と。後倭の舌を振ひ。うふより。終は直實
が非難とあり。石領とちが一をたう。これよりして

一門親類の輩。あつた。直實決して。是と情
を。諸親類と練め。けり。凡人界を。得るに。是を
と。皆と去る。宿因よ。よ。所なり。数年。家来と。扶持と
る事。今。我身。れ。功。あ。い。け。し。裸。ち。は。死。者。時
も。又。ち。う。り。財。物。地。い。う。ほ。ど。あ。り。も。皆。取。立。の。け。り。わ。り。て
。今。も。も。皆。善。悪。れ。因。縁。を。を。返。り。る。不。成。り。を
。性。地。を。あ。り。と。わ。り。た。る。老。の。道。よ。あ。り。て。没。ち。し。う。り。く。と
。分。一。と。ち。う。り。と。我。身。武。分。ハ。ト。あ。り。と。一。妻。子。と。云。月
。に。行。の。不。成。り。わ。り。人。一。國。一。郡。千。町。二。百。町。と。領。す。り
。も。ま。ま。そ。れ。程。の。諸。将。を。り。我。領。地。滅。せ。せ。軍。役。入。用

曇の
の
目カ



白雲山三才記



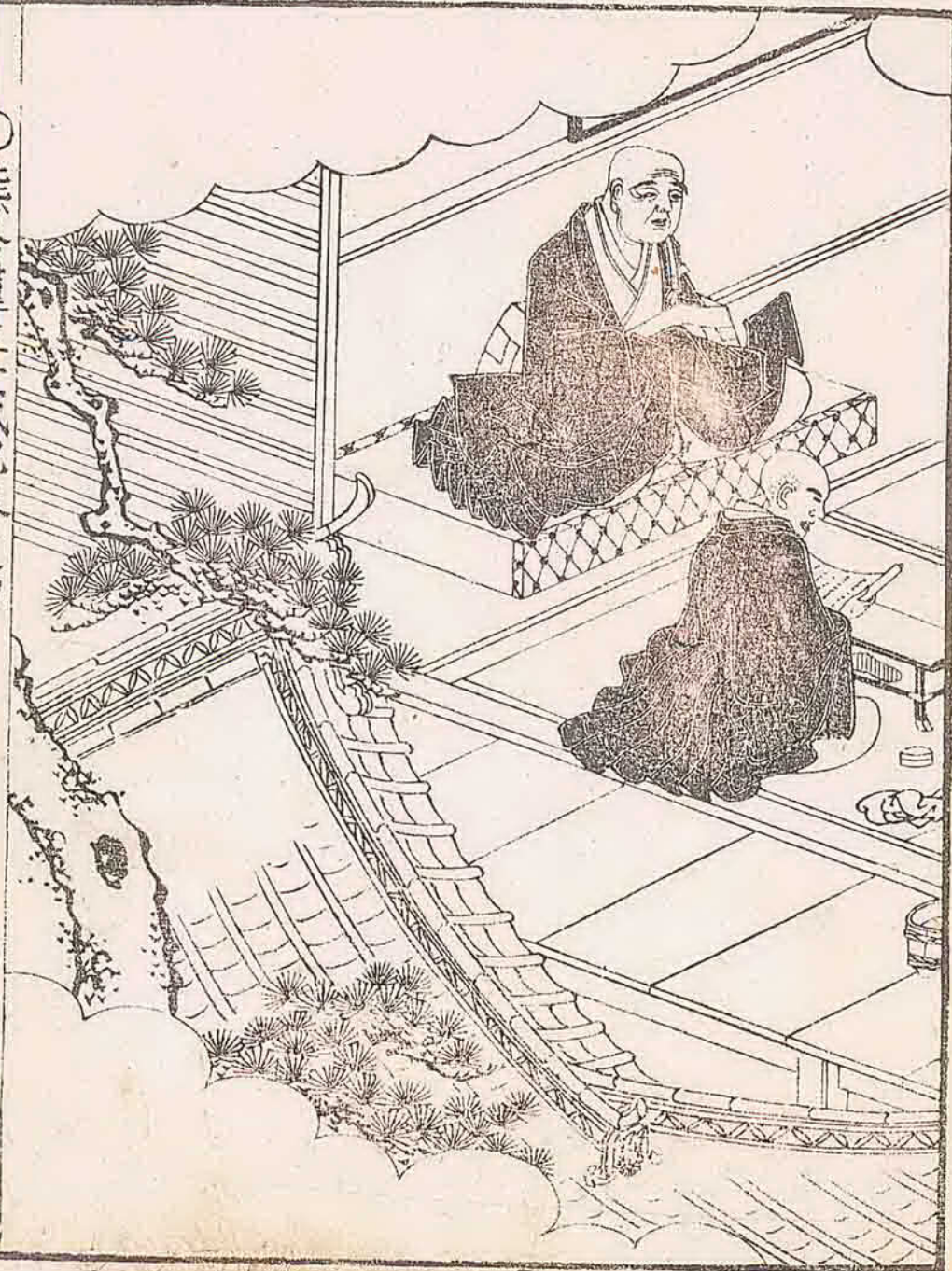
久下
の
権守と

寸遠

白雲山三才記

西國ふあゝ初とけ心ありつゝ軍中ふ終て滞りて
 預つる不忠の上望の遊ましをいひ人もに憐く軍
 て備玉後とぬきし不仕を延引の内は成の無備
 つゝ石領の内は成一石より幸毛沢強き中とあり
 後某河津中とて家と知らず所領をくく死する
 是は成を恨むる謂ちし御もいひも死を
 出家信ら他人の習も石領の懐くし入るは御存
 也沖疑ひ晴さんたれよ各をかまを殺しりては上ハ何年
 涉執成とて降主家を一所の地は捨あつて家相續の
 義備は影ひり某とくと長人と加へ不忠の助を方とて
 私の當りて若きすてふ不忠不義ハ存すしくいま今一息

陽れたり下され出家沖免是あり振るうくく頼あり
 某法師とて生ては是まで討死せし故味方此諸勇士
 と迎向して陸路道の長を救ひ死しては義と始りしや
 各入魂の友と極樂世界の道案内侍るべしと云ひ込だる
 家影をかくるせりてさうふのく乃由死成ふあまのりこ
 織ふん巻と破ハし余後たりりけるあも屋元常胤のあ
 人も慈母の愛心の大丈夫と感しては母ももふおひ
 きり義と止りり人も佛をぶ寄くけり理をいひは
 と云へ言とりしと信てあ人義の沖家とて直実が
 出家の頼ひ我くたりて止りりとも世と迎へては
 常頻として二心たり頼ひの頼き捨らるる是ハ一は



通玄書卷之四
 として
 出家の

並くの事とて成佛と人れ亦小わげ。後より裂縁にて洗ひ。
手足とも穢れをちりた。助うべき道わぶ示せしり。あま
越は越或ハ身を憚り。滅せ善ふ事よりハ天候。常くハ
武士つくと喫ふも。聖賢は命もせお洞とるは。実の武士
の善抱心こそ有るべきと。念はよせ此を常計分。堅信初輪
四の途の過ごされハ深院信がされハ。初りる。多くと。為
あわれ。程系安ん。活きの一はよ。於てハ。多山吉水の上人。多
あつた。きは。越ハ。徳談し。と。ま。更。日。次。の。高。懐。立。石。の。樹。
歡喜の後。洋く。より。ま。より。吉水へ。多り。事。月。く。ハ。後。上
人。出。ま。ひ。つ。ひ。の。若。れ。継。將。教。養。と。討。り。る。も。と。あ。ろ。し。め。ら。る。
事。も。も。だ。相。和。融。が。す。乃。び。ハ。終。言。越。し。て。い。ふ。也。如。後。よ。中。也。

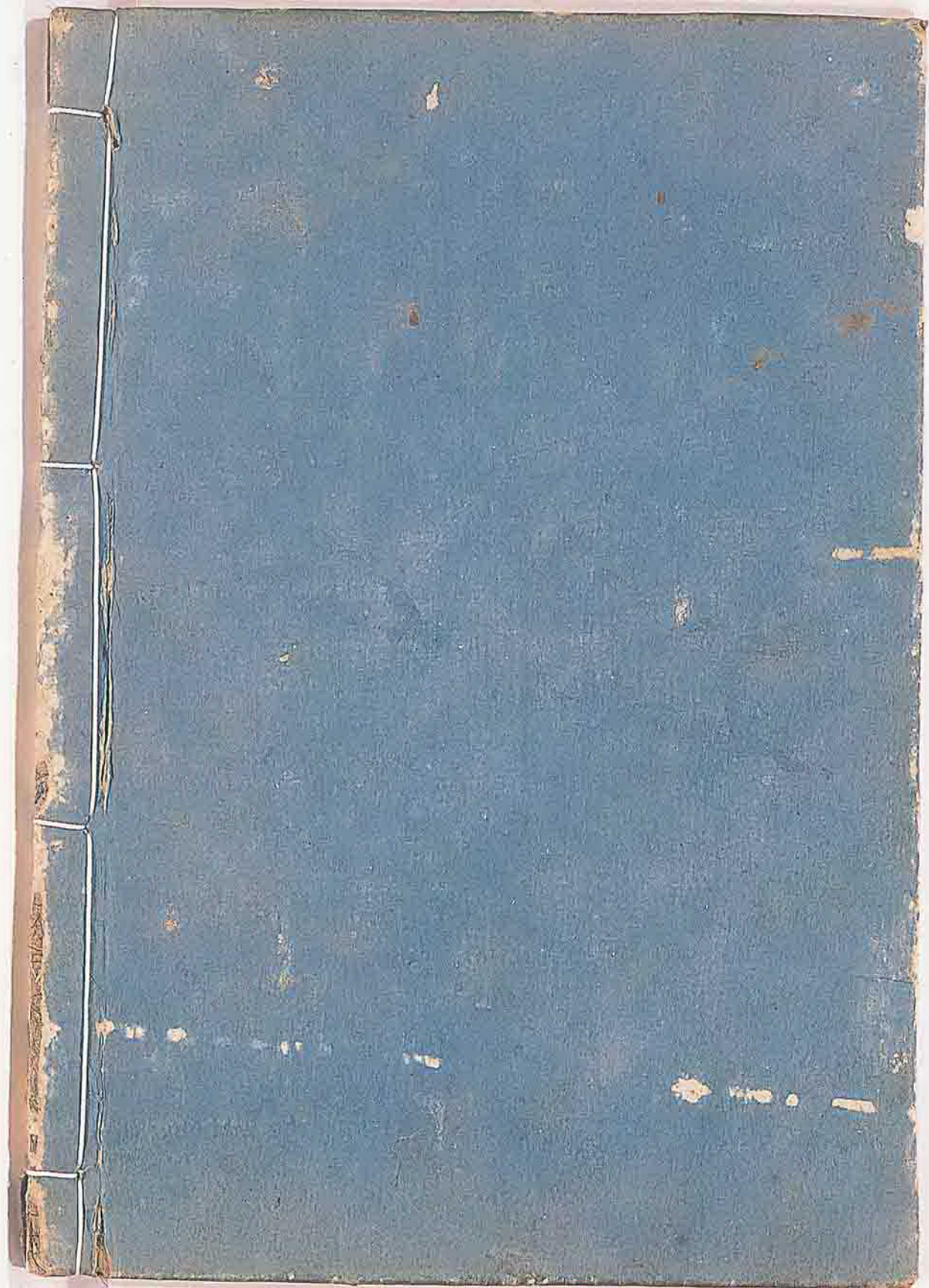
やれり。善。提。心。と。發。ま。り。凡。色。の。工。お。た。ん。是。皆。如。來。の。大。如。
為。お。備。の。方。便。たり。必。く。殊。り。の。心。い。ま。り。之。の。只。罪。の。體。重。
と。嬌。り。南。を。の。深。院。佛。く。と。執。着。け。し。た。く。念。仏。さ。か。せ。と
即。ち。別。の。子。細。い。か。く。短。く。任。ま。ふ。と。受。て。お。實。大。聲。あ。け。是
より。して。上。り。け。し。と。上。人。く。く。す。と。あ。ら。て。その。も。も
の。こ。の。心。さ。り。く。が。勢。あり。て。何。れ。の。心。ハ。後。あ。ふ。と。同。せ
之。を。態。若。言。て。頭。も。碎。き。足。子。と。斬。命。も。捨。て。こ。も
後。生。ハ。助。う。ん。す。と。い。ふ。唯。南。を。の。深。院。佛。く。と
念。佛。と。ふ。わ。せ。と。極。樂。生。生。と。ぞ。と。歎。け。の。身。と。業。り
か。の。あ。ま。り。れ。嬌。り。も。用。さ。お。捨。め。捨。る。懐。中。の。細。も。わ。く。
せん。と。く。も。一。個。ふ。く。れ。ゆ。く。け。し。と。上。人。さ。り。後。世。を

一大事といひつゝそのをこそ。無智の罪人念佛して極楽の
地生さる方。海人ごふ奉願の西意を示し。名仏乃安ん
あまやふ救ふひ。所才子とちり。別業とちり。先法
カ房蓮生と下されり。さゆぐ甚生多年の苦懐内足
して一心を佛三昧の行者とちり。かより大獲不敵乃
勇士たれど。佛道修りおけても勇極精んちるあて
傍義五人と謂つる。

按ずる不慈若入るの法多まき現あり。慈若と法カ坊直至といふ。又
字の動言と実信坊直生といふ。因字と異音と漢音とを訓て作す
ことあり。亦九考傳ふは名と蓮西とをかりり。又次の教教文乃
不ふ白帯してせん世と家うとつたり。亦九考傳の一やうの慈西

もいふとつらま慈西の法名も甚憫をさあめくば。不背西方れを地
も務まぬ。まゝ入るの款もてこの世とを新ともふよりんを
たつむり保陀ぞ悉一た。亦も倍北大原は慈若の絶棄教といふを
上人太原同善の付。上人若佛は願あり。法教の教を付んと支度あり
ると上人又付むひ。たご制しあるゆへ。別とをいふるといふ。非
此時の蓮生也といふ。信法は必行人角法七師入る海河府なり。亦も
同善の文治二年より慈若があらより十九年あら

慈若蓮生一代記卷之四終



熊谷蓮生一代記

五

L289
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

慶應二年

寅十月未之

拙作源岩川村

和名存六



總目録 蓮生一代訂 卷之五

目録

月輪禪定法然上人と振清之事

并蓮生坊昇殿と作らる事

法然上人降松栴子而後く事

并蓮生と妻小敷盛の道と送事

并琴親子敷盛と妻小圓之事

并蓮生と妻小敷盛と妻小圓之事

并琴親子敷盛之事

并源岩川堂監修之事

あるはません。方便とありし。更に入りの扱は。執言して。りけらる。
厭離縁土。欲求淨土。佛の教。まゝ。深は。縁土。縁土。縁土。縁土。
か。可法の如き。よ。も。位。か。れ。を。中。と。結。極。樂。土。の。下。
に。是。別。あ。ん。と。言。つ。け。り。呼。り。く。れ。ん。禪。定。教。下。是。と。言。ひ。百。色。六。八。何。者。
ぞ。同。名。れ。は。上。人。等。を。あ。れ。と。結。言。入。る。道。生。と。わ。て。武。尊。心。
し。う。ま。る。今。道。心。と。り。り。が。持。て。所。教。ま。は。付。後。身。と。仰。け。は。を。
月。輪。夜。も。か。ひ。て。す。乃。ま。は。慈。音。と。は。傳。く。も。か。か。る。の。聲。れ。へ。り。
傳。り。て。沙。伎。と。も。道。く。る。ふ。蓮。生。一。言。の。式。卷。も。た。く。大。師。を。く。候。下。
く。ま。ば。月。輪。夜。の。心。ひ。お。い。道。生。坊。と。し。ら。我。独。も。内。音。を。よ。方。と。
と。あ。は。翻。も。て。は。若。列。と。言。ひ。我。を。も。師。の。と。人。の。現。法。の。を。え。
と。別。後。の。淨。土。の。何。れ。も。下。と。婦。人。や。て。空。り。つ。い。ま。ま。の。も。り。候。い。

蓮生。乃。多。南。來。の。性。は。果。報。程。を。し。と。せ。て。忽。昔。之。の。日。所。願。を。
作。さ。る。果。報。と。成。り。も。が。影。志。仏。の。け。よ。非。ん。い。そ。う。け。式。り。
速。ん。と。皆。人。耳。目。と。傳。う。て。ぞ。そ。之。け。り。

法慈上人。津松。松。子。お。清。く。奉。

并。蓮。生。玉。契。ふ。教。卷。の。巻。と。源。奉。

起信論。曰。法。仏。の。法。の。因。あり。縁。あり。因。縁。を。具。と。成。在。す。と。得。と。
こ。ん。は。心。縁。と。稱。人。順。遂。の。二。つ。あ。れ。共。は。縁。ま。つ。り。は。ま。ま。と。佛。性。の。れ。
こ。も。縁。よ。達。す。の。せ。足。さ。も。蓮。生。坊。は。先。奉。一。の。若。う。と。敷。巻。よ。り。
に。り。机。の。守。と。何。と。も。玉。琴。瓶。の。り。糸。と。び。て。後。と。ん。と。あ。は。後。同。
へ。と。扱。も。た。く。神。よ。小。乘。に。新。美。時。總。念。教。の。命。と。う。け。あ。之。奉。系。
都。よ。止。り。奉。系。れ。一。族。家。門。の。小。兒。を。を。あ。く。く。く。搜。

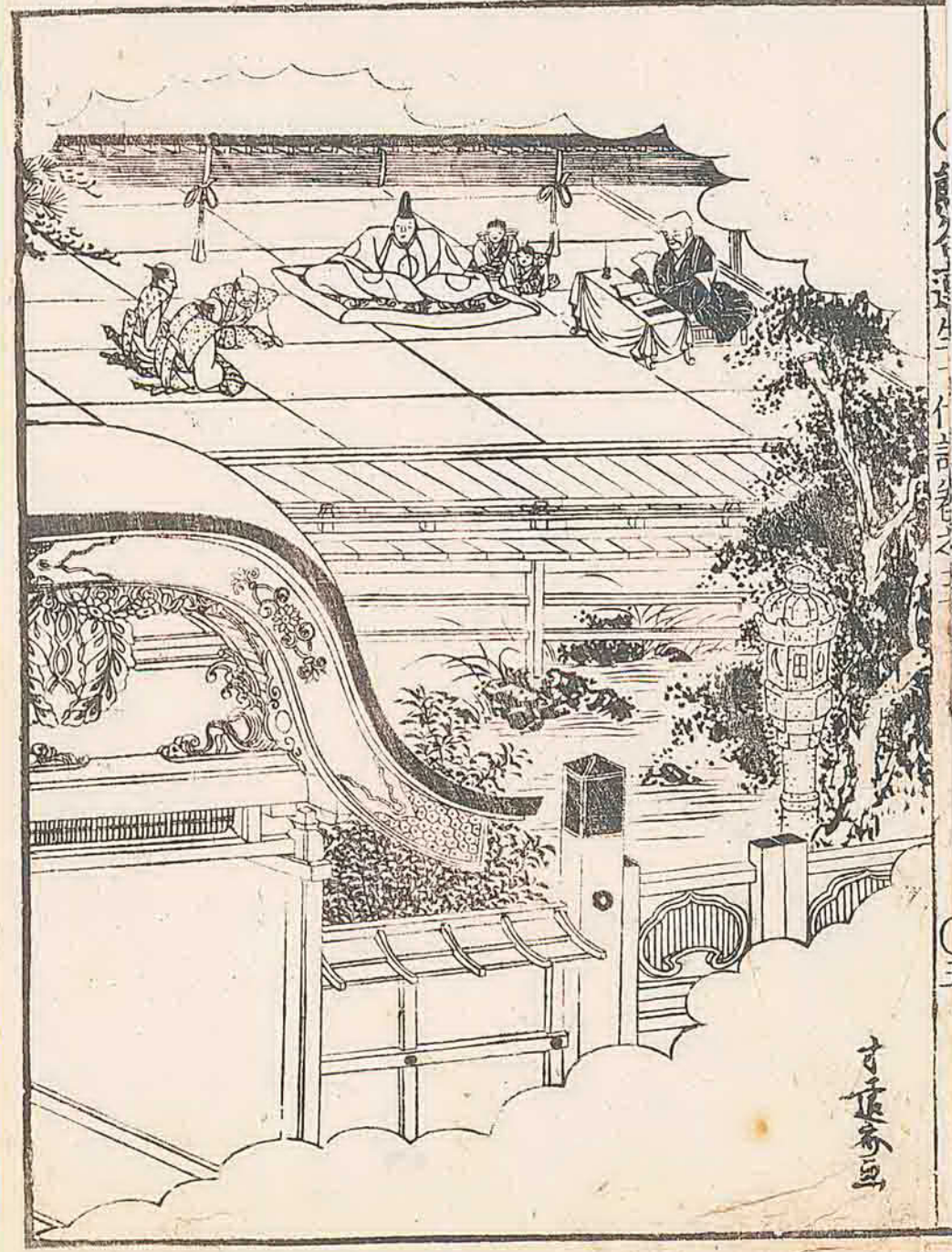
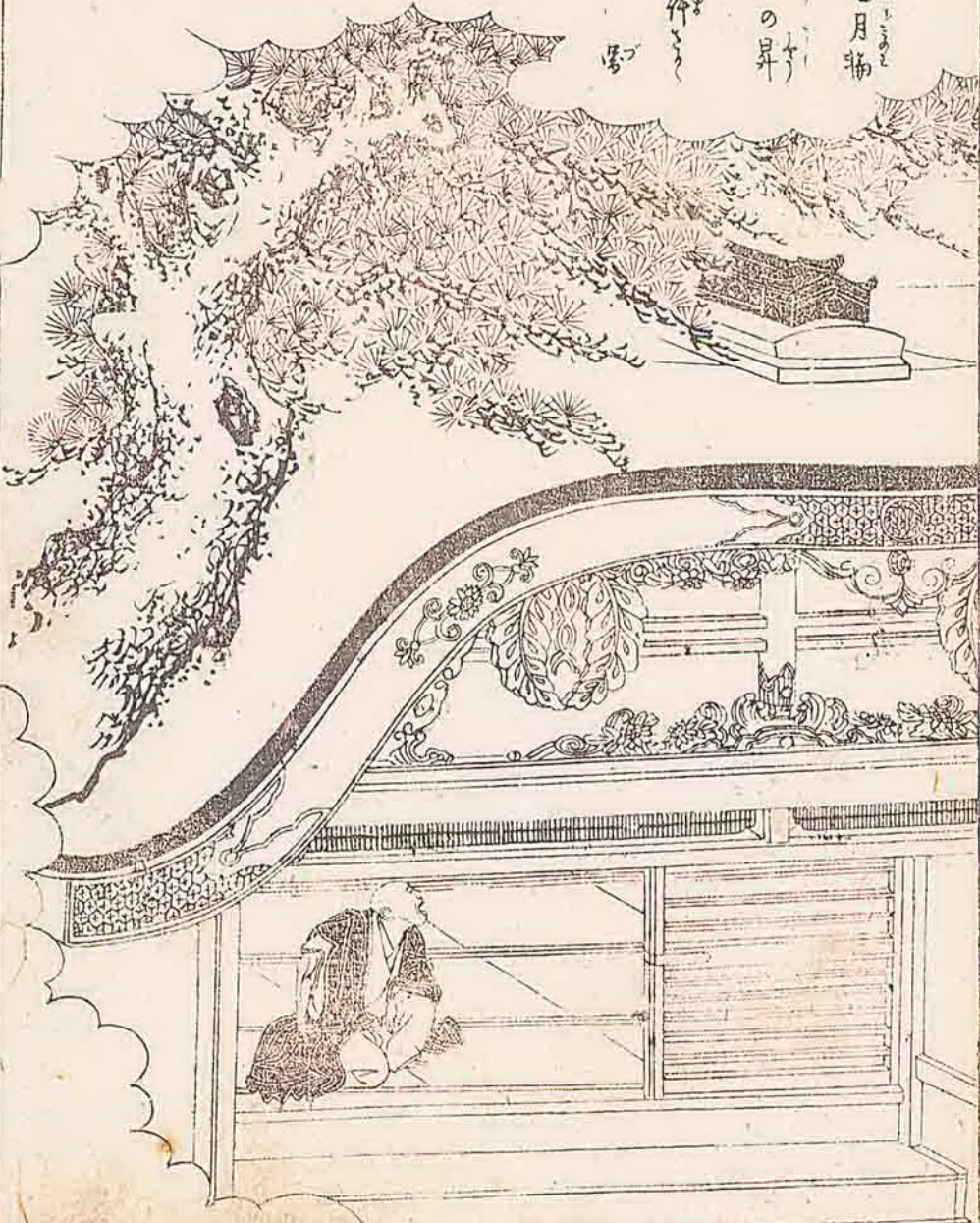
出して殺害しけはば定て其罪も重なる。よき事なり
 ても中々それとハ知ましと云ふ。心の中ハ片一瞬も
 忘る隙もそハあがり多。後ふ上人の居る所ハ毎日
 八景けり此重乳母のつとまるとハ哀憐凄くござ
 べきが有る時あると帰し後蓮生上人よじつてあの
 事ハいふ所の人の子そいそやと存せられも。上人等て
 何ハお尋ハ心算入縁ある者なりと何々ふ蓮生入
 道うたれと云ふ。誓付安きて若や敷盛の縁ももある
 思うやとかけば上人あれこそ至官大吏敷盛の思をり
 と何とすて叔ハ按察使資賢卿の息女玉養姫の思な
 人やせせだ。上人彼を云知あふものハ併あす人よ

沙法も有るに何有ける小蓮生一の若も敷盛
 より匡の守と云ふれを奉ふそ母と存てお渡べしと
 せしむと人さわりハありよ及んば月日重か母と扱て
 け方とて渡さるべし。まより奉ふて後々ふ清くせよ
 比叡山より一丈文治二年ハ秋の末加茂本神宮と云
 せん。一葉寺ハ降松後一葉の降松と云ふ非なり也。太平記降松ハ小なり。思と通ふ
 大勢ハ人集りて御もあはれなり。ゆきゆきあつたをこめて
 五葉の山ハ二葉計と云て後の小袖ふ包てる控み方なり。
 なるんこの甲けハ後々さるまを是ハ控ハ育るもの受け
 とも。若平家なれり方々を後日けは是ありといひて誰
 れ上るんを。然ハ三子年ハ一度嘆傳も夢死よりと

稀りて。例人界お生とまゝなる者といふ世の忍みればとて
出家の身もして人捨てはぬ。人を救ふ出家の業とて
疎く形も不便とを足捨て思ひず。夜の袖は抱つてを
の家と親乳母付て養育す。幼少梅摺ハ二葉より着く
生立よはひて教養常々養ふ越えれば人懐と懸る
いなり。我山を捨ては房も捨てより。毎小乳母を奉り
別は小法がハ慈愛も増してよく人へとせ。能出家に
せむやと。髪とも立す長じると約たり。又被が小ハ乳母
の母乃身と教ふる養育も。教養と命と人にも教養
丸とくむ。竹もくが。此にきく年。教養七
葉の雲。清水寺の地は。梅と乳母がついて人懐

行一が。系中。此老善男女。袖をつめて花の枝と親
戯は。花も中。六七葉。計は。おき。成。父母の双方より
よとひなせり。とて。教養。乳母。おむ。ひ。あの子れ。よ
たる二人の男女。何人か。んと。おむ。ハ。乳母。養て。あは
あの子れ。又母。ちり。と。実より。泣。泣。さ。ふ。花。も。も
す。く。あ。く。ゆ。ん。と。い。ふ。さ。く。遠。も。つ。く。教。養。は。行。方。を。く
つ。と。帰。り。房。も。あ。つ。た。教。養。を。承。お。お。長。り。く。ふ。の。花。は。れ。そ。の
中。よ。年。の。成。我。お。似。たる。養。と。父。と。母。と。が。あ。方。より。よ。と。引
て。り。と。も。る。が。あ。れ。ご。く。後。き。事。も。あ。り。又。母。あり。そ。れ。は。引。り。く
我。身。よ。い。父。も。亦。く。母。も。亦。く。い。や。る。ち。ら。の。お。侍。の。や。と。後。り
く。り。て。例。と。し。た。最。も。後。を。せ。ら。う。の。て。長。の。袖。も。あ。れ。と

見世り
生月桶
殿との昇
殿と降
等



東海道五十三次

洞と共は語むを聞人とも候と僅し。教ちるか行人の
子こそ者人な候もも知人あを告むといひ合ふ。徒
知るも子人もなき。候後終は人への候は向し。其
泣ふ女房も人ありて。我は射して。射くも其子母
方り。子と推し其言より上人の心教ふ包きしと云う。人
世中に候子をれ上人は捨あげし。ハ。射が候びその子
幸に經なむ上人を佛神とも云ひ。毎くひと合せ。あ
せぬ日そハ又よき。文治二年秋より建久二年秋よ
まて六の月の暮をさゆまも。其子母と候。其子母と
中とさるハ。人の教もあはれ候も世とあはれハ。是れも
そくくさす。一年月の其沖然ハ。年々もぬど。いつの世もハ

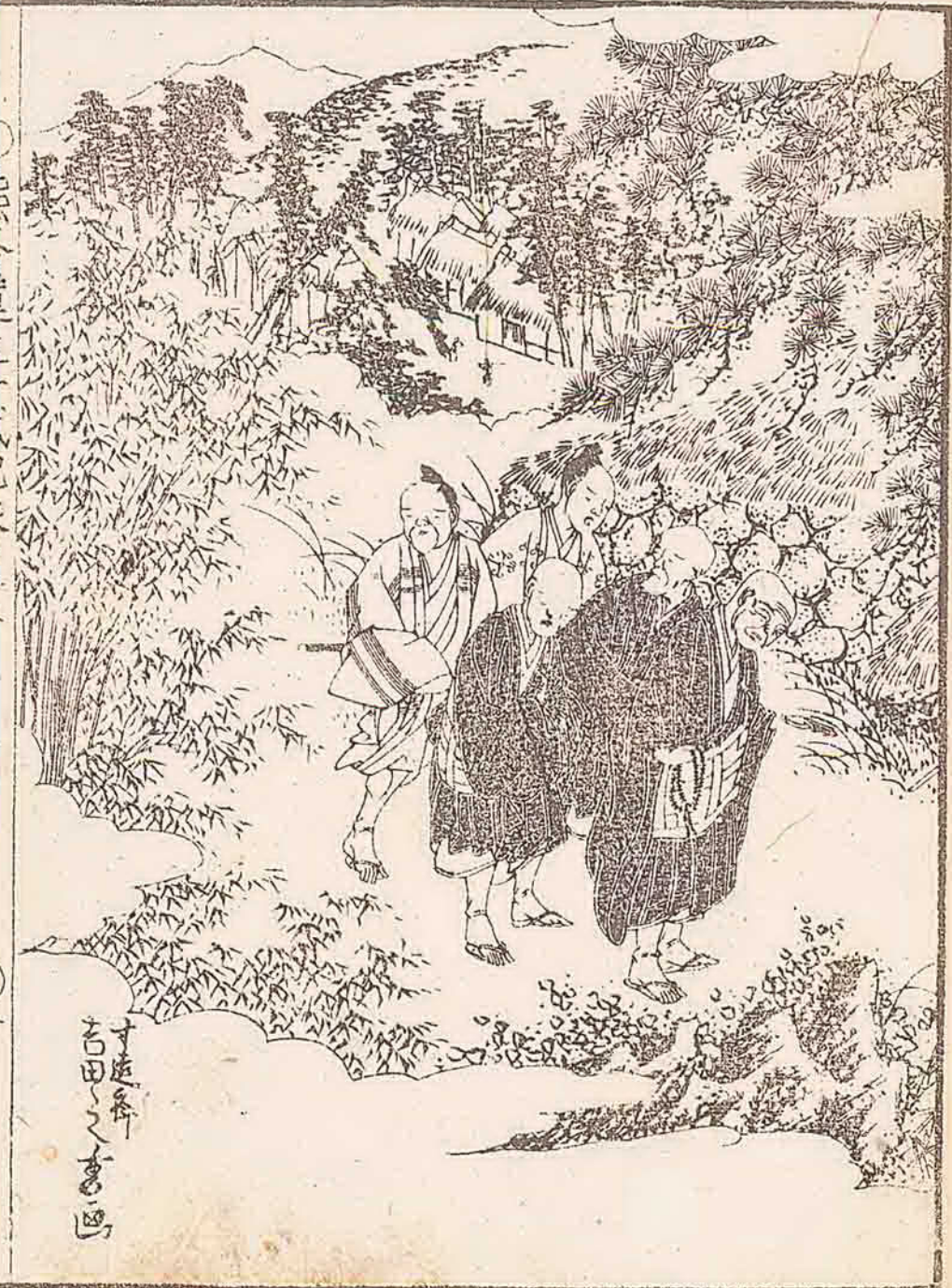
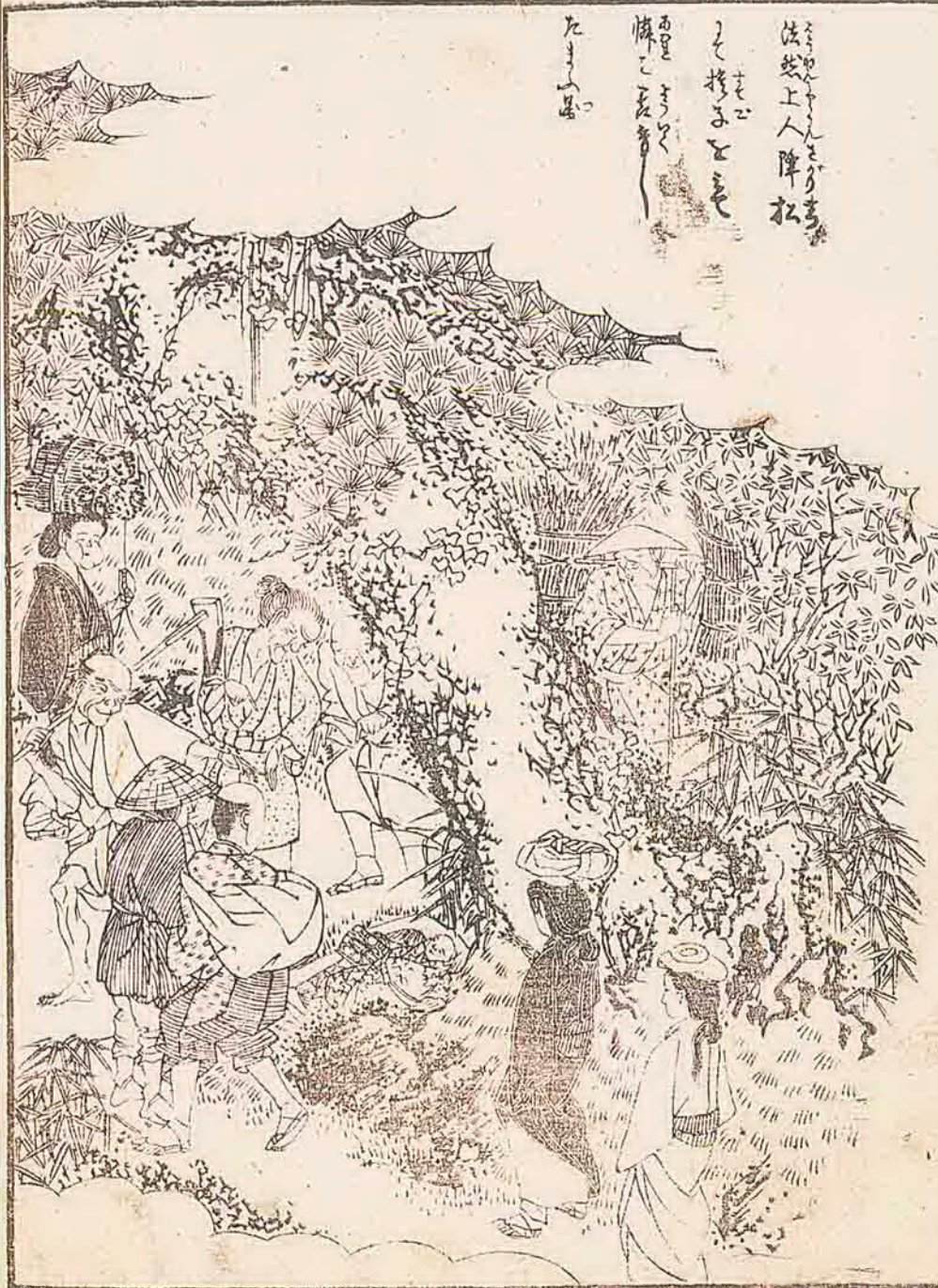
被らまはし人。是との候りハ。沖慈照の眼も又捨むを
洞よりして。使たる俣限なく痛りく。叔ハ。母を
違て。竹とんと。願われよと。仰らるる。ハ。病の候
とだ。瘦し。候安。子。狗をせ。れ。く。後。を。押。れ。放。を。我。て。其。ま
汝が母方り。何と云ふ。心。は。欲。く。ぞ。頭。を。接。せ。母。は。其。手。を
抱。と。り。げ。お。も。久。し。や。何。と。も。此。行。ハ。又。ハ。い。さ。り。や。我。と
齋。く。な。げ。り。あり。妹。ハ。我。の。母。と。な。り。た。ち。ぞ。と。く。あ。り。知。せ
む。い。ら。ど。や。其。の。母。も。知。り。て。と。ふ。と。さ。す。一。姉。一。さ。よ。し
候。候。母。の。孫。も。す。り。多。く。顔。つ。く。く。と。赤。糸。洞。よ。く。見。て
者。さ。ぬ。い。ら。ん。人。も。抱。ふ。さ。ぐ。り。母。ハ。兎。角。の。洞。方。く。懐。抱。し。て
位。院。や。妹。や。親。と。ち。り。子。と。あ。る。と。母。の。後。よ。わ。ん。後。を

法然上人降松

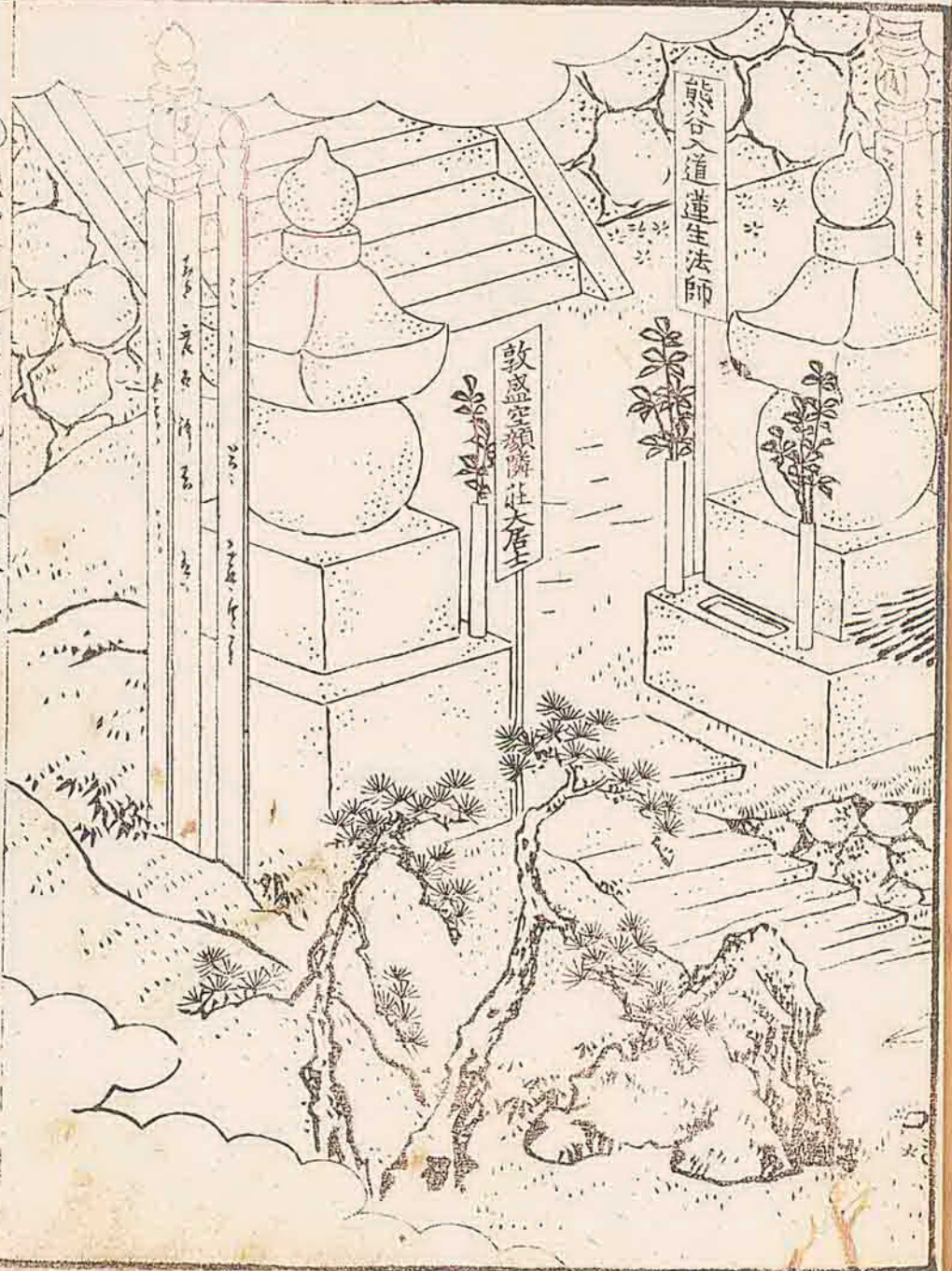
まご

まご

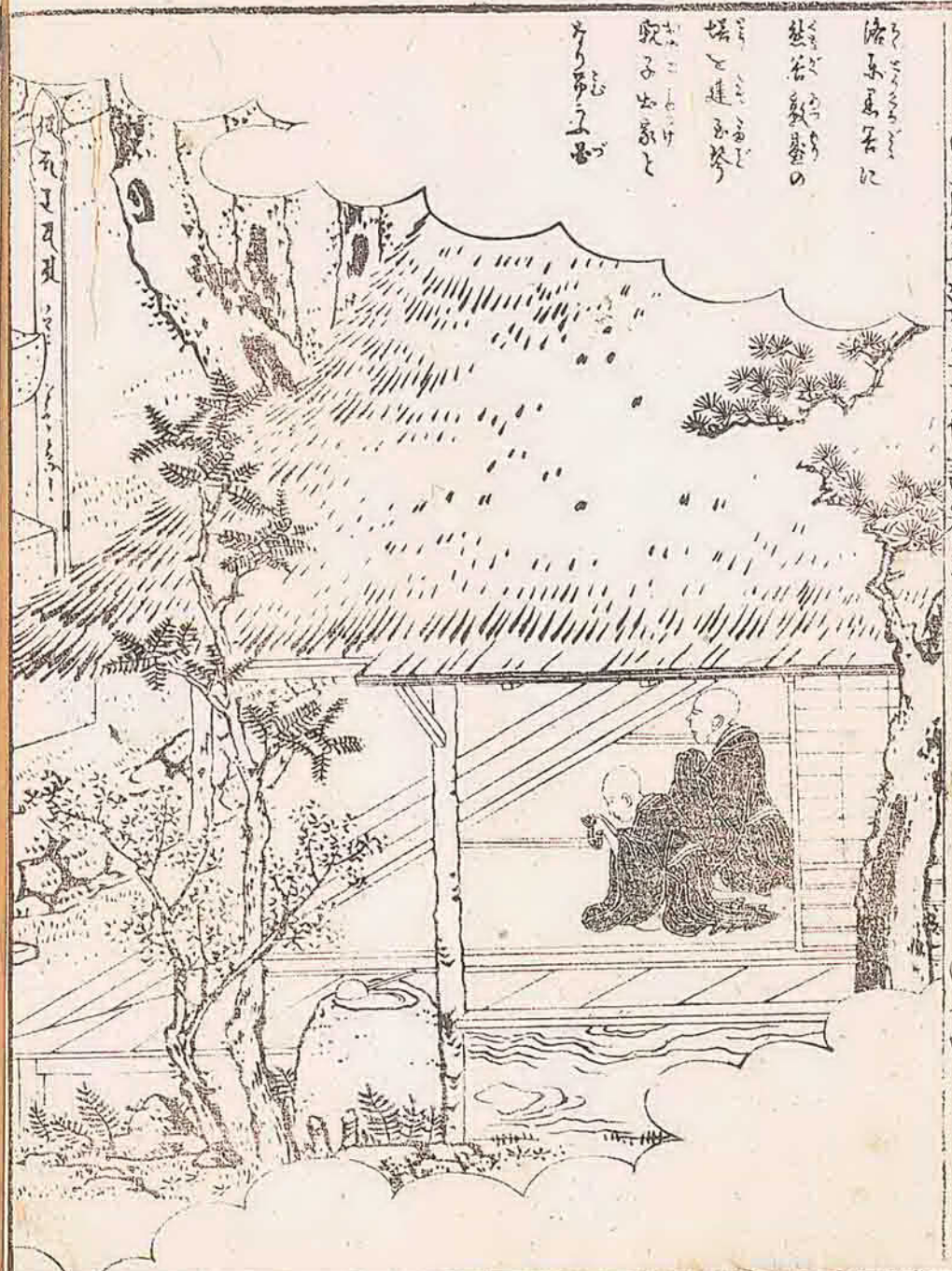
まご



新編 浮城生一八 諸卷之五



居士居士に
 然谷教臺の
 塔と建玉塔
 殿子出家と
 ありありと



仕但一それとも髪とおろせしむる上人の沖刺刀と頂き
て沖刺刀此末に如く下とす。後世の百ふかしの師の法要書と
諸下書念存いと教ひやとけしむ上人を宗師中知すし母
子其沖刺刀と下とせん刺刀と蓮生法流一と入道別母子
の頭と刺刀を母を生之坊如佛。又教書と法信房成蓮生
法号と下とせん其法書生かけしむて我別慈母より技
助と得て五條の南系極の西蓮華院の王阿と人の如佛が
又資質卿の内蔵もあはむ。彼院の例も居を志して又教
盛此形え此系をよかして系をおて後世し。母子もふ
唯念仏と勵を後生此一たる此勸多る。又如佛尼は念
の同約と得て。毎月別時念佛をぞ修りせむ。世の人

按別一の名をもとるぐよの廟系ありがた多と上人の

室金戒光州寺の東北山腹に教書に此石碑と経書と

人より空頼憐信居士と法號とさがる石面に記しその

南ふ我石法を建る。亦多々本より此脇控に教書に乃

本像を安を主一朝夕の旦向多りなり。又毎月念日を玉

琴親子多祈して。蓮生坊法書に佛おむひ。別時念

佛と修してあつとり。并ふ一門の人を此法と弟ひる。

玉琴親子及發心し事

并に沖教堂扉聖筋し事

ありと蓮生坊と教書母子もに上人の沖教書に記して
修するに教書が母の修りたれなり。他人の情を別

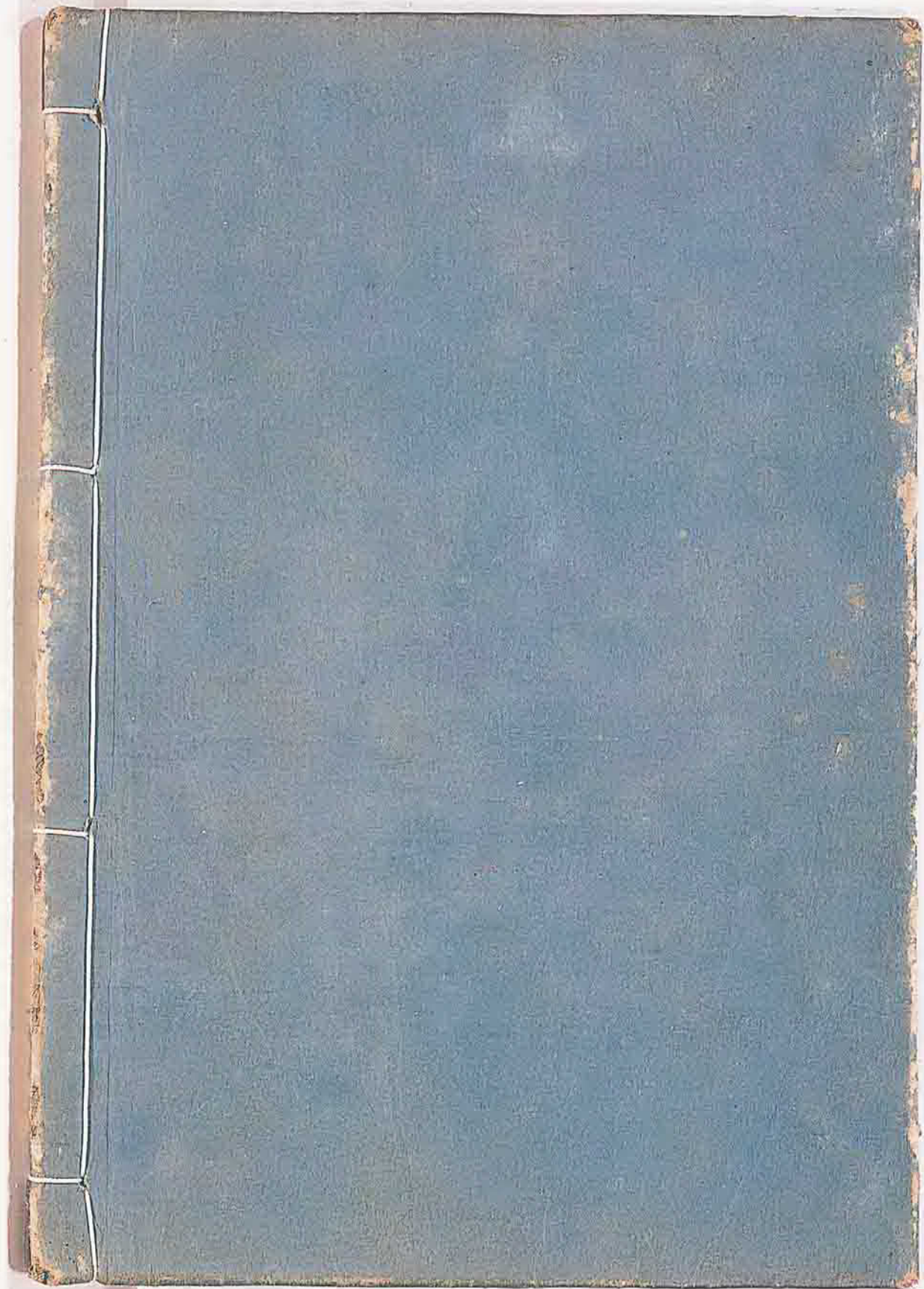
命と書ふは定めて夏一の多クはべし。万幸し如うたさるに
念佛の信心も却て障りたりべし。志しを母と共く書ん
事。子よまゝとてわけて教養成人せむ。出家させんとおひ
今おれそへは男の多し。いづれも後世の役あり。母と書ふ
し出家の功徳も揚る。幸ちらるる。首子もおる。ぬあひ
あまを。放棄せ成人すを助成の志業せらるべし。竹けも
入道あり。我もたこそ存足也。自今いふ必へやつり。将小
以即出家しとより援助つてさせ。いづれ所して使修く
臣長し。母子も世と送り。れよとかけ。色々と人。大ふ
まり。我より。好まら。中。此。か。と。陣。痛。の。後。世。に。女
か。と。母。子。に。別。命。と。書。ふ。と。の。い。ふ。事。り。又。の。か。と。の。男。と

おのの尼。湯。お。と。等。り。又。と。人。押。入。威。の。後。ハ。は。無。と。人。乃
押。影。像。と。書。わ。て。お。け。お。き。朝。言。れ。お。志。ち。が。く。扇。を。清
世。に。わ。り。ぬ。人。世。奉。々。押。影。堂。扇。も。つ。い。あ。る。に

如佛尼母子共一人の押影戒とくく身り。多福ふんを死とて。ま
佛の功。修。り。女。の。元。ハ。意。元。年。己。丑。の。生。ま。り。寛。永。二。度。寅。年。六。十二。歳
感。五。文。信。己。年。に。生。ま。り。て。四。十。六。歳。と。一。終。り。て。親。子。同。年。二。月
十五。日。の。押。影。齋。あり。て。多。く。に。喜。仏。己。の。刻。より。後。お。年。廿。四。中。は。場

と。人。より。男。信。と。か。ん。と。く
亦。曰。王。門。と。人。情。を。お。と。り。一。遍。上。人。の。姿。像。と。書。り。終。り。日。後。の。押。影。と

亦曰。王門上人情をとり。一遍上人の姿像と書り終り日。後の押影と



熊谷蓮生一代記

六

L289

7



慶應二年

寅十一月來之

極作御岩川村

箱谷侍六



慈台蓮堂一代記卷之六

目錄

南都大佛殿遠之幸

并慈母出家信然上人多留多之幸

蓮生古郷へ下向送馬之幸

并同為杖名して念佛奇瑞多之幸

蓮生武藏野にて空津宮跡三身多於多總多以多蓮多幸

并頼徳多心多切多状多之多幸

蓮生古郷にて老母多小對面多之多幸

并蓮生多濱西粟生所多小園多居多之多幸

慈台蓮堂一代記卷之六

頼朝公の危沖甚遠中不対面之事

并ニ慈谷横取名号之事

慈谷の老母之誕生之事

慈谷蓮生一代記卷之六

南都大佛殿造立之事

并ニ慈谷出家上人之謂之事

世尊無極の大悲甚為發せざんば、孝終よ止子の、事田、慈
得ん。人、一、旦の妙術す。我あし、か、んを、動す。以や、如、来
大悲の攝出、下、空、空、う、んや。お、も、建、久、六、年、二、月、十
一日。南都東大寺大佛殿所造、管、終、て、所、付、表、す、付
右大將頼朝卿結縁、と、て、せ、ま、い、ま、し、り、所、上、洛、お、ま
慈谷、小、八、所、直、家、所、供、し、て、登、し、が、幸、小、上、人、の、所、為、を、ま
ま、と、し、て、渴、ま、り、又、蓮、生、入、道、年、來、の、所、急、を、と、礼、謝、す
又、蓮、如、尼、威、之、蓮、坊、も、表、面、し、其、后、又、入、り、な、り、白、ひ、何、と、を

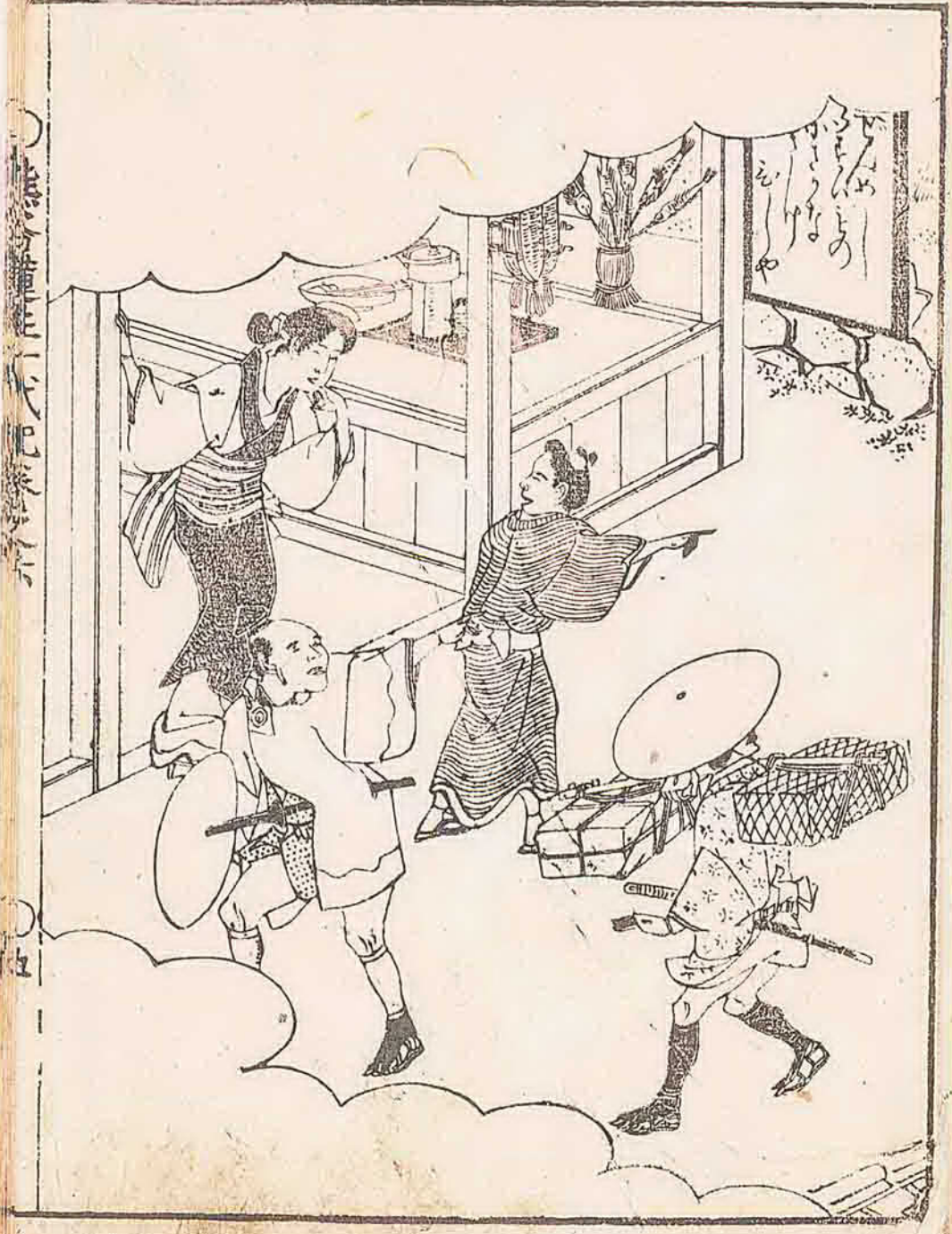
老母なるのりふりくゆまをぐ。折くハ母なる重家四世仕
らんとやけしを。蓮生曰我君て老母の心を付て下向せんと
とふなり。折も母と回るハあむに叶む。一人に下り下向
下と申ふは折ちく真家人々に嘆息をたす。旅籠へ向
る。折ふ其秋頼朝ハ小浜御直家とて是作のハ重家
入道ハ若面せんの日。折朝多言中を信念をせけしハ
直家長より別入江の蓮生よりて又入江ふ向い。作の
熱とと述ふは蓮生は返りしハ今度右大将家御直
家の下ハあむられがふよりてまゝに返りてお終の遊羅成
凌て。折儀姫を寝ぐをむた。重家御直く下とて下向しハ
重家右の兄弟と言と一々をた。頼朝ハさしおをりて

別後余又下向す申しなり

蓮生在郷へ下向送馬事

并同友枝宿して念佛奇瑞事

おも蓮生は師ハ吉水の上人ハ仕るもよとせあなり
ねはバ。遠在る猶き或も亦郷の方なり。此折老母
の痛のじ支へりて。蓮生上人の御前より出で申るハ。某も
上人の御教訓を以て極楽往生の心は定む。いづれハ。折も
國の老母に最極のじやなり。折も亦郷もたなり。上人
や且後世の用心を考る人たけしを。定て覚悟ありしと
存いハ。一まが幸むへ帰。念佛と勤りし人。蓮生極楽へ生
まんに母とせえずんを。返りて。又ハ老と懸る。孝のふ



蓮生運馬
 余在竹一

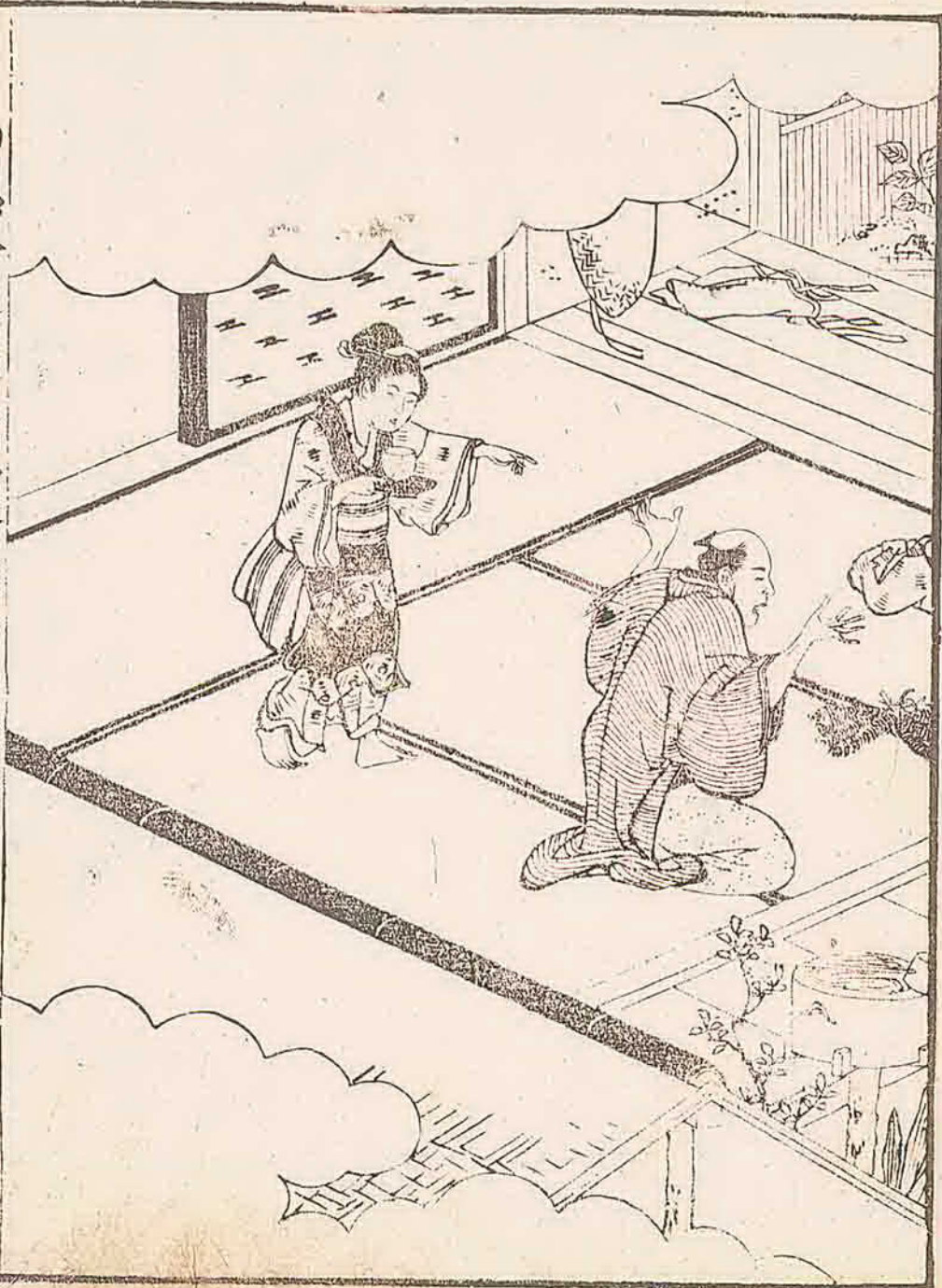
わづらひ佛菩薩の影向たりとて。誓に身を去りて
て慈後をとりたり。預つて一唱たりとも念佛
を以て。口を又蓮をまわしと平伏して礼ねすれ
た。蓮生の云。かろくど慈せしむ事なり。此蓮土の
現世不苦死生せんよりい。未承極樂淨土の蓮こそ福
かふる事なり。信心と影して極若念佛する人
かろくど淨土不苦死生せんことうさういれすと教
化しるもあぞ。身も一旦のうきふ感歎すもの
今まをい徹乃んもたうり。此教化なたらまら信
世の憂ちる事を悟りたる。こを思ふのん。此憂
市をたうして法門を極開し。修ふも淨土佛の極

入。大信心の行者とちりあける。其後ほとを修行
一向宗乃祖師親鸞曾人。東國化道をたうり。あ
おろく。かの名のもうまを人の所来りとちり。慈と極
して幸となす。今後州益頭郡辰枝の名蓮生寺
こそちり。京師本が預寺候なり

蓮生武蔵野を津宮に三郡植徳の蓮生

并。額細發心行状の事

蓮生は師。其ま人成藏野。今東海道の影
より家のみ。郎黨海く堂。そして大勢の性を
たう大なる出合たるふむ。此面影も精をけり。道
とつけて。蓮生は。しての蓮生。馬の上。一



此の如き
 蓮生居士の
 教へしを
 善哉の書



通しもあましく。新勅撰集以後の和字集にうづ津蓮生の初字れ載るは、

新白裁集め山のつかりこそある

うづ津の蓮生

月かげれ杖ハ杖をもちりぬも誰うらん毒れ後衣

續拾遺集二月十五日れ御くうんゆ

日

けのふらゆつむいちのまももれ八十れ集遊ゆる

其外海方あまのりまも累と。蓮生り年八十を餘集

西元元年十一月十二日端坐合掌してまぬ叔百友の後

行の理れありて。此生のま懐とまけりまるとまうう

と龍寺の別後華其を奉塔あり

慈旨蓮生古郷こそ老母お對面こち支

并同洛西粟生ゆふ因病と事

叔も蓮生法師。三ヶ年うり少て帰必せし事ちまは家

肉ハ中にねよほど。一門習音の人々も集ひま。たぐいお

ま事とまうなる。まねら置ま法師。老母ハ勿論妻子

秀属回成れん。まをふ念佛とす。先。現尚二世の利益

あうことを考るにま信仰れ志とまうとまは門り

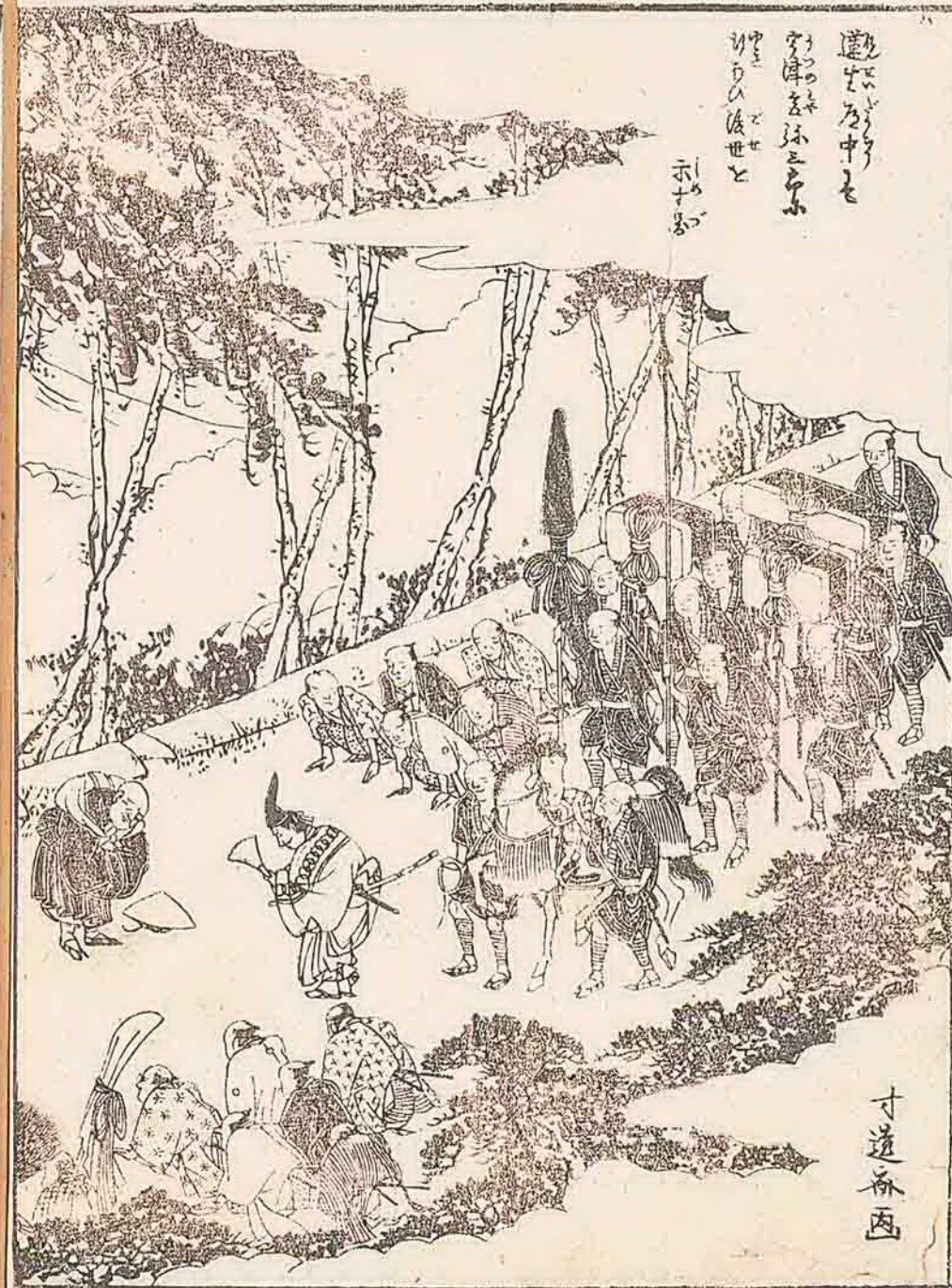
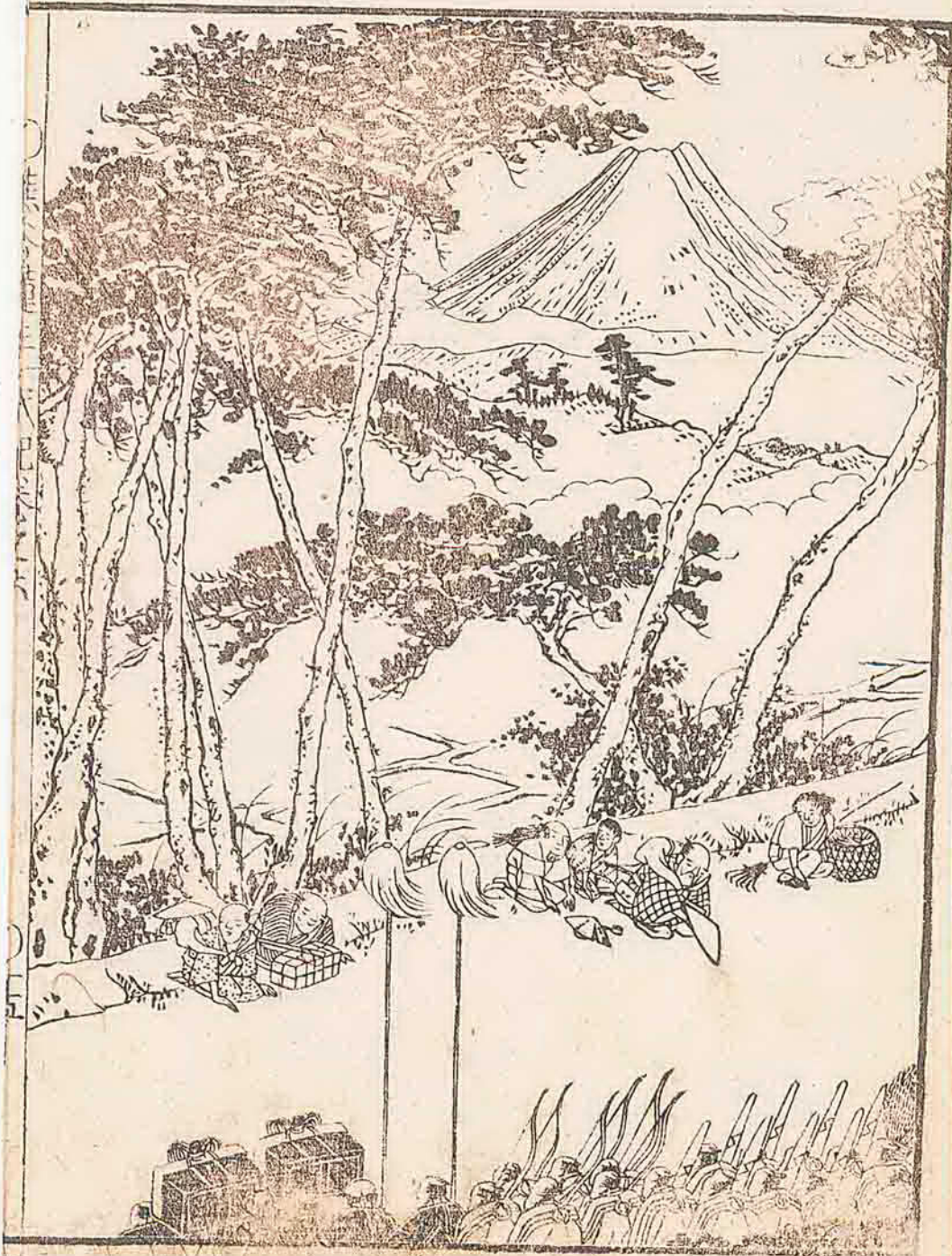
願假せり。中ま津を三郎為守とけり。那所堂田の

んてまうと上洛の所おと人を存のまも。也。御弟子とる

ま。その解一向を授けし者三十餘人おれま。まより

建久七年のま。蓮生入道ま。上洛とちまんとま母と

練めてしけり。ま。ま。後上人ま。蓮生り。僅



遊生乃中七
 字津左保三と云
 中七
 初より後世と

示す

白名道生二仙言卷之六

十四

寸道新函

親わつて置てもくわつても嘆いたまふとてそれとまんまんの付の定定を成
凌ぐんこそ紙子とあそそ希くはよ
後若達生

いりへの儘よすたる紙夜ハ風の神イ知も無うぶりたり

頼朝公此に御基蓮生不対面し事

并に然若横れ名号の事及蓮生此老母大に生れり

安辰終りて八月終りに下つて。粟生野に若若をよゆり

そのら蓮生あそひ古郷ふるり。母子も対面とらげ。又ハ

一族無縁の客とも化量方さんと。上人よいゆとすと御真

事此れ名号と移るひくるふ。上人御承知ハありたり。其初と

浄土宗門をとりんと。南都北嶺のら徒障化をたると

これ中をきた。上人これをちとめあひくるふ願ありちり也

いり延引にあぶりうは。蓮生坊ハまのの氣貸也ハ事

心いそれいつ里も御基蓮生の名号を持くとんと事

てまより御弟子れ中へ下されるふの事蓮生の名号我

悉り奪ひあそそ御必とてとらりくるが。ま勢別

を神宮へま移して。まより園東へ下向を。去年正月

十三日右大将頼朝卿御遊去る不儀で。御廟系の花

め小深倉よりつるふ。御基所ハ尼公とたりてあむつる

蓮生法師がまるととらせあひ御前よりして念佛乃

事と御たつひあふ蓮生がそく。易行易修の妙法して

六字果号小万善妙祥と備へ万徳所願此定号とらん

と五達十悪の罪人女人たりも。改悔のころらばと

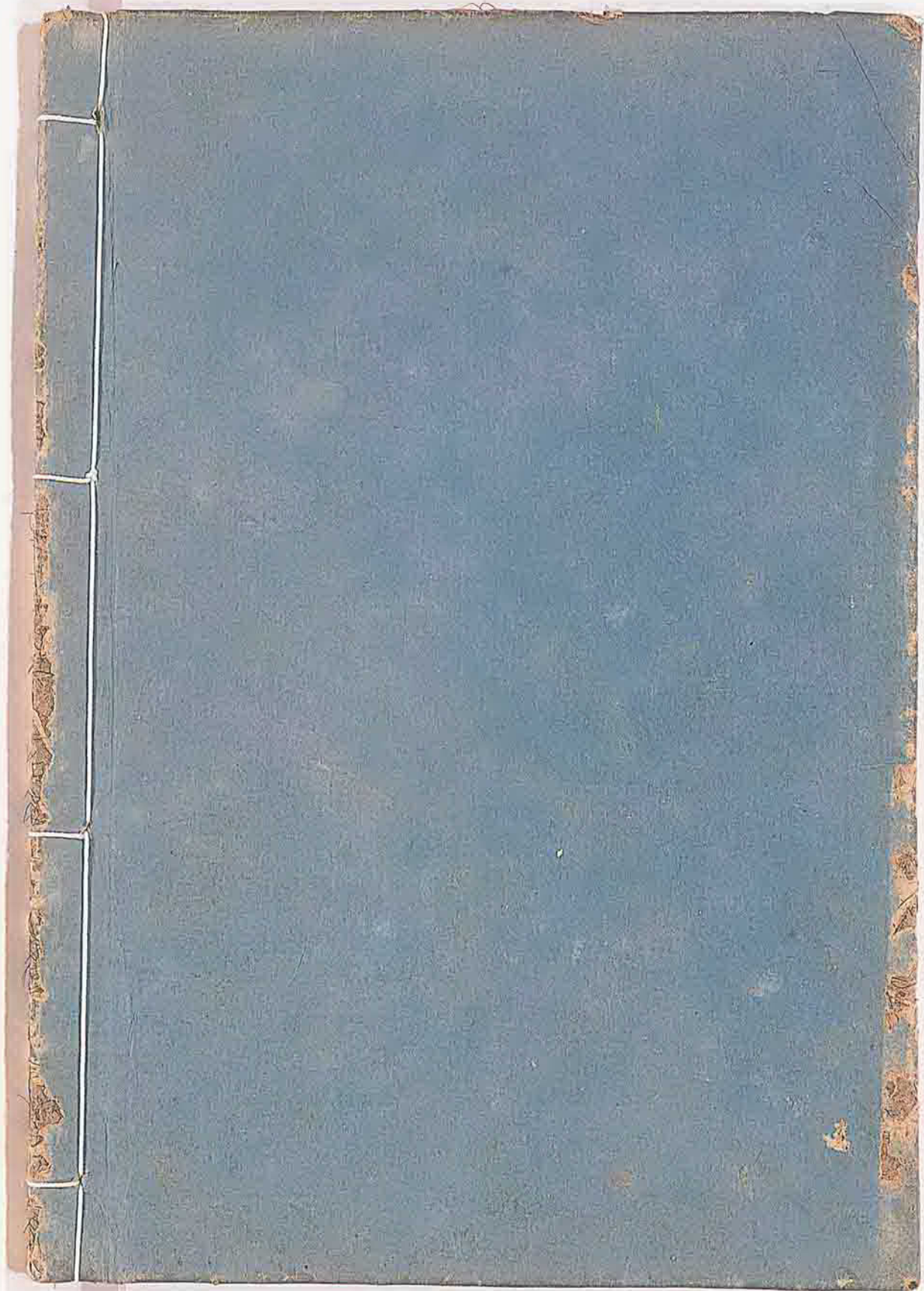
熊谷直生一代評傳卷之六

十五

蓮生此老母大化生之事

元治二年八月十五日、蓮生久元年と改元あり。老母ハ
 此年八月十五日、極老リて過て伴ニ遷入。及ハ所ニ例を
 去ずて共ニ志仏を勸む。及テ之ノ人々其孝心ヲ感ゼテ、御
 其年八月十五日、蓮生久元年と改元あり。老母ハ
 此年八月十五日、極老リて過て伴ニ遷入。及ハ所ニ例を
 去ずて共ニ志仏を勸む。及テ之ノ人々其孝心ヲ感ゼテ、御
 其年八月十五日、蓮生久元年と改元あり。老母ハ
 此年八月十五日、極老リて過て伴ニ遷入。及ハ所ニ例を
 去ずて共ニ志仏を勸む。及テ之ノ人々其孝心ヲ感ゼテ、御

熊谷蓮生一代記卷之六終



熊谷蓮生一代記

終七

L2589

7



慶應二年

宮十一月来之

担任所 岩川村

稻倉 仔六



總管蓮生一代記卷之七

目錄

蓮生武忍ノ一字蓮生は然上人所傳也事

并系傳蓮生然寺靈湯ノ事

蓮生鳥居ノ事

并上品蓮生發願靈臺ノ事

佐助上人所感者ノ事

并上人蓮生曼陀羅ノ事

6099 9

龍谷志家又入道と古卿へ遊ぶ事

并ニ法然上人志家が孝人と感ふ事

蓮生村忌の市ふるれと云ふ事

并ニ將志家及一族に遊まむ事

蓮生再びふるれと云ふ事

并ニ上品生を弄む事

龍谷蓮生一代記卷之七

蓮生武州へ入道上人仲清と云ふ事

并ニ系極法然寺靈場と云ふ事

文集卷第十五虚空藏菩薩の曰。一切の菩薩所縁乃端然

修以念せと利益を。比るは如来の神力也。己僅小人界の經に

こうけて。稀に逢がされ佛の教は傳り。腹眼の須臾波のくは浮

およぶまよふ事。されば蓮生母れ一周をも終りたり。云々と云ふ事

と云ふ夜と云ふ事。是と云ふ所を。彼は此より。拒拒し。云々と云ふ事

と云ふ事。帰途と云ふ事。教化と云ふ事。五藏の道徳を。教へ。其の

が。これと云ふ事。化を。云々。故。八。云々。佛の。云々

此蓮生法師と最初と云ふ事。されば法然上人も。是と云ふ事。故。東

の河津陀蓮生佛とまひたる。それより蓮生武加ふ一寺と建之して
 徳谷と号し。法然上人の真影をなすとて。寺に仕せり。年々徳谷
 なる。ちりにあつた。教を疑ふ中に出せり。都に我有縁の地方と
 信ひて。べとのあふ草中。大に驚かされ。受て後。即ち彼を疑ふを
 守り。釈を日小。徳を礼法。小やう。上人は。偈一。甘り。まより。故の。門と。其不
 成。起。と。いふ。或日。我。能。せ。れ。地。也。一。く。佛。小。悟。東。洞。後。と。い。ふ。一。く。不
 願。を。も。志。疑。勿。ち。人。聖。石。の。ご。く。ふ。か。を。白。あ。む。さ。す。が。此。大。力。剛。勇。の
 蓮生。方。し。も。一。足。を。む。じ。と。徳。に。依。ね。ば。善。中。ふ。若。あ。ひ。る。有。縁。の。地
 方。人。を。上。人。の。何。ひ。ま。り。た。ら。ば。上。人。の。ご。ま。へ。く。其。所。は。道。場。と。建。て。念
 佛。之。味。を。切。ぎ。と。れ。仰。せ。り。と。蓮生。也。と。け。あ。は。一。寺。と。建。て。て
 かの真影を安置せしむ。

今蓮谷山法然寺に在り。此、法然、徳谷、武加、の、師、と、す。此、師、乃、相
 好と号して。蓮生、と、稱。す。此、師、の、言。を。受。け。て。後。の。所。を。見。て。此、師、の、自。作。と。述。せ
 也。師、の、深。志。を。裁。び。自。作。の。本。像。を。附。画。し。あ。ら。ふ。あ。ら。は。此、教。を。見。たり。又、聖
 賢、の、言。を。た。も。つ。た。ま。せ。り。あ。ら。ふ。あ。ら。ひ。付。室。あ。ま。り。あり。旧。地。津。小。河。東。洞。後。西
 今、元。は。法。然。寺。所。と。て。後。世。系。極。後。小。河。の。南。ふ。う。つ。と。

亦蓮生武加則徳谷に在り。法然上人の真影をなすとて。寺に仕せり。年々徳谷
 なる。ちりにあつた。教を疑ふ中に出せり。都に我有縁の地方と
 信ひて。べとのあふ草中。大に驚かされ。受て後。即ち彼を疑ふを
 守り。釈を日小。徳を礼法。小やう。上人は。偈一。甘り。まより。故の。門と。其不
 成。起。と。いふ。或日。我。能。せ。れ。地。也。一。く。佛。小。悟。東。洞。後。と。い。ふ。一。く。不
 願。を。も。志。疑。勿。ち。人。聖。石。の。ご。く。ふ。か。を。白。あ。む。さ。す。が。此。大。力。剛。勇。の
 蓮生。方。し。も。一。足。を。む。じ。と。徳。に。依。ね。ば。善。中。ふ。若。あ。ひ。る。有。縁。の。地
 方。人。を。上。人。の。何。ひ。ま。り。た。ら。ば。上。人。の。ご。ま。へ。く。其。所。は。道。場。と。建。て。念
 佛。之。味。を。切。ぎ。と。れ。仰。せ。り。と。蓮生。也。と。け。あ。は。一。寺。と。建。て。て
 かの真影を安置せしむ。

第一念佛の行ハ彼佛乃を疑ふ中に出せり。都に我有縁の地方と
 信ひて。べとのあふ草中。大に驚かされ。受て後。即ち彼を疑ふを
 守り。釈を日小。徳を礼法。小やう。上人は。偈一。甘り。まより。故の。門と。其不
 成。起。と。いふ。或日。我。能。せ。れ。地。也。一。く。佛。小。悟。東。洞。後。と。い。ふ。一。く。不
 願。を。も。志。疑。勿。ち。人。聖。石。の。ご。く。ふ。か。を。白。あ。む。さ。す。が。此。大。力。剛。勇。の
 蓮生。方。し。も。一。足。を。む。じ。と。徳。に。依。ね。ば。善。中。ふ。若。あ。ひ。る。有。縁。の。地
 方。人。を。上。人。の。何。ひ。ま。り。た。ら。ば。上。人。の。ご。ま。へ。く。其。所。は。道。場。と。建。て。念
 佛。之。味。を。切。ぎ。と。れ。仰。せ。り。と。蓮生。也。と。け。あ。は。一。寺。と。建。て。て
 かの真影を安置せしむ。

第一念佛の行ハ彼佛乃を疑ふ中に出せり。都に我有縁の地方と
 信ひて。べとのあふ草中。大に驚かされ。受て後。即ち彼を疑ふを
 守り。釈を日小。徳を礼法。小やう。上人は。偈一。甘り。まより。故の。門と。其不
 成。起。と。いふ。或日。我。能。せ。れ。地。也。一。く。佛。小。悟。東。洞。後。と。い。ふ。一。く。不
 願。を。も。志。疑。勿。ち。人。聖。石。の。ご。く。ふ。か。を。白。あ。む。さ。す。が。此。大。力。剛。勇。の
 蓮生。方。し。も。一。足。を。む。じ。と。徳。に。依。ね。ば。善。中。ふ。若。あ。ひ。る。有。縁。の。地
 方。人。を。上。人。の。何。ひ。ま。り。た。ら。ば。上。人。の。ご。ま。へ。く。其。所。は。道。場。と。建。て。念
 佛。之。味。を。切。ぎ。と。れ。仰。せ。り。と。蓮生。也。と。け。あ。は。一。寺。と。建。て。て
 かの真影を安置せしむ。

樂を教りん人ハ先かきべに教ふ徳の由とつめて
上の事をしてい。義美行も志佛にお加ひりんとちひひ
りもも仕ひ。又奉教の志佛計もも是はし。吾身加
ハそ是こと一定とちひ。孝養乃のゆも中教ふありと。
堪ん小徳ひて勤まおり。又綱の門字れるも湯敷
のゆも。佛の教ふわぬ勤まては免てし。角てもおそく。又
近接の曼陀羅ハ大切おたり。まじ。そのれも次のゆも。唯
念仏と三万五万又六万一。ゆもおり。ゆも。交ま。生れ。ゆも。
ハ此善根のゆも。ハ。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
ゆも。其ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
の志佛と勤ま。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。

老母と年八十九業をて。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
年を。ハ。生待。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
養ふ志佛を。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。

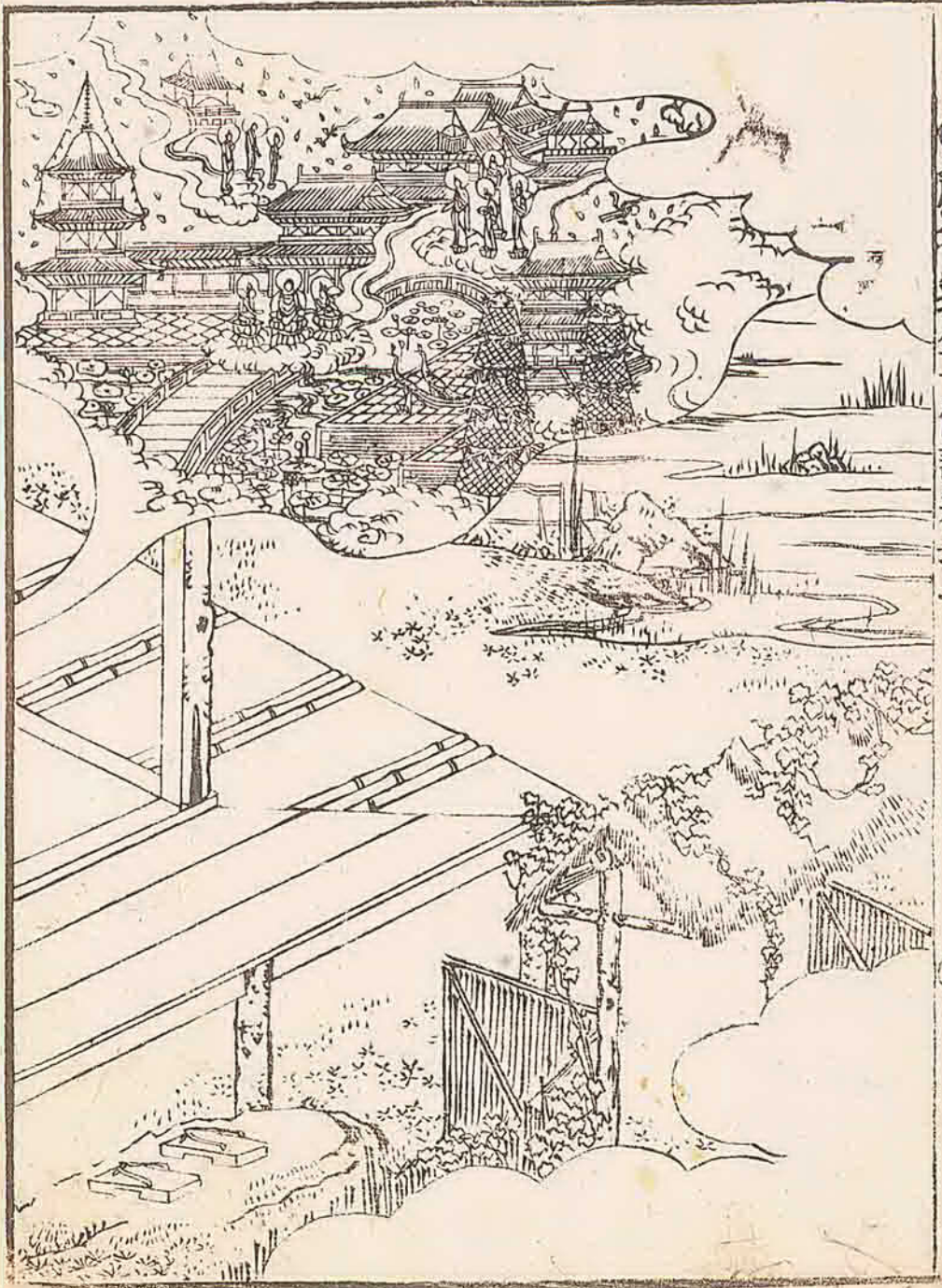
五月二日

源空

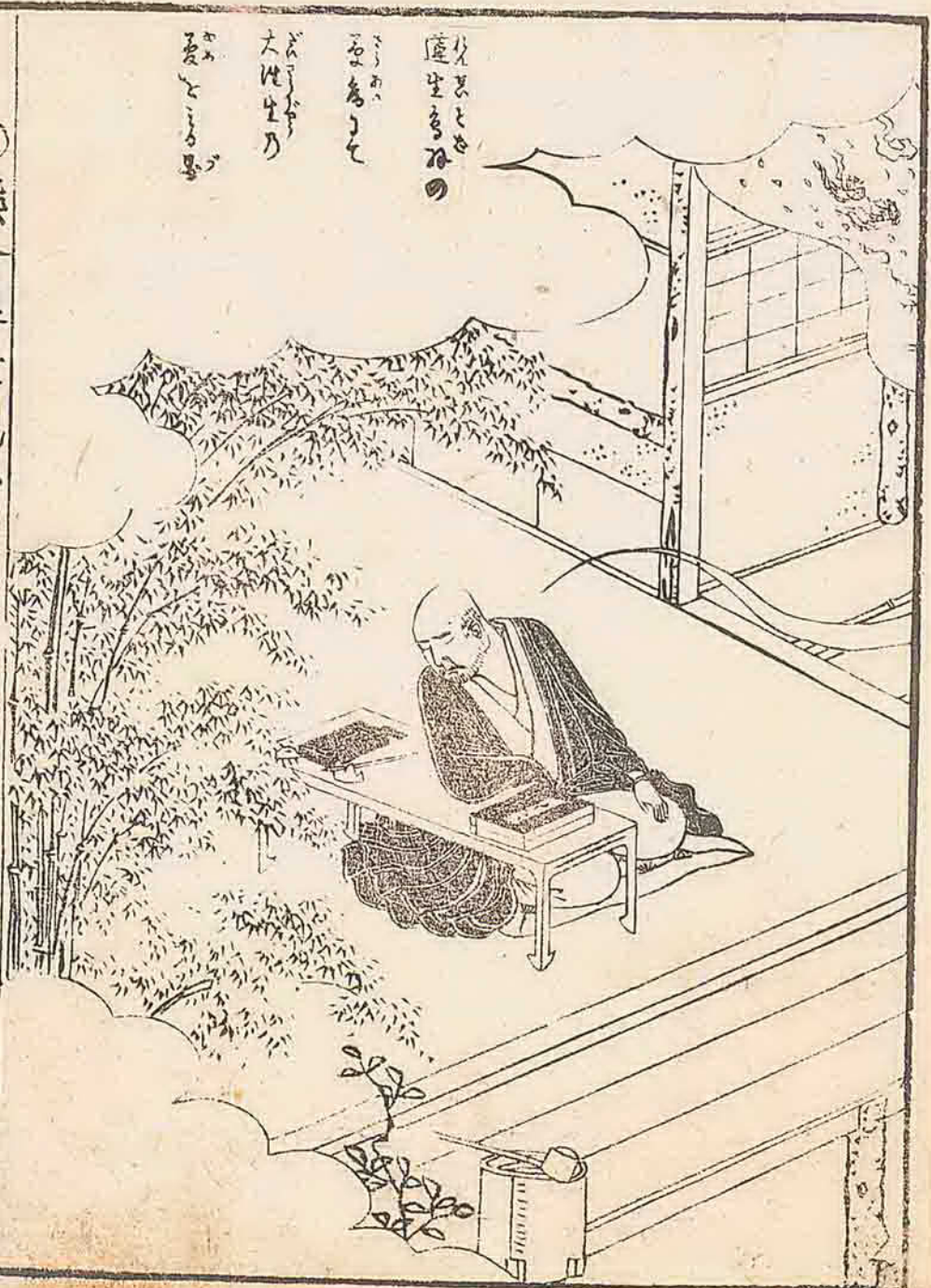
武藏國越前入道殿

返事

少む。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
ハ。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。
ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。ゆも。

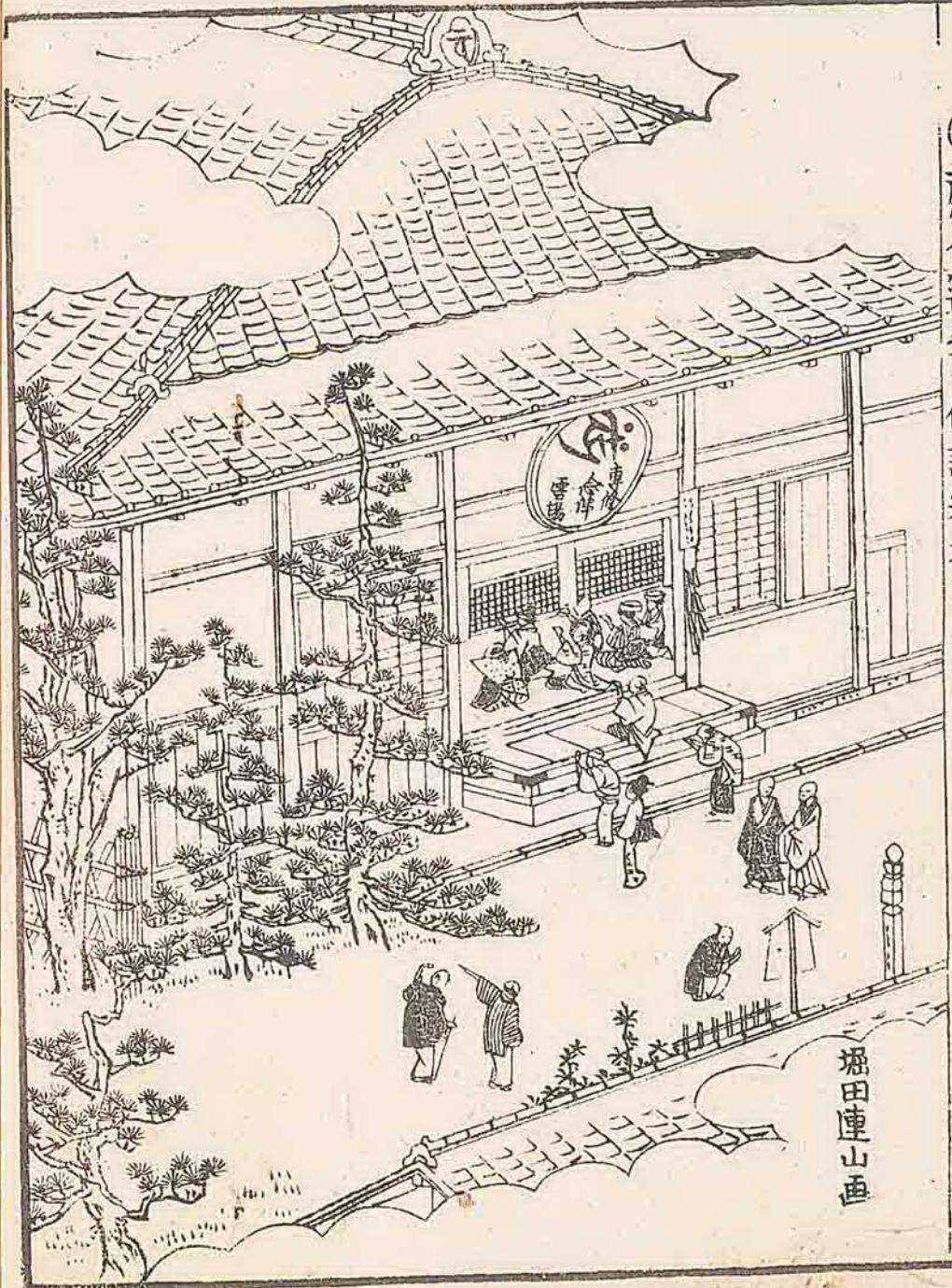


蓮生を
大生乃
愛と
石を
大生乃
愛と



あもご佛の申すをて蓮生預を殺して申こい。
極歩よせられたらん。身れたのしれあご下下生ちりも。
限りや。あれども天台の御釋お下下八品不可來生と作
られり。用づく一切の有縁の生一入ものことさす。奉迎
せん。縁の生をもちひと懸て吊んがあふ直生上上とせよ
せん。さあ履する。下八品もさす。動転を懸て清よさる。曰
慈心信敬す。下下の上生と懸ひさる。のしりや。奉代乃
ま上上と生する者一人も那と懸て。善房に修すやあをさす。
ふ。形と懸て。奉代よ上上と生する者有ま。死よあすも
万も高かる蓮生いりて上上と生するべきとさる。下八品
りはれすと懸て。あもご佛奉迎もつべし。これか釈や。是

たすらん。らんぞ次小鉢陀の慈悲うけあらんぞ。次は鉢陀
の預成徳の文破。是あらんぞ。次は釋迦の觀無量壽經
乃十惡の一念生五逆の十念生。ま。阿鉢陀經の若ハ
一日若ハ七日念佛生。ま。二方恒沙の諸佛の徳滅又
善守和尙の下至十聲一聲。寫定得生。生れ。釈又何よりも
觀經の上上と生の二心具足の生。ま。善守乃釈ふ
具足二心必得往生也。若サ一心即不得生。ま。專修
の若ハ千ハ千ちり。釋。さる。若等佛の教とひ
佛の言とひ。善守の釋とひ。若連生と。迎ふ。あ。若
破。ま。善安結乃罪と得。ま。善守乃大聖の令
言。空うく。ま。又光明遍照十方世界の文。入此界

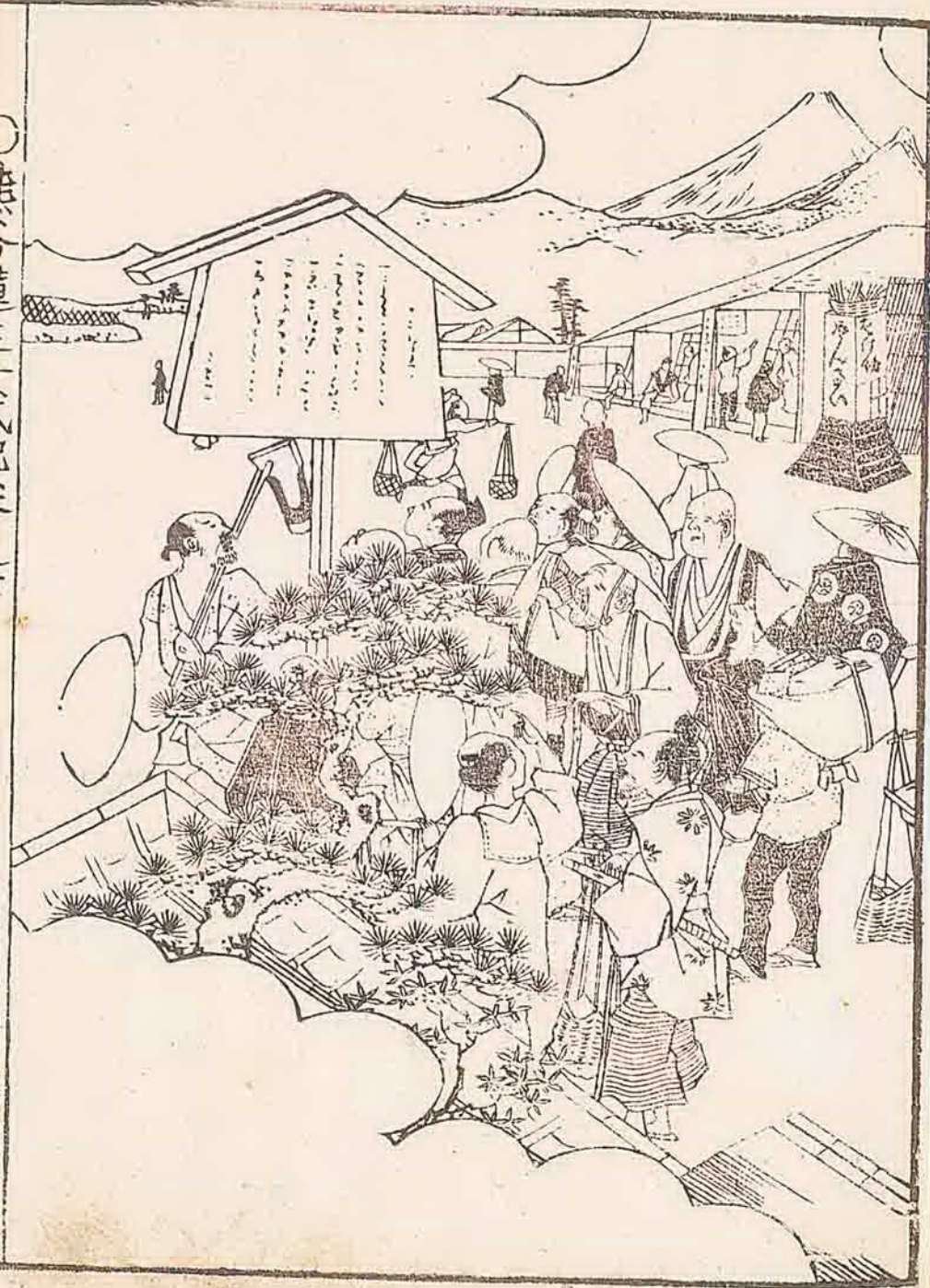
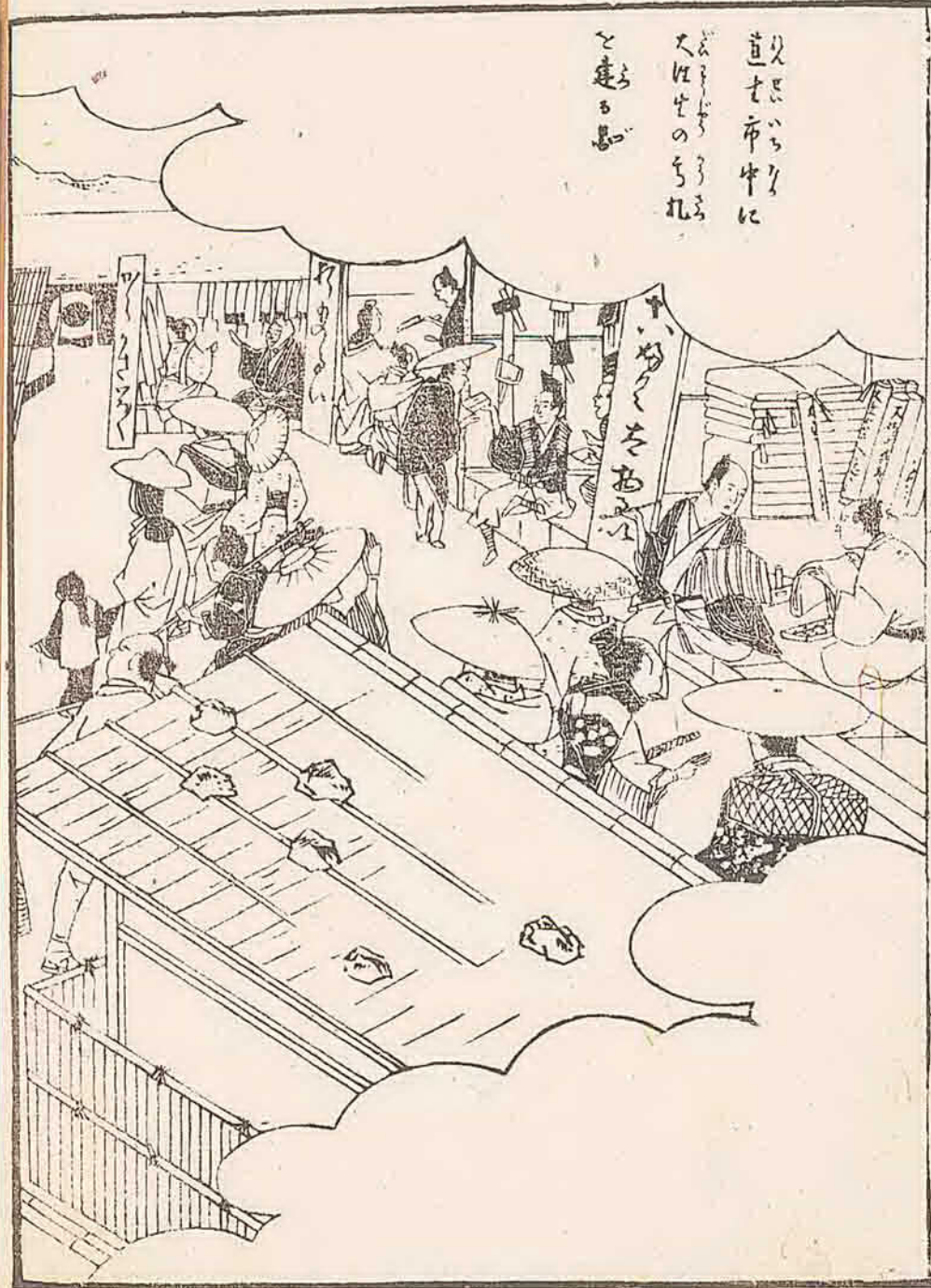


掘田陣山画

東極
慈光山
法光寺
の景



以思はら
直七市
中々に
久はせの
ちれ
と建る品



并三法然上人遺家が孝人と讃ある事

元久二年四月。小治郎直家上洛して。父蓮生が若中居り
まゐり申ける。いづれ早父上りも。所老神の幸あれ。何ぞ申せ
少て。所生生れ期をえそ。けり。んため。昨年の暮より。教
書林より。山て。清む。ひの。泉末と。登せ。せ。ども。父上り。都
終。せ。あ。ぶ。び。きの。旨。信。越。れ。け。り。母。夜。の。直。家。直。家。の。清。生。の。ま
清。生。の。り。ひ。ま。せ。ね。く。下。向。あり。て。申。ふ。う。て。終。せ。あ。母。も。是
の。ま。を。歎。き。や。さ。し。い。と。倍。をつ。う。て。清。む。ま。た。入。道。氣。を。致。て
直。世。の。身。ハ。い。づ。こ。少。終。る。も。何。ぞ。心。を。痛。め。ん。や。海。い。か。へ。し。
悲。せ。ハ。亦。未。方。る。繩。の。ぐ。ぐ。縛。て。生。死。を。出。る。こ。難。し。と。こ。
都。て。命。終。る。ん。ハ。い。づ。か。如。堂。あり。今。う。そ。い。右。郷。の。妻。執。り。も。

たり。母ハ汝が孝表をそせむ竹の石をうりわらんたを念佛の
本と相續して達せし極樂とてかあらず幸の達べしと
ゆ。く。し。う。す。す。べ。我ハ今。幸。申。ふ。う。と。申。ふ。者。を。て
生。を。待。ち。り。ま。そ。父。ハ。得。心。せ。し。れ。を。直。家。も。今。ハ。是。非。の
別。を。入。道。經。も。却。て。達。し。似。たり。ま。あ。ん。を。友。を。な。ら。て。
と。論。す。一。切。の。事。を。細。か。わ。げ。て。父。又。の。命。も。い。く。や。と。こ
方。く。喜。ぶ。を。何。と。我。幸。申。ふ。い。り。て。終。り。を。見。ぬ。ん。と。教。書。の
傳。り。か。る。又。の。入。道。を。母。ハ。孝。心。を。奉。り。し。る。の。事。終。終。成
ん。と。い。ひ。ま。う。向。母。又。の。命。心。け。後。多。く。い。部。は。あり。て。在。る。乃。日
と。く。り。お。書。け。孝。乃。と。圖。を。隔。て。う。す。う。し。小。似。たり。様。は

父の道小背く者あり。此上都とて命終あり。父の義終と
えへと猶うかべし。それごとく君は仕て身終ふはまらば
されど父の義終の御りすれども。馳登るべし。是は悟あり。
此中委細よりせむも。父の得んを。經て終むは却て
氣を換られん。後より上人乃所一言を添はれて
師必法よりべき。信念あり。遠背あり。師より上より
御義誠と慕りて。後より師との間念佛と勤むるに。
近隣の朋友より被官に氏より。念仏志より。後せ
是より。そとも。信念して。生を。遠都乃
人の信心のたより。都より。智識上人。おり
まして。御義化あり。佛人の信心も。日よ。増はらん。を。

あては父入道ののび。これ勤あり。信心を發するたぐい
或ハ信トあり。いハ不信心疑ひ。いさ。父せざる者あり。下。
可ふため。殘命の回ハ人をも勤めて念佛と勤む。
自身に勤候を。いげ。人。且ハ人へ所報。是
ちり。いと。誠と。す。上人。真。その。至孝を
歎ト。信。事。父の人。ため。い。一。言。も
。て。行。蓮。生。坊。と。い。通。一。小。作。あり。是
。歸。ふ。し。人。を。す。め。て。志。仏。門。よ。引。入。せ。れ。よ。一。人。志
佛。門。よ。入。と。一。佛。を。遣。送。の。功。徳。より。廣。き。方。り。す。め。て
志。仏。に。歸。ま。ぶ。き。人。の。機。と。あ。り。た。千。里。と。も。ま。る。し。と。ん。耶

佛ハたと大ニ世界火煙にほらもあふ其火中を通りて
ても佛名とそけいこそとあしめさる。ゆへ佛名を人の動むこと
又もひて大善根なり。ゆへて上品上生れ極楽とそを來極園
して人を助んとす事也。當來ハ極楽とそくハ幸也。善緣の
者を引寄して一蓮託生の事とそを遂んと頼ふこと。蓮生は
きふなり。互ひハ佛命あらず。あんなごとと通せんこと。面談ふ
等。今ハあつともまごぬ浮世の夢なり。今生れめんたん
今ハ限まり。極樂の再まをなふあつとも。蓮生は蓮生のこととそ
殘情と果さんと作らる事也。蓮生一言の子細もたす。即
ごふんいともやるといふこととそりりりる

蓮生村居の市小高れをさる事

并ニ 憐直家乃一孫(建書)の事

おも入道啼玉の後ハ又々法人を化守し其傳ハ海終二人急
の白紙をさふせり。結ふ建永元年ハ八月ハ一孫を築め。秋
明年ハ二月ハ八月ハ大生生とそつる。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
人ハ来りて生させね子とらんごと。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
村居ハ市小札をさる事也。おそ年ハ常めは。建永元年
の生をむけし。我子小治郎。建永元年ハ。建永元年
秋秋縁者ハ死後の事也。頼おき。ゆへに。遺書ハ一通を
跡と其文ハ曰

至子ヲ縁々後々可令存知旨

一 先祖相傳所領安堵之御判七并保元年中以來至建之

年中軍忠御状二十一通有之

一 對三皇不可成道後并武道可守之事

一 上人御筆所書并迎接曼陀羅可成信心事

右三箇條の外依其身器可覺悟者也仍置狀如件

蓮生在判

美元元年正月

初も二月八日ふちりけとて高札の趣とて之國の宰道依男女蓮
せ坊に蓮生とて念佛の功德をたれとて。我もくと慈香
が寓所は解集する若歳五方とふ其教を志し蓮生坊ハ表明
に沐浴して身と信り。礼盤ふのりて念佛教百遍と唱る。後人も
同善ふと念仏をさち人蓮生今や目とす。一とてり人信たるふり

蓮生あつくりありて念佛とぞめ。眼を冴とて後人むつひ

々ハ今日れは生延引とて。佛の所告ちり來九月四日

ふかす。とて蓮生とて。吾其日來陰あて。とて。礼盤

より下るあて。解集れ。無とて。念仏の功德も。蓮生

あれ。ちんぞ。同。人。回。て。死。す。日。と。知。る。と。て。蓮生

て。や。今。年。の。と。去。年。より。も。高。札。と。て。滅。と。り。ひ。ま。り。の。

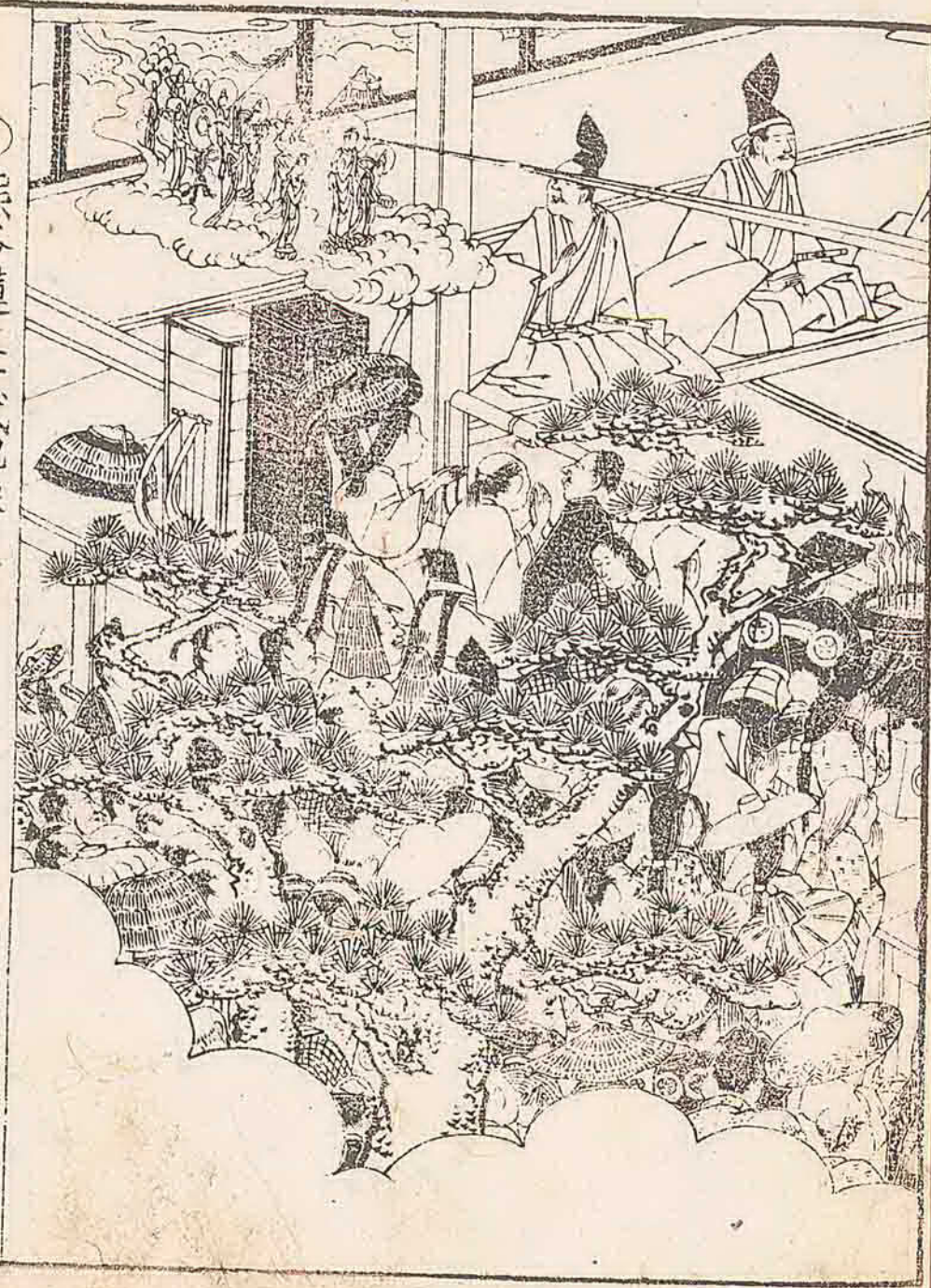
我。が。信。り。た。り。と。蓮生と。朝。等。の。一。り。と。若。く。て。一。り。と。

慈。香。が。一。族。良。等。を。守。て。如。お。さ。ひ。蓮生と。む。ひ。ひ。り。と。

と。結。ぶ。ひ。の。心。を。信。り。と。け。の。ら。か。ま。り。と。面。目。を。さ。り。

政。方。り。と。歎。き。悲。し。と。け。是。だ。入。道。後。て。我。既。入。滅。と。せ。り。あ。ふ。

孫。陀。如。來。告。む。り。く。ハ。來。九。月。四。日。ま。を。蓮生と。待。と。と。と。蓮生



蓮生法師
上人の遺生
の事

のこゝろにふあゝず。まゝにせしむる備人いふやど小笠原ふらふも
春一くまきや何ぞ俗人れあまのしにあゝず。来九月に日ふの
日。生と通ふ。その朝ハ清べきなり。あゝずらんよわくも
事なれと。せしむる世に。それよりまゝと所くと近思り。まゝ
とす。免多き。まゝの事。して法人信仰せむ。免損の内坊と
そ指して後ハ一と蓮生坊ハ耳ももくけを居らるる

蓮生再喜れと立大生生の事

并上品生奇撰の事

抑日本市の始りハ大和國辰の市を初とせん。そのら後
にどまる。此村忌市と云ハ武生郡玉崎玉郡とあり。徳谷乃
郷ハ崎玉大里ハ西郡小崎也。徳谷玉崎玉郡とあり。徳谷乃

申れにわたりて。り後事里をりじうハ張りき市を

ア一ッ年うつりて今ハ形ざり小邑あり。それかかる

高北ハ水也。中ノ度のがく法人ありまじも理り。まゝ

うつりやす。まゝもす。だて九月に日ふを付く。まゝ

まゝと立て。初を日。いふく九月に日ふ。生と通ふなり。

いづれもまゝとて。人の疑ひと。まゝと。一様。疑ひ

まゝ止也。万一此まゝ相違。ゆか。初。上。海。と。まゝ

月。解。ヤ。まゝ。事。ハ。か。ま。ま。の。用。なり。い。ま。ま。を。蓮。生

まゝ。女。の。佛。の。法。也。まゝ。まゝ。止。り。た。り。まゝ

此まゝの生と。絶。なり。だ。既。ま。ま。違。て。初。ま。せ。し。ま。ま

あゝん。表。いつり。者。なり。い。れ。た。也。大。切。の。志。也。ま。ま

つくべし。さすれば今我大生を遂と法人の心を成す。尊
 修念佛門に入る事多うあべ。是別りかぶる事なり。その用
 意とてうなる事。親族の輩よりきりとおりの事。今の止むこと
 あらざる。その後してありたる。蓮生五月の事はいさうかむ
 事ありけるが。九月初日堂より音樂を奏して後いさか音
 たり。此の音樂なり。叔をふたり一づつ。先達して集る。其の
 色とて歌くたりん。きりかきりまづりてんよ。この大勢の朝
 一の舞臺なる事。春なりも信じて盛なる事。市井おし。
 蓮生坊上人のごとく。未明ふ体法として修行の用をこたす。上人
 孫陀多迎の三尊化佛菩薩の形像と一補は易経せしむ。
 秘蔵しむひたる。蓮生坊上人に京師より武州へ入りける

とん。上人よりあつりたる。この上人は、いままんがが、ゆめ、この
 と。元久二年蓮生坊武州へ入る。上人より蓮生坊へ。上人は、
 の。能く秘蔵し、樹の相とあつて。上人より蓮生坊へ。上人は、
 樹とあつたの。樹、あつりたる。上人より蓮生坊へ。上人は、
 と。まゝ、その。まゝ、あつりたる。上人より蓮生坊へ。上人は、
 と。うけ、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 を。て、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 音。四、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 の。道、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 生。法、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 秘。蔵、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 の。こ、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、
 ま。り。非、あつりたる。蓮生坊の。上人より蓮生坊へ。上人は、

發とさう。發とさう。あつて。教心と云ふ事。ま教と云ふは。おまふれ。刻入。櫃のさ。大地。震動して。果音。響。紫。の。舞。場。前。目。の。ぶ。く。卯。の。時。ふ。く。り。て。世。を。西。の。こ。り。さ。た。り。て。家。の。こ。り。よ。あ。つ。て。一。時。あ。ま。り。あ。つ。て。病。を。お。と。さ。り。ぬ。蓮。主。師。が。大。は。せ。れ。雲。々。頗。は。疑。ま。し。か。ら。ず。薄。く。上。品。と。せ。れ。は。生。う。こ。づ。い。と。ぞ。や。あ。ひ。ら。る。

帝王編年記の事。考へて終ると記せり。亦。皇。紀。の。事。元。二。年。九。月。十。日。日。系。師。あ。ひ。の。藥。よ。り。終。り。と。執。と。あり。車。經。ハ。國。史。ハ。二。世。依。也。と。傳。上。の。傳。文。ハ。は。後。と。記。し。て。皇。紀。と。凡。是。耶。を。分。れ。と。す。一。置。せ。は。師。の。事。ハ。武。明。德。宗。の。時。德。宗。卒。ハ。遠。政。サ。レ。記。文。ま。と。の。白。り。り。德。宗。の。事。あ。り。武。明。德。宗。の。時。と。終。と。あり。

蓮生のひて。直。家。の。遠。言。と。る。ハ。我。生。生。の。と。れ。摺。相。あ。つ。た。ま。い。て。要。細。の。記。し。て。都。を。賞。法。中。へ。は。く。る。べ。し。と。い。ふ。ま。し。う。一。甲。人。奇。瑞。の。經。と。筆。記。し。て。都。へ。送。る。其。あ。も。む。さ。と。は。後。の。事。法。然。上。人。の。所。傳。へ。り。送。つ。る。是。よ。し。り。て。都。鄙。よ。か。れ。は。し。と。人。の。ま。は。る。目。出。と。れ。生。生。と。さ。う。ま。し。う。け。り。と。す。と。い。ふ。ま。い。た。ま。ふ。が。あ。り。が。さ。れ。

熊谷蓮生一代記卷之七 尾

九想詩繪抄

ひろかき 全部四冊

唐土の東坡居士の九想詩と多く必字しく宛たり老翁男女にやうし書る

右の書は板か来仕はおりろをかきやなれとあり後

大坂心齋橋通南又太郎町

大野木市五郎

京都衣棚通二條下ル町

細野四郎治

發行

江戸日本橋南堂丁目

須原屋茂兵衛

同 浅草茅町二丁目

同 伊八

同 日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 兩國横山町三丁目

和泉屋金右衛門

同 芝神明前

内野屋彌平治

同 日本橋通二丁目

須原屋新兵衛

同 室町二丁目

大坂屋藤助

京都三條通御幸町角

吉野屋仁兵衛

尾州名古屋本町通

永樂屋東四郎

大阪心齋橋通安七町

河内屋和助板

書肆

